

資料

(平成十年十一月)

第四十三回「合宿教室」(阿蘇)感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人 国民文化研究会

— “合宿教室” 43年の歩み —

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・目下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・関正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿 蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・網田洋一
40	〃 7年	厚 木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿 蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚 木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村聰一郎
43	〃 10年	阿 蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎

累計・参加人員

12,046名

第四十三回 ”合宿教室（阿蘇）“ 全参加者の感想文と短歌詠草



とき 平成十年八月七日（金）から十一日（火）まで四泊五日間

ところ 国立・阿蘇青年の家

参加総数 一九三名

目次

”はしがき“に代へて	……………	理事長・小田村寅二郎	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳	……………		5
”合宿教室“の日程表（四泊五日）	……………		6
第43回”合宿教室“のあらまし	……………		7
感想文と第三回目の”短歌詠草“	……………	参加者全員	31
短歌詠草	……………	参加者全員	93
あとがき	……………		126
カメラ・レポート25枚（33ページから81ページの左頁に掲載）	……………		

”はしがき“に代へて

小田村寅二郎（数へ八十五歳）

（本会理事長・元亜細亜大学教授）

昭和三十一年（一九五六年）の本会創立以来、毎年八月に、主として九州各地または神奈川県厚木市で、一年もかかさずに続けて来ましたこの“全国学生青年合宿教室”は、今年は第四十三回目といふ年を迎へ、熊本県阿蘇郡一の宮町にある「国立阿蘇青年の家」（初めて使用する会場）で、八月七日（金）から八月十一日（火）までの四泊五日で開催いたしました。阿蘇五岳の中でも一際目立つ高岳を間近に見るこの「阿蘇青年の家」では、朝の澄み切った大気の中で、国旗掲揚と体操が参加団体全員の参加のもとに行われ、研修の一日がスタートする。

北は北海道・青森、南は沖縄まで、全国津々浦々から馳せ参じてくださった参加者諸君（男女学生七十名、社会人二十四名を含む総数一九三名）は、少数ながら精鋭の集まりとなり、充実した合宿運営となりましたことは、助言者一同の認める所でした。

全員は、旅装を解く間もなく、開会式（八月七日午後二時）に列席し、東中野多聞君（東京大学修士二年）の力強い「開会の宣言」、続いて国歌斉唱二回、ついで「祖国日本のために尊い生命いのちを捧げられたすべての先人の御霊みたま」に対し、一分間の黙禱もくとうを捧げました。そのあと約二十分間を私が「開会の挨拶」をいたしました。そこでは、「終戦直後の大学では、戦争中に命懸けで戦ひ、生き残った若い人々が学園に戻り、国の再建につき真剣に討議されました。しかし同時に、戦前から始まってゐた（日本の国柄）からことさらに目を背けようとした）東大法学部をはじめとする学問の間違ひ、変形された国の姿が存続してしまつたのです」と申しました。そして「昭和十一年に私が強く指摘した東大の学風の誤りは正される事のないまま今日に到つてゐる訳ですが、もう一度、本来の日本の国に立ち戻るべき運命にあることを信じて、元気に勉強を開始して下さい」と結びました。

続いて、参加学生を代表して、伊藤俊介君（早大政経学部三年）が、この合宿ではお互ひに理解し合つて一生懸命わからうとして話しを聞くことが大切だと語りかけ、開会式後のオリエンテーションでは、合宿教室・運営委員長の小野吉宣氏（福岡県立嘉穂高校教諭）が、「豊かな経験をするためには心がいきいきと働いてゐなければならぬ。そのためには心を開いて合宿に取り組んでほしい」と訴へた。つづいて指揮班長の日比生哲也氏（福岡県立八幡中央高校教諭）により、合宿期間中の細部にわたる注意が披露された。

今回の「合宿教室」にお招きした講師のお二方ふたかたは、第二日の午前が、ジャーナリストの徳岡孝夫先生であられ、今お一人は、第三日目午前、明星大学教授、東京大学名誉教授の小堀桂一郎先生であられた。徳岡先生は「覚悟をもつて生きる」といふ演題で御講義をされ、ペルーのフジモリ大統領がゲリラを撃滅した勇気をたたへ「我が国のやうに合理的、金銭的にしか物事を考へられない覚悟無しの国には、覚悟した者（国家）の気持ちは分らない」と指摘された。また、小堀先生は、日本が国際化に対応していく上で受容して良いものと、決して譲つてはならないものがあることに留意し、「国語や民族的信仰といった文化は一つの民族のアイデンティティーであり、かけがへの無いものです。一人一人が文化防衛の戦士たるべき」と訴へられた。

他面、この「合宿教室」では、日本人であることの誇りを持つて「東京裁判史観」から一日も早く脱皮することによってその誇りを取り戻すことが、刻下の急務であると力説された。それと並行して、大学内での「友だちづき合ひ」は、上つらだけの遊び友だちではなく、「お互ひに相手の心を許し合ふことのできる友だち」を求め合つていくことを大切に、「眞の学問の友」が得られることを、先輩たる助言者たちが訴へてくださったことも有意義でした。「班別討論」「班別輪読」などの時間帯を通じて、参加者諸君は、「この「合宿教室」ならではの数々の収穫」を身につけてくださったことと思ひます。

ここに編した『感想文集』は、全参加者が「解散間ぎは“に”走り書き“で提出してくださったものです。紙面の都合で全

文をそのまま載せ得なかったことは、お許しをねがふこととし、各人の文の最後に小さい活字で載せてあるのは、各人がこの合宿で第三回目に創作してくださった「和歌」です。合宿中に二回の「短歌相互批評」で身につけられた力がうかがはれる作品と申せませうか。また、この「文集」の編集作業には、奈良崎修三氏（本会々員、日産自動車勤務）をはじめ、十名前後の方々（巻末の「あとがき」に人名掲載）が、公務・社務・学業の余暇をさいて取り組んでくださったことを、心から感謝申し上げます。

また、最後になりましたが、この「合宿教室事業」を行ふに当たりまして、本年もまた、朝野からお寄せくださいました多大の御支援・御激励に対しまして、会員一同と共に、心から厚く御礼申し上げる次第でございます。

来年（平成十一年）の「第四十四回合宿教室」は、八月一日（日）～八月五日（木）までの四泊五日間、静岡県御殿場市の「国立中央青年の家」（初めて使用する会場）で開催することが決定し、「合宿教室運営委員長」には、防衛施設庁勤務の山根清氏（数へ年四十四歳）を煩はすことになりました。改めて会員各位に格段の御協力をよろしく御願ひ申し上げます。



「第43回合宿教室」記念撮影（参加者193名） 於・国立・阿蘇青年の家

参加者

（学生班 三十六大学）（洋数字は参加学生数）

北海道大1 東京大3 金沢大2 京都大1

京都外大1 鳥根大3 九州大2 福岡教育大6

佐賀大3 長崎大4 下関市立大1 福岡県立大1

東北女子大5 東北女子短大3 東北栄養専1

早稲田大6 慶應大2 青山学院大2 立教大1

拓殖大2 法政大1 中央大1 日本大1

東京経済大1 麗澤大1 明治大1 福井工大4

同志社大1 北九州大1 九州工大2

九州産業大1 福岡工大1 九州女子大1

九州女子短大1 福岡女子短大1 東筑紫短大1

計 七十名（うち女子二十四名）

（社会人・教員参加者） 二十四名

（招聘講師） 二名（国民文化研究会） 八十五名

（事務局） 八名（写真） 一名

（見学参加者） 三名

総計 一九三名

(社) 国民文化研究会・大学教育有志協議会 主催

第43回(平成10年)“全国学生青年合宿教室”日程表

	8月7日(金)	8月8日(土)	8月9日(日)	8月10日(月)	8月11日(火)
6:30		(起床)	(起床)	(起床)	(起床)
7:00	洗面・清掃	洗面・清掃	洗面・清掃	洗面・清掃	洗面・清掃
8:00	(7:10) 朝の集ひ (国旗掲揚・国歌斉唱・体操) 班別散策 朝食 (8:40)	(7:10) 朝の集ひ (国旗掲揚・国歌斉唱・体操) 班別散策 朝食 (8:40)	(7:10) 朝の集ひ (国旗掲揚・国歌斉唱・体操) 班別散策 朝食 (8:40)	(7:10) 朝の集ひ (国旗掲揚・国歌斉唱・体操) 班別散策 朝食 (8:40)	(7:10) 朝の集ひ (国旗掲揚・国歌斉唱・体操) 地区別連絡 朝食 (8:40)
9:00	講義 ジャーナリスト 徳岡孝夫 先生	講義 明星大学教授、東京大学名誉教授 小堀柱一郎 先生	映画上映 「天皇陛下とブラジル」 (9:20) 講義 国民文化研究会、副理事長 小柳陽太郎 先生	参加者による 合宿を顧みて 合宿運営委員長 小野吉宣氏 (9:10)	参加者による 全体感想自由発表 (10:10) (10:40)
10:00	質疑応答 (10:10) (10:20) (10:50) (11:00)	質疑応答 (10:10) (10:20) (10:50) (11:00)	質疑応答 (10:50) (11:00)	質疑応答 (11:30)	感想文執筆及び 第三回短歌創作 (11:40)
11:00	班別研修	班別研修	班別研修	班別研修	班別懇談
12:00	昼食	昼食	昼食	昼食	清掃 (12:10) (12:40)
1:00	班別自由研修 (1:30)	班別自由研修 (1:30)	班別自由研修 (1:30)	班別自由研修 (1:30)	昼食 (1:30)
2:00	短歌創作導入講義 福岡市立香椎小学校教諭 是松秀文 先生 (2:30) (2:40)	創作短歌全体批評 住友電工(株)生産部主幹 布瀬雅義 先生 (2:30) (2:40)	第二回短歌創作 (短歌提出) (2:30)	第二回短歌創作 (短歌提出) (2:30)	閉会式 (挨拶)国民文化研究会、副理事長 關千代田コンサルタント 代表取締役専務 上村和男氏 (2:00)
3:00	開会式 (3:00) (挨拶) 国民文化研究会、理事長 小田村賢二郎氏 オリエンテーション (合宿趣旨説明) 福岡県立基福高校教諭 合宿運営委員長 小野吉宣氏 (副運営委員) ・青年の家からの注意 ・福岡県立八幡中央高校教諭 合宿指導班長 日比生智也氏 (4:20) (4:30)	レクリエーション オリエンテーション 第一回短歌創作	第一回班別 短歌相互批評 (短歌提出)	第二回班別 短歌相互批評	解散
4:00	班別自己紹介 事務連絡打ち合せ (5:30)	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	
5:00	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	
6:00	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	
7:00	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	夕食 入浴 休憩 (短歌提出) (5:30)	
8:00	合宿導入講義 福岡県立春日高校教諭 吳島誠央 先生 (9:00) (9:10)	古典講義 福岡県立柏陵高校教頭 志賀達一郎 先生 (9:00) (9:10)	体験発表 中島法律事務所弁護士 中島氏 熊本市立西原中学校教諭 山方氏 北九州市立八幡南校技師 森田氏 飯塚市の飯房 (8:30) 国立病院九州医療センター 臨床研究部長 小笠友門氏 (9:00) (9:10)	講話 国民文化研究会、副理事長 (株) 寶通商店 会長 實邊正久 先生 (8:45)	
9:00	班別研修	班別輪読	慰霊祭 (9:40) (9:50)	夜の集ひ	
10:00	就床 (10:30) 消灯 (11:00)	就床 (10:30) 消灯 (11:00)	班別懇談 (10:30) 就床 (11:00) 消灯	班別研修 (10:30) 消灯 (11:00)	
11:00	消灯	消灯	消灯	消灯	

第四十三回 ” 合宿教室 “ のあらまし

第一日目

(八月七日・金曜日)

第四十三回全国学生青年合宿教室は、熊本県阿蘇の「国立・阿蘇青年の家」において開催された。「阿蘇・青年の家」での合宿教室開催は初めてであったが、阿蘇五岳の山麓に抱かれた施設は広々とした草原に囲まれ、そこからの眺望は外輪山を一望できるまさに雄大なものである。北は遠く北海道、南は沖縄からと、まさに全国各地から集ひ来た参加者は、青年の家玄関で受付を済ませた後、各自の班室に入り、初めて会った班員たちと挨拶を交はして開会式を待った。

開会式

第四十三回全国学生青年合宿教室は、東京大学修士一年・東中野多聞君の力強い開会宣言により幕を開けた。続いて、国歌斉唱の後、戦時平時を問はず祖国日本のために尊い生命を捧げられた全ての御霊に対し黙祷を捧げた。

次に、主催者を代表して登壇された国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生は、「終戦直後の大学では、それまで命懸けで国のために戦ってきた人々が学園に戻り、これから日本の国をどのやうにしていってらうのかといふことが真剣に討議された」と語られ、「命懸けで戦った人達の結集体としての日本の国は、もう一度本来の日本の姿に立ち戻らなければならない」と訴へられた。

続いて、参加者を代表して早稲田大学政経学部三年・伊藤俊介君が、「この合宿では自分が考へてゐることをぶつけ合ひ、互ひに一生懸命わからうとして話を聞くといふことができる。おほいに語り合ひませう」と参加者に呼びかけた。

次に、合宿運営委員長・小野吉宣氏から合宿趣旨説明がなされ、「豊かな経験をするためには、心がいきいきと働いてゐなければならぬ。自分で自分を励ましなが、心をひらいて合宿に取り組んでほしい」と参加者に語られた。

合宿導入講義 「学問・人生・祖国」

福岡県立春日高校教諭 與 島 誠 央 先生



先生はまづ、学生時代にある先輩から誘はれて参加した輪読会の事を紹介された。そこでは小林秀雄氏の「美を求める心」の輪読が行はれてをり、皆が一つの文章、一つの言葉を真剣に読み味はつてゆく姿勢に、先生は大変驚かれ、これこそ本当の学問の姿ではないかと思はれた体験を語られた。先生は、この合宿の目的は、一言でいへば言葉に対する感受性を養ふ事にある、と述べられ、小林秀雄氏の次の文章を紹介された。「美には人を沈黙させる力がある。絵や音楽がわかるといふ事はかういふ沈黙の力に堪へる経験をよく味はふ事に他ならない」

次に先生は「恋愛といふ人生体験はその人を一途にしてしまふ。それは非常に豊かな世界である」と述べられ、ソクラテスやプラトンの例を引かれて「一途になる心は何も男女の間に限つた事ではなく、男同士の友情や国を思ふ心にも相通するものだ」と言はれた。

さらに先の大戦で散華された戦没学徒・茶谷武氏の遺書や元侍従次長・木下道雄氏の「宮中見聞録」の文章を紹介されながら「我々は戦争といふ言葉に接して、戦争＝悪などといふ安易なイメージ・概念に左右されてはゐないだらうか。また同時に天皇といふ事に対しても同様である。もつとその時代に生きた人の姿、言葉に立ち返つて感じてみる事が必要ではないか」と

訴へられた。

先生は最後に、故郷奄美大島の「ヨイスラ節」といふ民謡を披露され、「恋心、国を思ふ心、言葉を読み味はふ心は、豊かな世界、何か大きな命に連なる喜びの心である。皆さんもさういふ喜びを感じる経験を、この四泊五日で味はって欲しい」と講義を結ばれた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、合宿導入講義についての班別研修を行った。まづ皆で講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかった事、重要な事は何かを話し合ひ、さらに班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて、話し合ひが進められた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後に行はれていった。一つの講義内容について皆で討議をするといふ事はあまり経験がなく、最初はなかなか意見が出てこないといふ事もあったが、班員がお互ひに打ち解けるに従ひ、次第に活発に話し合ひが行はれる様になり、真剣味を帯びた討論となつていった。

第二日目

(八月八日・土曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。今合宿の「朝の集ひ」は従来と違って、「青年の家」の合同の朝の集ひに参加するといふ形で、他団体と共に行はれたが、好天にも恵まれ、雄大な阿蘇の外輪山を望みながら、さはやかに国旗掲揚を行ひ、体操をして、一日の研修を心新たに迎へた。

講義 「覚悟をもつて生きるとは」

ジャーナリスト 徳岡孝夫 先生



徳岡孝夫先生は、「覚悟をもって生きるとは」といふ演題で御講義をされた。

世の中のことには九十九%は金があれば解決してしまふ。日常生活や人生の九十九%は、合理的、理性的に処理できてしまふ。ところが、人は、時として思ひがけない時に、一瞬のうちに覚悟をしなればならないことがある、と御講義の口火を切られた。

駅のプラットホームから列車のレールの上に転げ落ちたアル中の老人を助けるために、前途ある若者が死んだといふ記事を新聞で読むと、一種畏敬の念に打たれる。何がこの青年をしてこのやうな行動に走らせたのか。人に神が乗り移ったのではないかと思はせる強い心の働き、それが、おそらく覚悟といふものの定義なのでせう、と先生は語られた。

森鷗外の「高瀬舟」に話を進められた先生は、これは江戸時代の京都の話ですが、読んだら物が言へなくなる小説ですと語られ、情景が合宿参加者の脳裡にまざまざと浮かび来るやうな語り口で、御講義を続けられた。弟を安楽死させ、お上から二百文を貰ひ、笑みさへ浮べ晴れ晴れとした表情である罪人・喜助の述懐を聴いて、同心・庄兵衛は、我が身と引き比べて考へ込んでしまふ。先生は、覚悟といふものは、何も死に急ぐやうなものだけを指すのではない。喜助が抱いた「分を知る」といふことも、覚悟の一つなのです、と話された。

続いて先生は、十九世紀になって現れた社会主義思想が、分に甘んじてゐては駄目だといふ点で、この覚悟に真正面切つて反対した思想であり、九年前に、社会主義の一大実験場となつたソ連が崩壊するまでの間、二十世紀の世界を流血と憎悪の坩堝と化したことを回顧された。

続いて先生は、合宿参加者が共有する記憶の中で最も深く覚悟した人物として、ペルーのフジモリ大統領を採り上げられた。「大統領は、人質を取られた瞬間に、戦争が始まつたと咄嗟に認識し、覚悟をしたのだらう。戦争の目的は勝つことです。勝つためには、出来るだけ多くの人を殺さなければならぬ。これは、戦争における正義なのです」地球規模の熱戦を、ヴェトナム、中東の各地で死を覚悟して取材して来られた先生の御体験に基づいて、話は進められた。先生は、「事前通告が無かつ

たことを遺憾に思ふ」といふ、時の橋本首相の発言に驚かされたことを吐露され、「我が国のやうに、合理的、理性的、金銭的にしか物事を考へられない覚悟無しの者（国家）には、覚悟した者（国家）の気持ちは分からないのです。何故かと言ふと、それは説明できないものだからなのです」と述べられた。

次に先生は、平和と民主主義が存続すると、個人の利得の徹底的な追求が図られ、個人主義と集団エゴイズムが発達し、人権主義が助長されることを、具体例を以って示された。と同時に、それに対抗して覚悟の輪を拡げる運動が困難なことも示された。何故か。覚悟は、各人の心の中に密かにあるものだからです。覚悟は、自分で静かにするものだからです。覚悟は、誰にも押し付けることが出来ないものだからです。ただし、あまり簡単に覚悟はしない方がよい。そして、「覚悟とは死ぬ覚悟とは限らない。蛮勇は、誉めたものではない。行動の前の熟慮、思慮を裏付ける教養が無ければならない。その上で一步を踏み出す勇気がなければならぬ。本を読んでもるだけでは駄目なのです。神に近づくやうな覚悟を持って人生を生きてゆく、これが立派な生き方なのだと思う」と先生は語られた。

最後に、ヴェトナム戦争最後のサイゴン陥落の前日に、イギリス・デイリーメール社のヴィンセント・マルクローン記者が示した「覚悟した者の勇氣ある行動」を回想し、御講義を締め括られた。

短歌創作導入講義

福岡市立香椎小学校教諭 是松秀文先生

先生はまづ、今回の合宿で三回もの短歌創作の時間が設けられてゐることに触れ、最後に短歌を作る時に、合宿運営委員長を始めとする主催者の意図、短歌を作ることの意義が皆さんにも分かってくるのではないかと述べられた。

次に、歌が創れるようになるポイントは、まづよく話を聴くこと、そしてよく物事を見つめることであると語られた。また、「なぜ、短歌を作るのか」という視点から、新聞「歌壇」の短歌を紹介されながら、作者のことを知らなくても、その歌から



自分の心に響いてくるものがあること、そして一つのきっかけで歌が詠めるようになるといふことを語られた。

続いて、島根県隠岐で生活してゐる十九才の青年とその母との心の交流を、彼らが詠んだ短歌を通して描いたビデオを上映され、自分の気持ちを見つめて素直な気持ちで詠めば、心のこもったいい歌ができる。そして、この歌を一生大切にしたいと思へるような自分の心に残る歌がこの合宿の中でも生まれてくるのではないかと語られた。

さらに、短歌創作にあたっての基本的な六つの留意点について、先生御自身の体験なども交へて説明された。

また、先生は、短歌が上達するためには本当に美しいもの、本物に触れるということ、つまり秀歌を鑑賞することが大切だとして、松の葉に玉のような雨露ができてゐる様子を詠んだ、正岡子規の十首の連作短歌を紹介され、子規の観察力の素晴らしさを語られた。

先生は最後に、宮中歌会始について触れられた。まづ、この歌会始に入選されたことのある亜細亜大学名誉教授の夜久正雄先生の「日本国民の内的の統一感のふるさとがここにあると感じます。歌を詠むことの意義もまたこの儀式によって象徴されてゐるやうに感じます」といふ言葉を紹介された。そして平成十年度の宮中歌会始の様子を収録したビデオを上映され、「一般の方から天皇皇后両陛下のお歌までが一つの場で紹介される、短歌といふものを通じて心が通ひ合ふ世界があるといふ非常に素晴らしい文化を持つてゐるのは日本だけではないか」と語られて御講義を終へられた。

レクリエーション

講義後、参加者は青年の家周辺の草原に散策に出掛けた。例年は夏のこの時期も涼しい阿蘇山麓であるが、今年は近年にない暑さで、日差しも強かったが、参加者は班毎に思ひ思ひのルートを設定して、大草原を歩き、班友等と楽しいひとときを過ごした。



先生は始めに、参加者に高校時代を振り返って欲しいと促され、其処で何を教へられ、そして何を教へられなかったかといふ重大な問題提起をされた。即ち同和問題に代表される「人権教育」と戦争の悲惨さと我が国の罪悪のみを論ふ「平和教育」は、その実態が政治問題としてのみ論じられ、国民としての共感がどこまであるのかといふ問題が全く無視されて行はれてゐる。またそこでは、歴史の流れの中で物事を考へる視点が完全に欠落してゐると喝破された。そしてその背景として、外圧や混乱を客観視し時代を克服する「言葉」の不在に言及された。先生は、遠く聖徳太子の御事業を偲ばれ、

危機に陥つた時代が太子の力によってどのやうに展開されていったかを、黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の序説の一文を味ははれつつ、六世紀我が国が直面した、氏族制度による内政の混乱や任那復興といふ外交問題と仏教導入の可否をめぐる錯綜した時代背景を生き生きと語られた。そして太子の大改革を支へた揺ぎない結晶としての「憲法十七条」が、歴史を貫く厳しき法（り）として今日まで国家の根幹として意識されてきたことを訴へられたのである。

次に先生は西洋との接触に際して夫々比類の無い反応を示した新井白石、吉田松陰、勝海舟を紹介され、特にペリー来航に對して、それが日本の長い歴史の中で画すべき一大国難と直観した松陰の文章に触れられ、「実に鋭敏ですね。しかし下手をすれば日本は植民地になつてしまふかもしれない国家の大変が目前に迫つても、眠るやうにして見てゐる者には見えないのです」と鋭く我々の肺腑を衝かれた。

続いて明治天皇が明治の初め、国是として下し給ふた「五箇条の御誓文」が聖徳太子の「憲法十七条」の御精神を彷彿させるものだとの御見解を示され、それが昭和二十一年、年頭の「新日本建設の詔書」の冒頭に昭和天皇がお示しになった、ただならぬ思ひに繋つてゐることに言及され、「時代を克服する言葉といふものが我々の祖先によって受け継がれて来たが、現代

はひ弱になりつつあるのです。さういふ時代を超えようとする言葉が見えない、何故なのか」と迫られた。そして最後にスイスが国家をあげてその民間防衛に腐心してゐる現状を紹介され、「スイスは国家全体が一つの気概を持つてゐる。日本人は平和が大事だ大事だと叫んでゐるが、国際ルールさへにも無知では何の力にもならないではないか、日本人は国を守る気持すら持つてゐないと周辺諸外国に知られてゐるのではないか」と痛憤され講義を終へられた。

第三日目

(八月九日・日曜日)

講義 「日本人はどう生きるか——『国際化』の要求と民族文化の防衛——」

明星大学教授・東京大学名誉教授 小堀圭一郎 先生



先生はご自身の体験をふり返りながら、昭和二十年代後半からの「歴史は進歩するものであり、そこに参加する事は青年の輝かしい使命である」といふ時代の風潮と、現在の「国際化(グローバル化)」といふ言葉が最善の如くもて囃される風潮について、その誤りと危ふさを指摘されつゝ、かうした風潮に見られる普遍性への信仰といふ観点から日本の歴史について話を進められた。

まづユーラシア大陸の東端に位置する日本国の地理的意味、歴史的背景を溯りながら、日本の建国との関係や影響についてふれられ、独立の自信により「神の道の独自性と仏教の普遍性を合わせ持つ強みを確立」されたと述べられた。又、自ら地球的、普遍的と自負する一神教的キリスト教文明の渡来に対し、民族的個性を自覚し、自己防衛意志があつた江戸幕府の対応の意義を講じられた。

その反動として、日本は安政の開国以来、自由貿易を行なひながら、欧米文化を普遍的と見做して進んで来た様々なことに触れられ、普遍主義の持つ実質に言及されて行つた。そして、国際化と云ふ普遍的基準への要求は、欧米の国家的仮面である

ことを認識しつつ、受容して良いものと、してはならないものの一線を画することが重要であるとされた。「つまり、経済的問題にはある程度譲歩して良い（経済は本来的に普遍的である）。然し決して譲つてはならないものは文化の問題です。文化は各民族の営みの様式であり、文化は本質的に民族的であり特殊なのです」と話され、「国語や民族的信仰といった文化は一つの民族のアイデンティティーであり、かけがへのないものです。我々の目標は一人一人が文化防衛の戦士になることであり、国際社会の中で、日本人としてのアイデンティティーについて、完全に語り得る人になることであります」と明言された。

このアイデンティティーの探求と確立は、難しい事だが、気概と意志があればやれるものであり、その気概を養ふ場として、この合宿もその一つであり、アイデンティティーのファクターとして、短歌創作により言葉の美しさと可能性を見つけることも、大いに役に立つと述べられ御講義を終へられた。

創作短歌全体批評

住友電気工業(株)生産技術部 布施 雅 義 先生



先生はまづ、「歌を詠む時に大切なのは、まごころを詠むといふことである。まごころとは、偽りのない真実の心という意味である。理屈や空想、あるいは自分自身に閉ぢこもつて怒ったり、人を憎んだりする気持ちを詠んだものは歌にならない」と短歌の本質についてふれられた後、情意をみがく道としての短歌について次の様に述べられた。

和歌は昔から生き方を糺す学問とされてをり、情意を健全に伸ばすための有効な方法論として我が国の数千年の歴史の中で確立され実証されてきた方法である。これを日本古来からの道という意味で「敷島の道」といふ」その後、参加者が作った歌について、具体的に批評、添削を進めてゆかれた。

先生は最後に、「相互批評とは上手な歌にするやうに短歌を直す事ではない。批評を受ける立場としては自分自身の学問や

生き方のレヴェルの問題として、自分自身の体験の中で情意を見つめて欲しい。批評をする側としては友達がどんなまごころを持って体験をしたのかといふところを理解し、そこでお互ひの情意を通はすといふ姿勢で望んでいただきたい」と、相互批評に望む姿勢について述べられ、講義を終へられた。

班別短歌相互批評

全体批評の後、各班に分かれて短歌相互批評を行った。歌をつくったのは初めてといふ参加者が多かったが、皆、一人一人の歌に心を寄せて、班付きの助言も得ながら、作者の思ひに沿った正確な表現を求めて心を砕いていった。人の思ひを正確に受け止める事、自分の気持ちを伝える事が如何に難しいかを実感させられたが、お互ひの気持ちりが分かり合へた時の感動もまた初めて味はふ貴重なものであった。

体験発表

最初に、福岡市で弁護士をされてゐる中島繁樹氏が登壇された。氏は、昨年四月に福岡県弁護士会の副会長に就任されたのを契機に、短歌創作の上達を期して、会の月報に「副会長歌日記」と題して毎月十八首投稿することを自らに課し、今年三月までの一年間に二百十首の短歌を投稿された体験を話された。その中の十八首を、副会長の仕事に没頭されてゐた当時の思ひ出を辿りながら感慨深く一首ずつ紹介され、歌を作る喜びとは、心の動きを記録に残せる、他の人にその時々思ひを伝えることができる、さらに日本の伝統的文化につながる事ができることである、と実に楽しさうに語ってゆかれた。

次に、熊本市西原中学校教諭の山方富美子氏が登壇された。氏は現在の中学生が、友人関係がうまく築けず精神的に成長しきれない問題の背景には、母親の存在が大きく、母親の情緒が不安定ならば、



子供の心も不安定になってしまふと指摘され、実際に接してきた三人の男子生徒の話を紹介された。そして、加納祐五先生の講義録「母の智一女であることについて」を読んで、「子供の人格形成のうえで母親の果たす役割が如何に重要であるかといふことを改めて考へさせられた」と同時にこれまで女手一つで育ててくれたお母様に対する感謝の気持ち^{こころ}が沸き上がってきて、手紙に書いて送ったところ、お母様が泣きながら「あなたを生んで良かった」と言ってくれて、生きるエネルギーが沸いてきた、といふ体験談を披露された。

最後に登壇された北九州市立八幡病院放射線科技師の森田仁士氏は、声楽家であり日本歌曲の研究家でもある鮎川由美女史のCD「文部省唱歌集・ふるさと」の解説書に記載されてゐる日本の唱歌の歴史とその時代々々の思想的背景についてに話してゆかれた。その中で、明治初年に唱歌が生み出されていった背景には、当時の人々が日本人の魂を表現できるやうな国の音楽即ち「国歌」を作らうといふ気込みと献身的な努力があったことが指摘され、非常に印象的であった。そして最後に参加者全員で「冬の夜」を合唱して発表を終へられた。

慰霊祭

三日目夜に挙行された慰霊祭に先立ち、国立病院九州医療センター勤務の小柳左門氏が「留魂と慰霊」と題し、慰霊祭の意義と祭次第について説明をされた。氏はまづ、我々の祖先が考へてゐた「魂の在り処」について、「万葉集の中でも歌はれてゐるやうに我々の祖先は、細石や川の流れ、山や木やさらに言葉にまで霊性を感じ、森羅万象に宿るすべての魂を畏れ敬ってきたのだ」と語られ、明治天皇が「虫」について詠まれてゐる御製を紹介され、「虫を通して広がる大きな生命の世界、そこに連なつて行くところに日本人の魂の感じ方の根源があるのではないか」と語られた。そして、「留魂」とは、死にゆく者





が生き残る者に対して魂を残す、思ひを託すことであり、残った者は亡くなった者の魂を感じ、受け継いでゆくことを心に誓ふ、そのことが「慰霊」であると述べられ、国民文化研究会の会員で平成七年に亡くなられた野間口行正さんの奥様ユキ様が御主人のことを偲ばれて詠まれた歌を紹介された。

その後、慰霊祭式次第を説明され、「海行かば」を斉唱し、説明を終へられた。

参加者は、講堂横の広場に設へた齋庭ゆにわに整列し、慰霊祭が厳肅に執り行はれた。

まづお祓に代へて、三井甲之先生の和歌

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを
を長内俊平先生（本会理事）が朗詠され、慰霊祭は始められた。

次に警蹕の声の響く中、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられたすべての祖先の御霊を最敬礼でお迎へする降神の儀が行はれた。参加者一同を代表して、古川修氏（株）デジタル・ツーカー北陸勤務）が祭文を奏上され、小田村四郎先生（拓殖大学総長）により御誦が行はれた。続いて、上村和男氏（本会副理事長）の玉串奉奠と共に御霊に対し一同拝礼の後、「海行かば」を全員で斉唱した。最後に昇神の儀が行はれ、最敬礼のもと御霊をお送り申し上げ、慰霊祭は滞りなく終了した。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

祭文

平成十年八月九日 大阿蘇の広ごれる草原の中 国立阿蘇青年の家に集へる社団法人国民文化研究会 理事長 小田村寅二郎をはじめ我ら 第四十三回全国学生青年合宿教室を営みて 二三日目の夜を迎へぬ

今し天つ日は沈みて 月影さやけき合宿地の 清しき草原を齋庭ゆにはと定め きよめまつりてとこしへにみ國守ります遠つみ祖たち また 米國のために尊きいのちを捧げ給ひてわれらが祖國日本を守りましたし あまたのはらからのみ靈を招まぎまつり ながさめまつらむと み魂祭りを 仕へまつらむとす

願れば 過ぎし大御軍おほみいぐさの終りし後 混迷を極めたる時代に 日本國民としての『同胞感』を求め「祖國日本」の真正なる独立をはたさむと合宿教室をいとなみ はや四十あまり三つの回を重ねたり

しかれども 政治・經濟 更にマスコミ各界の混迷は いよいよ深まり 國民の深き憂ひとなれり

ここに謹みて告げまつらくは この美はしき やまとしまねの内・外にみつる まがごとのごとを 力の限り打ち払はんと祈る われらは 徳岡孝夫・小堀桂一郎両先生をはじめとする諸先生の御講義に 班別研修に はたまた短歌の創作に 心かたむけ心を開きて語りかはし 汝いましみ祖おやたちの尊きみ言葉を学び おのおのものが文化防衛の戦士となりて祖國日本を とことはに榮えゆかしめむと 誓ひまつらむ

天がけるみ祖のみたまよ 願はくは われらのゆくてをまもらせ給へと 第四十三回合宿教室参加者一同に代り
謹み敬ひ畏みも白す。

古川 修

御製拝誦

明治天皇御製

夏草

事しげき世にも似たるか夏草の払ふあとよりおひ茂りつつ

夏山水

年年におもひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり

鏡

國のためののちをすてしものふの魂や鏡にいまうつるらむ

をりにふれたる

はからずも夜をふかしけりくのため身をすてたりし人をかぞへて

をりにふれたる

万代もふみの上にぞのこさせむ國につくしし臣の子の名は

昭和天皇御製

終戦時の御製

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

國がらをただ守らんといばら道すすみゆくともいくさとめけり

松上雪

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

平和条約発効の日を迎へて

風さゆるみ冬は過ぎてまちにまちし八重櫻咲く春となりけり

昭和六十一年八月十五日

この年のこの日にもまた靖國のみやしろのことにうれひは深し

今上天皇御製

硫黄島

精魂を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島は悲しき

戦後五十年遺族の上を思ひて

國がためあまた逝きしを悼みつつ平らけき世を願ひ歩まむ

ビデオ上映 「天皇陛下とブラジル」

四日目朝一番の日程は「天皇陛下とブラジル」と題したビデオの鑑賞から始まった。このビデオは、昨年六月に天皇后陛下がブラジル・アルゼンチンを御訪問された際に、ブラジル各地での盛大な歓迎の模様を収録した作品。特に九十年に互る移民の歴史を持つ日系人の姿に迫り、「父母・祖父母の祖国」日本に対する熱い思ひを、四十分間の上映中随所に感じ取る事が出来た。

「日系人として、素晴らしい民族の流れを持っている(誇りと、それ故に)人様から指をさされるようなことをしてはいけないと(子供の時から)よくいわれた」

「日系人については、ブラジル語でジャポネーズ・ガランチーノ(日本人は絶対だいたいじょうぶだ)といふ言葉がある。(その信頼の元は)やはり日本で受けてきた教育、勤勉さとか、誠実さとかが基本になって生まれてきた」

といふ日系人達の感慨と共に、サンパウロ州知事マリオ・コーバスの

「両陛下の謙虚さ、お人柄、人々に物事を訴へかけるパワーに、(全国民が)心を打たれたのです。特に天皇陛下のお人柄以上の何かに、日系人社会の人々は、その超越した存在感を感じるのだと思います」といふ観察、更には、日本語学校卒業生の若い女性(日系二世)の

「教育勅語の精神は、日系人として生きて来た私たちの文化・教育の中に含まれている。教育勅語は(今も)実生活の中に生きている」といふ告白は、現代日本に住む我々が忘れかけてゐるものを思ひ出させる新鮮な響きがあった。

講義 ビデオ「天皇陛下とブラジル」に思ふこと — 教育勅語を中心に —



引き続きご講義頂いた小柳陽太郎先生は、ブラジルの日系人達こそ、保田與重郎さんがかつて表現された「天皇が国民統合の中心にあったといふ歴史的事実を伝統として身につけた、もっともあたりまへの日本人」そのものだと思つたと感想を述べられ、かつて、すべての日本人の心に深く親しまれて来た「教育勅語」を皆さんと一緒に読んでみたいと、用意された資料に副つて解説を加へられた。この勅語公布に到る時代背景や、草稿作成過程にも触れられ、「皆さんにとつてあまりに難しいかと訳注をつけたが、やはり、明治天皇が国民に直接示された勅語原文を、何とか読み味はつて頂きたい」と我々の今後の勉強を促された。

その後、「教育勅語をどう読むか」につき次の三点を指摘された。

一、欧米偏重、徳育不徹底の弊を正すため、教育の大本を日本民族の歴史的体験の中に求められたこと。即ち、先人の足跡の中に日本人とはかう生きて来たといふ歴史がある。

二、世界広しと言へども、他に比するものなき、天皇と国民の心の一体感―しかも、単に一時代のみならず、歴代天皇が「そのときどきに最も相応はしい形で体现していらつしやつた」事と、その伝統を「心のどこか奥底で感じとつてゐる」国民とのつながり―このところがわからないと「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ、以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」が読めなくなつてしまふ。

三、勅語の内容は真に人類普遍の当然の生き方を堂々とうたつてあり、同時にそれが長い日本の歴史に裏づけられたものであること。昨日、小堀先生の御講義の「普遍なるものと独自のものの調和」の正に好例であり、この勅語は世界に誇る文化史的文献と言へる。

先生はまた、国民の上を思はれる歴代天皇の御製も紹介され、「阪神淡路大震災」時の今上陛下のお歌

なるをのがれ戸外に過す人々に雨降るさまを見るは悲しき

を拝誦されて、これ程までに国民を気遣はれる天皇と、それをお慕ひし続けて来た国民の結びつきが「教育勅語」を支へて来

たと指摘され、日系ブラジル人の方々が思ひ出させてくれた日本人の誇り―「ジャポネーズ・ガランチーノ」―を心に甦らせてこれからの学問に取り組んで頂きたいと結ばれた。

第二回短歌創作・相互批評

午後からは、第二回の短歌創作と班別の相互批評を行った。合宿の日程中に二回の短歌創作、相互批評を行ふのは初めての試みであったが、参加者の歌もさすがに二回目となると、自分の思ひを素直に表現した素晴らしいものが多く、相互批評でも相手の気持ちを良く味はひながら言葉を求めてゆくといった話し合ひが行はれ、お互ひの心が通ひあふ充実したひとときとなった。

講話 「ますらをの歌」

国民文化研究会・副理事長、(株)寶邊商店会長 寶邊 正久 先生



先生はまづ「戦前の友人たちは戦死し或いは病に倒れたが、私などが足元にも及ばない偉い男たちだった」と語られ、「私自身、先輩に導かれてますらをといふ言葉に触れ、あくまで強く、国事に尽瘁するますらをに憧れた。しかし、本当に自分が強くならねばならないと思った動機は、私の兄が広島から出征したときでした。関門海峡を夜陰に乗じて出征する兄をしみじみと偲び、そのとき防人の姿が思はれた。一つのこと が身に沁みて感じられると物がわかつてくる、さういふ経験でした」と述べられた。

また、三井甲之先生の「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の歌を引かれ、「日本の歴史を貫く国を護らうとする意思の積み重ね、それにつながっていくのがますらをです。この歌は勇ましいやうに見えて戦死者を

本当に心に偲んだ歌です。何代にも互って護られてきた日本の国の命、護ってきたますらをの命と結び付けながら日本の歴史を表現した歌として愛誦してきました」と語られた。

続いて万葉集の防人の歌を取り上げられた先生は、「父母や妻子と別れるといふ一人一人の耐へがたい悲劇を乗り越えていくのが男の運命であり、それがますらをだと思ふ。肉親を思ふ強いまごころと国のためにそれを乗り越える使命感、それが日本の国の命を支へていく実態であり、国柄でせう。それを女々しいとは誰も言はないのが日本だ」と語られた。

さらに、先生は柿本人麿の旅の歌やご友人であられた松吉正資さんの歌を味ははれた後、今上天皇の御製を引かれ「今上天皇は戦争を、また、戦ったますらをを忘れてをられない。ますらをを祭った靖国神社の首相公式参拝がなくなり、昭和天皇は大変ご心配になった。陛下がこれほどご心配なさってをられるのに、一方で若者が国のために戦死した人を全く忘れさるといふことがもしあるならば、それは国が減びるのと全く同じことです」と語られた。

最後に「皆さんがますらをといふものに多少関心を向けられるならば、それはますらをの志を思ひ出すことになるはずです。万葉の歌をますらをという観点からご覧になれば、昔のことは遠いことではないのです」と締めくくられた。

夜の集ひ

厳しい日程を送ってきた合宿教室も最後の夜を迎へ、「夜の集ひ」は屋外でのキャンプファイアーとなった。各班ごとの様々に趣向を凝らした出し物に合宿参加者はひとときの楽しい時間を過ごした。

第五日目

(八月十一日・火曜日)

合宿を顧みて

合宿運営委員長・福岡県立嘉穂高等学校教諭 小野吉宣氏



氏は冒頭に「„来たときよりも美しく“といふ標語は、内的な充足感に満たされた皆さんの顔のことを言ふのではないか」と参加者をねぎらひ、合宿を振り返つての所感を熱い口調で語つてゆかれた。

その中で、まづ、「第二の敗戦」を迎へて日本人全体が意気地が無くなって来てゐる今日、一人一人が「覚悟」をもつて勇気を奮ふことの大切さを訴へられた。

また、「短歌創作や相互批評を通じて、自分の中の感じる力を鍛へることから日本人としてのアイデンティティーや気概は生まれてくる。この合宿で私たちが体験したのは、自他が融合した『トランスパーソナルの世界』、すなわち個人主義を越えた世界を構築することができたといふことだ」と述べられた。

そして最後に、「美しいものが美しく見え、尊いものが尊く思へるやうな体験を皆さんと一緒にできたことがこの合宿の収穫だった」と締めくくられた。

参加者感想自由発表

続いて、参加者が四泊五日間を振り返り自由に所感を述べる時間が設けられた。

次々に登壇した参加者は、思ひのたけを率直に披瀝した。

「合宿に参加するまで日本には学ぶべき歴史はないと思つてゐたが、「五箇条の御誓文」や聖徳太子の「十七条憲法」を読

んで、古いものの中に学ぶべきことが沢山あるといふことに気づいた」「ビデオ『天皇陛下とブラジル』の中で、日系の若者達が目を輝かせながら歌つてゐた姿を見て、これが日本人の本当の姿だなあと思ひ胸が熱くなった」と、日本人としてのアイデンティティーを再確認させられたといふ感想や、「小柳先生の教育勅語についてのご講義をお聞きして、先人の軌跡（足跡）の中に歴史がある。それが教育の源となるといふことがわかった。教師になったらここで学んだことを生徒に伝えて行きたい」「来月アメリカに出発するが日本人としての誇りをもつて勉強してきたい」「分からないと思つても疑問は疑問として大事に暖めて、勉強を重ねて行きたい」などと、これからの決意と抱負を多くの参加者が述べ、一同深い共感のうちに発表の時間を終へた。

閉会式

国歌斉唱の後、参加者を代表して北海道大学農学部四年の服部泰子さんが、「日本は本当に美しく深い深い伝統を持った国だと思ひます。そのやうな国に生まれたことを誇りに思つてこれからの人生を歩みたい」と。続いて主催者を代表し国民文化研究会副理事長の上村和男先生が、「戦後、日本は自らの伝統や文化を否定して来たが、日本の文化や伝統は皆さんの中にあるのです。私達はそれに目覚めなければなりません」と挨拶された。慶應義塾大学商学部二年斉藤一佐君が閉会を宣言し、合宿教室全日程の幕が閉ぢられた。

助言者の紹介

- (社)国民文化研究会 常務理事
 拓殖大学 総長
 神奈川県立平塚江南高校 校長
 日本エネルギーサービス(株) 取締役
 (株)デジタル・ツーカー北陸 営業部 副部長
 新日本製鐵(株) プラント事業部 次長
 講談社 宣伝部 局次長
 (株)竹中工務店 C M本部 部長
 神奈川県立厚木南高校 教諭
 福岡県立嘉穂高校 教諭
 (社)国民文化研究会 事務局長
 熊本市企画調整局情報企画部情報企画課
 熊本県立教育センター 研修主事
 山口県立下松高校 教諭
 (株)日本興業銀行 市場投資調査部 課長
 (株)中央塩ビ製作所 代表取締役会長
 不動産鑑定士
 市ヶ谷漢方クリニック 院長
 (株)公正不動産 代表取締役
 鶴岡八幡宮 宮司
 前・高千穂商科大学 教授
 元・県立佐賀商業高校 教諭
- 長内 俊平
 小田村四郎
 国武 忠彦
 澤部 壽孫
 古川 修
 今林 賢郁
 磯貝 保博
 稲津利比古
 山内 健生
 小野 吉宣
 山口 秀範
 折田 豊生
 白濱 裕
 宝辺矢太郎
 小柳志乃夫
 星野 貢
 松吉 基順
 桑木 崇秀
 安東 祐範
 關 正臣
 名越一荒之助
 末次 祐司
- 元・浄土真宗本願寺派 沼田組広隆寺 僧侶
 元・サンデン交通(株) 取締役
 航空自衛隊航空教育隊生徒隊 教諭
 野木神社 宮司
 久留米大学附設高校 教諭
 (社)福岡県中小企業経営者協会 会長
 神奈川県立小田原城内高校 教諭
 建設省建築研究所 地震防災研究官
 富士通(株) C S本部C S推進室 課長
 伊佐ホームズ(株) 代表取締役社長
 北海道札幌西陵高校 教諭
 関西熱化学(株) 技術開発部
 久留米大学附設高校 教諭
 公務員
 亜細亜大学 総合企画部 広報課
 福岡県立香住丘高校 教諭
 福岡市立大原小学校 事務主査
 防衛施設庁 総務部 環境保全準備室
 福岡県立筑紫高校 教諭
 福岡県立筑紫丘高校 教諭
 日産自動車(株) 企画室
 九州大学 生体防御医学研究所 附属病院
 熊本市立熊本市市民病院 外科 医長
 熊本中央病院 循環器科 医長
- 岡棟 猛
 加藤 善之
 村山 寿彦
 松吉 宣和
 合原 俊光
 小早川明德
 原川 猛雄
 大岡 弘
 浜田 實
 伊佐 裕
 本田 格
 天本 和馬
 名和 長泰
 銚 信弘
 平横 明人
 藤 寛明
 奈田 明憲
 山根 清
 黒岩 真一
 酒村聡一郎
 奈良崎修二
 安藤 洋志
 福田 誠
 大嶋 秀一

公務員

福岡市立香椎小学校 教諭

日章工業(株) 専務取締役

出光興産(株) 人事部 店主室

熊本製粉(株) 住宅事業本部

南国殖産(株) 経理部 経理課

安信住宅販売(株) 新宿センター 課長代理

福岡県立春日高校 教諭

熊本県立天草高校 教諭

鹿児島市役所 企画部 企画調整課

福岡県立八幡中央高校 教諭

(株)日本教文社 第二編集部

熊本市立西原小学校 教諭

熊本地方法務局 不動産登記部門

(株)アキタ・アダマンド

財千葉県国際交流協会 交流推進課

熊本県立宇土高校 教諭

福岡県労働部雇用保険課 出納係

(社)国民文化研究会 会員

(株)神戸製鋼 資材部

(社)国民文化研究会 会員

北九州市役所小倉南区役所総務部納税課

お茶の水ゼミナール熊本校 講師

東急建設(株) 情報システム部

神谷 正一

是松 秀文

藤新 成信

山田 幸治

吉村 浩之

京田 清人

松吉 基光

與島 誠央

今村 武人

有村 浩明

日比生哲也

坂本 芳明

山方富美子

徳田 恒稔

眞田 博之

秋山 信之

久保田 真

古川 広治

清水久仁子

北村 公一

井坂 信義

西山 博文

延塚 恭子

茅野 輝章

宗像市役所 環境整備課

日本青年協議会

日本青年協議会

高知市立潮江中学校 教諭

熊本市役所 市民生活局福祉部保護第二課

福岡県警 警察学校 巡査

合宿運営本部 小野 吉宣・酒村聡一郎・奈良崎修二

指 揮 班 與島 誠央

指 揮 班 日比生哲也・秋山 信之・西山 博文

事 務 局 徳田 恒稔・古川 広治・高倉 庸輔

蘇原 幸枝・亀井 正弘

文化服装学院二年 小野アリス

東海大学第五高等学校三年 小野 亜耶

久留米大学附設高校二年 小柳 雄平

福岡県立筑紫丘高校二年 諸賀 学美

福岡県立筑紫丘高校二年 嶺 絵里香

福岡市立香椎第三中学校二年 小柳 マホ

放送・記録班 森田 仁士・松吉 基光

医 務 班 小柳 左門・福田 誠・大島 秀一

写 真 班 赤星 利江

高倉 庸輔

松岡 篤志

大葉勢清英

岡 つぐみ

濱口 和久

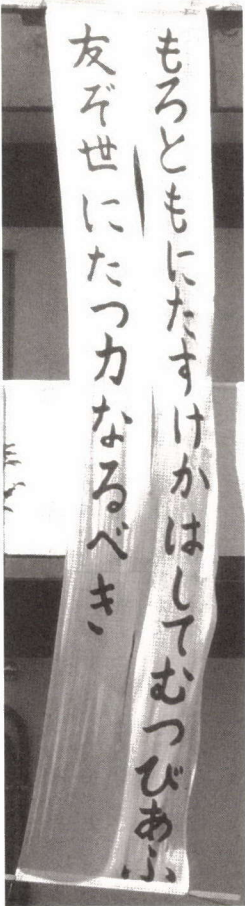
喜多村 純

走り書きの感想文集

（各別
に収録）

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままに掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものであります。



もろともにしたすけかはしてむつびあふ
友ぞ世にたつ力なるべき

第一班—男子学生—

来年もこの仲間と研修をしたい

(福岡工業大学 工 一年 小林広和)

私は、この合宿教室に参加できて本当によかったと思います。私は、歴史や政治が嫌いで親に無理やり参加させられました。でも今、こうして終えてみると本当に貴重な体験ができたと実感しています。合宿教室では、心からわかりあえる仲間とめぐり合う事ができ、感動を分かち合えたことをうれしく思います。そして、その感動を短歌に詠むことができて、短歌のおもしろさを感じることができました。

来年もこの仲間と研修をしたいと思います。

合宿に嫌々ながら来たものの次ぎもこようとひそかに思ひぬ

班友と共にすごせし五日間ころかよひてわかれがたしも

全体感想自由発表が胸を打ちました

(鳥根大学 法文 二年 那須 参)

私は、全体感想自由発表がとても心の残りました。

一人一人の体験が、真に心の内より出ていました。誰一人として、理屈や観念で話すことがなく、本当に確信を持って話しておられたので、発表者の心が胸に沁み入り、胸を打ちました。

全体感想自由発表にて

皆々の中で手を挙げ発表に進み行く友を壇上に見ぬ

和歌を詠む習慣をつけたい

(立教大学 文 三年 上村隆倫)

今回とても心に残ったことがあります。それは、短歌創作後の相互批評の時間です。短歌一首を詠むのにとっても苦勞して、やっとできた歌を批評してもらったところ、「君は本当に感動して詠んだのか」「うわべだけで詠んだのではないか」と思いもつかない指摘をされました。これらの指摘にはショックを受けました。自分が何に感動したのか分からなくなっていました。心の動きというものがたつた三十一文字にあらわれる短歌には、真心を尽くさなければならぬと思いました。普段の生活の中では、嘘の言葉があっても生きていくことができます。しかし、嘘の言葉によつて自分の人生を汚すことになるのではないかと気づかされました。真心を尽くす姿勢を養う為に、和歌を詠む習慣をつけていきたいと思っています。

短歌相互批評にて

苦しみて詠みし短歌を批評にて飾りし言葉と言はるる悔しさ

五箇条の御誓文を仲間と勉強したい

(九州工業大学 情報工学 三年 桑木康宏)

合宿ありがとうございます。今まで私は、日本の歴史に学ぶ事はほとんどしていませんでした。しかし、今回の合宿教室では、聖徳太子の時代までさかのぼり、その時代時代の人が、いったい何を考えていたのかという事を学びました。

大学に帰ったらさっそく会の仲間と共に、五箇条の御誓文を勉強して、現実の生活に役立てようと思います。又、日本の歴史や文化を内発的な感情によって学んで行きたいと思えます。来年、この合宿教室に参加するときは、もっと自分のルーツについて学び、国を思う気持ちを少しでも育てて参加します。そうすれば、また今回とは全く違った合宿になりそうで、今から楽しみです。

さつかれどこの大阿蘇の合宿を去るときせまればさびしかりけり

真心とはなんであろうか

(長崎大学 教育 三年 外村聖典)

今回初めて国民文化研究会の合宿に参加し、小堀先生の言葉から考えさせられました。先生は、「文化の戦士になってほしい」とおっしゃられました。日本の文化を守っていくこととはどういうことであるか、小田村四郎先生におききしました。先生は、「志と真心を受け継ぎ守る事である」とおっしゃられたので、真心とは何であろうかと考えてみる事になりました。合宿中「天皇陛下とブラジル」のビデオの中で、ブラジルの日系人の若者が祖国を思う気持ちを歌に託している姿に感動しました。そして、その祖国に対する思いが真心ではないかと思ったのです。思えばこの合宿の中で多くの先生方の真心を感じる事ができました。自分の真心はこれだよのか和歌を通して励んでいきたいと思えます。

大阿蘇の恵みの中で育まる恐れとつしみ忘れざらめや

カメラ・レポート1



開会式。主催者を代表して、(社)国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が「もう一度、本来の日本の姿に戻らなければならない」と挨拶された。

自分に自信を持つて

(福井工業大学 工 四年 久保博之)

今回で三回目の合宿となりますが、参加する度に新鮮な気持ちにさせられます。特に今回は、自分のありのままの姿で合宿に取り組む事が出来ました。合宿講義で一番印象深く残った事は、小堀先生の御講義でした。先生は、日本の民族文化を防衛するには、自分を見つめ、自分とはかうだと自信を持つて発表出来る事が必要だと話されました。一人一人が持つてゐる日本文化といふものが必ずあり、その事に自信を持ちなさいと言ふ事だと思ひました。又、徳岡先生には、「劣等感を捨てなさい」といふ言葉を頂きました。劣等感を持つ事で人は良くはならないとの事でした。これからは、自分に自信を持つて、今回の合宿で得た事を、そしてこの新鮮な気持ち忘れず、取り組んで行きたいと思ひます。

班友と心の底まで話し合ひ分り得る時友とうちとく

小柳先生のご講義をお聞きして思う事

(早稲田大学 第二文 三年 浦 義勝)

どんなに素晴らしいものも、あまり身近にありすぎては、その美しさを正確にとらえる事が出来なくなってしまう様である。日本の国柄というものにも全く同じ事が言えるのではなからうか。戦後世代の僕らには、長い歴史を通じて国民の素朴な感情に根差してきた、皇室を尊ぶ心というのが、薄れてきたように感ずる。私はその原因の一つはマスコミにあ

ったのではないかと思つてゐる。長く日本人が、心の奥底に静かに畏れ尊敬してきたものを、芸能人と同様に扱い、偶像視的に見せようとする態度があつた。この様な態度では歴史の中にいのちを感ずる事はまず出来ない。僕らは、戦後間違つた意味で皇室との距離を近づけすぎってしまったのではないかと思つて。

日本の国柄知りて今までの心の不安なくなりけり

第二班—男子学生—

「天皇陛下とブラジル」に感動した

(東京経済大学 経営 三年 松村希一)

僕は今回で二回目の参加となるが、昨年と又違った新しいものを学べた。特に印象に残つてゐるのは「天皇陛下とブラジル」のビデオである。悪条件の中、開拓に取り組んだ移民、それでも日本の誇りを忘れずにいた姿には胸が熱くなった。そして、日本人より日本人らしいブラジルの日本人学校の生徒の姿にも心打たれた。班員にも感謝したい。班別研修や短歌創作の時など、皆で深く考え、時には馬鹿話もしたが、皆良い人達、信頼出来る人達だった、有難うございました。最後に昨年に引き続き、合宿を紹介して下さつた加納先生に感謝申し上げます。

阿蘇の地で日本の心を学びしを忘れはせじと胸にきざみぬ

日本の心を学びて我思ふ呂比須ワグナーこれにほれしを

この合宿には「感動」があった

(麗澤大学 国際経済 三年 鈴木良登)

この合宿のことを知ったのは『正論』の広告でした。それでインターネットでどんなものかを見、これは何か得られるかと思い、申し込みました。合宿では色々な講義を聴きましたが、興島先生の講義では、茶谷さんの遺書が扱われました。自分と年齢のかわらない人がここまで覚悟して生きていった様子が思い浮かび、とても胸に迫るものがありました。又、山方先生のお話では、お母さんに素直にありがとうと言うことの大切さに共感を覚え、感動しました。班員との出会いはやはり一番の思い出になります。初めの頃は、よそよそしさを感じましたが、段々とうちとけ、特に最後の夜は恋愛の話などで盛り上がり、仲間っていいなと思いました。この合宿には「感動」がありました。今の日本人に失われているものは「感動」だと思います。そしてそれには、勇気も必要だと思います。この経験を生かして、これからも勉強その他に励みたいと思います。

合宿を終へて仲間と別れゆくも文化防衛戦士たならむ

貴重な五日間であった

(東京大学 文Ⅲ 一年 濱田和範)

合宿一日目と言えば、寝不足と慣れない飛行機旅行の所為で這々の体で青年の家に辿り着いたという感じで、これからやってゆけるか見当もつかなかったが、幸い二日目からは何

カメラ・レポート2



参加者を代表して早稲田大学政経学部三年・伊藤俊介君が、「この合宿では自分が考えていることをぶつけ合ひ互ひに一生懸命わからうとして話を聞くといふことができる。おほいに語り合ひませう」と参加者に呼びかけた。

とか持ち直して、無事に合宿を終えることが出来た。班友の強烈な個性は退屈する暇すら与えず、班付の先生方も班別研修や和歌相互批評の折には助言や添削に労を惜しまず御指導を下された。この合宿は長くもあり、短くもあり、貴重な五日間であった。

夏草の茂れる阿蘇の山並は唯々広く我立ち尽きぬ

日本文化の素晴らしさを伝えたい

(福岡教育大学 教育 一年 小島 智)

日本人としてのアイデンティティというものを一番深く考えさせられ、日本文化を学び、継承してゆかなければと思いました。この四日間の学びを通じ、今迄の日本人が何と戦い、何を守って来たのか、そして、どういう思いでこの日本を守り続けて来たのかを知り、感動が生まれました。昔の人々の考えや生き方が自分の中に生き始めています。でも、何故かこれに対して不安も覚えます。おそらく十八年間、自分の生きる礎となって来た信念が消えてしまうのではないかという不安です。先生が仰る様に、覚悟をもつて、日本民族として、大和魂を持ち、誇れる日本人になろうと思いました。教師となつて、日本文化の素晴らしさを伝えてゆきたいと思つていきます。

素直なる心閉ざして感ずべきこと感ぜざりしは悲しかりけり

学問・人生・祖国の繋がりが深まった

(佐賀大学 理工 四年 和田晃次)

今回の合宿では、学問・人生・祖国の繋がりが深まったものになりました。言葉には自分の心が込められていることを学び、自分の外に国家を認識するのではなく、胸の内に祖国が甦えるものであると思えました。志賀先生の御講義の中で、聖徳太子の御精神を継承し、かつ今の時代を救つてゆくべき言葉が生まれていないという御指摘がありました。非常にはつとさせられ、印象的でありました。夜の集いの出し物の中で、五箇条の御誓文を暗記して拝唱したり、教育勅語を高らかに読みあげていった学生の姿があつたが、あの生々とした姿、自分の言葉としてゆきたいとの意志、歴史を貫く縦の繋りに自らも連らなつてゆくとの思いに感動しました。小堀先生の仰つた文化防衛の戦士という言葉が甦つて来ました。

先人の思ひに連らなる言葉生み文化防衛の戦士とならむ

縦糸と横糸の話しに感動した

(福井工業大学 経営工 二年 東山敏之)

合宿も五日目になると感動した事が色々と胸に残つていました。小野先生は縦糸と横糸の話が色々と胸に残つていました。占領時、米国は「日本には民主主義を形成できる横糸がない、縦糸を切断すれば自然と横糸が生じる」と主張した。そんな事はない。縦糸は過去の伝統なのだ。先代の記憶だ。記憶を消す行為はその人種の誇りを失ふことと同じなのだ。横糸も必要だが、縦糸が切れていたら横糸があつても堪つたものでない。横糸は新たに作れるだろうが、縦糸は作り直せないのだ。又、班友との就寝前の談話も良かった。班友

がどう考えているのか、横になり乍ら自然と眼りに就くまで話し合った。思想も何もかも違うので、他人がどう考えているのか参考になつた。

班友と枕ならべて語りあひ過こせし夜も終はりゆくかな

父の言っていたことが分つた

(同志社大学 法 二年 折本太郎)

私は今回が初めての参加でした。父が国文研究会ということで、私の合宿参加は父の長年の願ひであつたようです。以前より父と白熱した議論をしては、お互いに譲らず、母が仲裁に入るということを繰り返してました。それで私は父の考えの源を知るべく、今夏の参加を決めました。いざ合宿に臨んでみると、父の言っていたことを証明する如く、はつと気がかされた史実が多く、自分の無知を改めて知らされました。「汝は何者か」と問われた時、自分はこういう者だと堂々と答えられない自分に腹立たしさと恥ずかしさを感じました。この問いを始めとして一生涯の問題が数多く発見出来ました。今後は、ゆつくりと急ぐことなく、自分の出来るところから一歩ずつ、これらの問題を解いてゆきたいと思ひます。

班友のまなざし熱く吾のを見守りくれしはうれしかりけり

嬉しくて仕様がな

(早稲田大学 政経 三年 伊藤俊介)

今回の合宿で初めて班長をやりました。最初の内は皆の意見を聞き出そうということばかりに気がいつてしまい、班別

カメラ・レポート3



オリエンテーション。合宿運営委員長の福岡県立嘉穂高校教諭小野吉宣氏から合宿趣旨説明がなされ「心をひらいて合宿に取り組んでほしい」と参加者に語られた。

討論も納得のいかないものとなり、胃が痛くなりました。それで腹を括って、自分の思うことを伝えるしかないし決心し、どんどん話し出したところ、皆がそれに対して思うことを述べてくれる様になりました。驚きました。そしてとても嬉しかったです。特に最初の頃、自分一人の世界に閉じ籠っていた濱田君が意見を述べてくれる様になったのは本当に嬉しかったです。合宿の開会挨拶で、僕は自分が何を為すべきか分からないと言いました。今でもよくは分かりませんが、少なくとも自分が嬉しく思える様なこと、例えば人と語り合うことが出来る嬉しさというものが、自分の為すべきことと繋つていのだと思います。今回の合宿では、昨年同じ班だった濱田君や兄貴の様な久保君とも会え、勿論我が二班の班友とも出会うことができました。嬉しくて仕様がなない。

初めて班長を経験して

班長のつとめ思ひて意気込めど言葉出来ず我は悩みぬ
覚悟決め思ひを友に語らへば心開きて友はこたへぬ
真顔にて熱く語らふ久保君のそのまごころに心うたれぬ

第三班—男子学生—

人生の課題が見つかった

(東京大学 理Ⅱ 一年 坂口精一郎)

当初この合宿に来るのが苦痛でしたが、来てすごく良かったと思います。一番驚いたのは班別討論の時間でした。みんな真剣に日本の事を思い、活発に議論を交わします。思わず

僕も講義を思い出し、他人の意見を聞き、自分の頭で一生懸命考えました。この自分で考えるところは、すごく大事なプロセスだと思います。四カ月余りの大学生活で錆びついていた僕の頭は活性化され、また、そんな自分に感動すら覚えました。

講義の中で一番印象的だった言葉は「外国人と話す時、君は日本人の代表になる」という言葉です。責任重大です。もっと勉強せねばと痛感しました。短歌を詠んだのも良い経験です。「文化は言語に宿る」という言葉を聞いたことがあります。歌を詠むということは言葉を大事にすること、そして文化を大事にすることにつながるのではないのでしょうか。歌はこれからも詠み続けていきたいです。

最後にこの合宿の最大の収穫は明日から生きていく人生の課題が見つかったことです。そして心の通ずるたくさんの友、先輩、師に巡り会えたことです。人生は勉強です。僕はまだ若いですが。日本は任せろと堂々とやるように成長していきたいです。

日本を護つてゆくぞとふこの思ひ忘るるまじと固く誓ひぬ

あるべき姿を体現していきたい

(長崎大学 教育 二年 益富孝重)

今回感動したのは、天皇陛下のお姿だった。雨の中でブラジルの日系人の方々が歓迎されている姿を見られて「かぜをひかないでしょうか」と心配されるお姿、災害があればその地へ足を運ばれ、一人一人に対してお言葉をかけられる姿な

ど、陛下は常に我等国民のことを思われているのだと感じました。また、その御心には先人の方々の姿がくつきりとあるのだと思います。明治天皇の「はからずも夜をふかしけりくのためにのちをすてし人をかぞへて」という御製はそのような陛下の御心がそのままに表れたものだと感じました。

そして、私はあるべき姿を体現していくことを学んでいきたいと感じました。班付の先生が班別討論に集中していない班友をしかられた姿、和歌相互批評の時間に作者の心をくみとろうとなさる姿は本当にあるべき姿と感じました。

日頃のサークルの先輩の姿を思い返しても、私たち後輩に実際の姿をもって様々のことを教えて下さっていると感じました。班長の斎藤君が班友に熱心に語りかけている姿にも班長のあるべき姿を感じました。同学年として班長として頑張っている斎藤君を見て少しくやしく大変発奮させられました。

天皇陛下を偲びて

雨の中待ちし人等のことを想ひ心配らるるお姿のありき

災害のあればみ足を運ばれて一人一人に語りゆかれぬ

国のため命を捨てし方々を思ひて夜をふかしたまへり

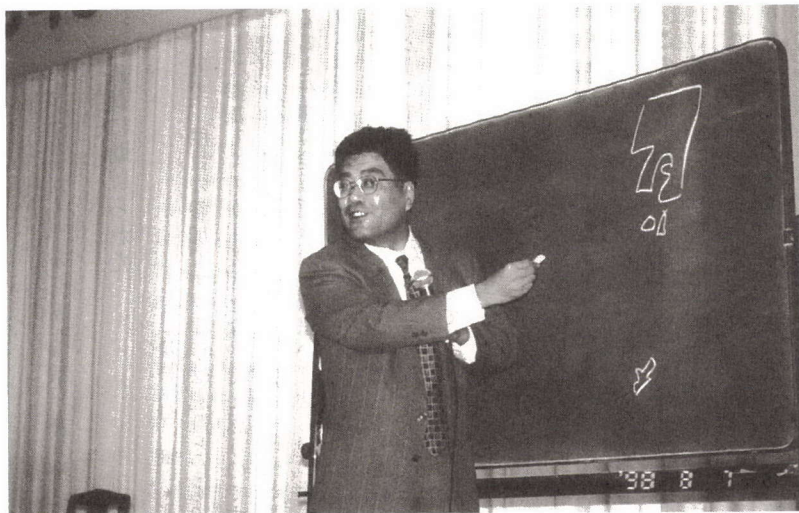
現実にかくあるべしといふお姿をわが大君は示したまへる

日本を愛する思いが芽生えた

（福岡教育大学 教育 一年 小林国平）

最も印象に残っているのは、「天皇陛下とブラジル」の映画の中で日系人の学生たちが地球の裏側にいる私たちの胸を

カメラ・レポート4



合宿導入講義。福岡県立春日高校教諭・與島誠央先生は「戦争＝悪などといふ安易なイメージ・概念に左右されてはゐないだろうか。もっとその時代に生きた人の姿・言葉に立ち返って感じてみる事が必要だ」と訴えられた。

熱くするほど日本の歌を歌ってくれたことです。日系の方々
の日本を愛する思いが、自分をつらく恥しく思わせるほど伝
わってきました。また、天皇陛下の和歌や御言葉から陛下の
国民を愛して下さっているやさしい思いにふれ、日本人であ
ることを誇りに思う気持ちが芽生えてきました。

始めての合宿ですが、日本についての自分の無知を痛感さ
せられる毎日でした。東京裁判、靖国神社、教育勅語など今
後独自で勉強していきたい内容がたくさんありました。私は
将来高校の社会の教師になりたいと思っています。合宿でこ
の決意はさらに固まり、生徒に真実の歴史を、日本を守り、
愛するということを教えてやりたいという思いでいっぱい
です。今の気持ちを忘れずに、さらに先人の足跡を追い、日本
の歴史について知識を深めてゆきたいと思えます。

合宿に学びしことを教員になりて生徒に教へゆきたし

先人の足跡の中に教育の源ありとのたまひしかな

亡き祖父と語りまじきを日の本を愛する思ひ芽生えきし今

自分は日本人だと改めて感じた

(拓殖大学 商 一年 宮原壮平)

私はこの合宿を紹介されたとき、友人に「その合宿は右翼
だ」と言われ、少々とまどい、直前まで行きたくないという
気持ちがあった。

ところが当地にきてみると、みんなやさしい人ばかりで正
直いって驚いた。合宿の内容としては、日頃私が忘れがちで
あることはかりで、とても勉強になり私自信「自分は日本人

だ」と改めて感じた。また機会があれば是非参加したいと思
う。

輪になりて班友の話聞きゆけば楽しき話に心躍りぬ

班員に助けられた

(慶應大学 商 二年 齋藤一佐)

今回で二度目の参加です。昨年は班員として、今年は班長
として参加したのが主要因となったと思うのですが、参加し
た感想は全く異なるものとなりました。「班長として」と言え
るほど仕事は全うできたとは思いませんが、昨年の参加経験
から班長として「何か一つでもよいからこれは良かったと言
えるものを得てほしい」と思っておりましたので、そのこと
を念頭に置いて取り組んだつもりです。班長がしっかりして
いない分、班員がそれを補ってくれたので大変助かりました。
今年の夏も一つの良い経験をすることができました。

屋外で阿蘇の山なみ眺めつつ友と語りふことぞうれしき

日本人らしい日本人になりたい

(早稲田大学 商 二年 吉田洋亮)

この合宿において自分は三千年の歴史を持つ日本の国柄を
よく理解することができた。以前から自分は日本に生まれて
きた以上、自国に誇りを持つべきであろうし、それには何よ
りもまず自国の歴史を学び、遠い祖先から受け継がれてきた
日本民族独自の文化に触れ、それを自分の血肉にすることが
大切であろうと考えていたが、その考えがこの合宿によりま

すます強くなった。今後、自分は合宿によって得たことを忘れることなく、真の日本人らしき日本人になることを望み、その実現に向けて精進してゆくつもりである。

神州の尊き国柄知りし今日日本男児であることうれし

第四班 — 男子学生 —

「まごころ」を詠む短歌

(京都大学 総合人間 四年 庭本秀一郎)

五年間短歌を曲がりなりに詠んできましたが、その中で大事にしてきたものは、正直に自分の気持ちを詠むという事でした。

ただ最近、疑問に思ってたことがありました。それは、ねたみ、そねみ、憎しみといった感情も正直な自分の気持ちであり、そのやうなものを歌にできなかつた自分は、自分に不正直なのではないかといふ思ひでした。しかし、今回布瀬さんのご講義の中で、「個我」と「まごころ」は全く異質のものであるということを伺ひ、自分が今まで持ってた疑問が一気に晴れる思ひがしました。小林秀雄さんの『美を求め心』の中の一節、「神経質で、物事にすぐ感じて、いらいらしてゐる人がある。(略)そんな人は、美しい物の姿を正しく感ずる心を持った人ではない。たゞびくびくしてゐるだけなのです」にあるやうに、びくびくしてゐるからねたみや憎しみなどの感情も生まれてくるものではないかと思ひます。

カメラ・レポート5



合宿の一日は「朝のつどい」から始まる。「青年の家」を利用している他の団体と共に国旗掲揚を行ひ、体操をして研修がスタートする。

だからこそ自然や人とのつながりの中に生まれる「まごころ」を詠む短歌を続けてゆくことは、まさに美しい物の姿を正しく感ずること、優しい心を持つことにつながってゆくのではないかと思ひました。

山内君

討論の口火を切りて君は言ふ今日の講義は難しかりきと

解らざることを恥ぢずに解らぬと君言ふ給ひて場も和みたり

うちつけに言ふ君なれど素直なる思ひを述ぶる君はたふとし

山田君

大学に入りて間もなき君なれどサークルを作りたしとて我に言ひけり

設立の趣旨を書きたる長文を我に見せけり「読んで下さい」と

星原君

伏し目がちの言葉少なき君なれど祖国くにをたたへる様はたのものし

(日本大学 文理 三年 山内曉生)

今回の合宿の講義を聞いて、共通のテーマとして、自分は一体何者なのかという「アンデイティティ」と日本人としての自覚や「誇り」の探求があげられると思ひます。

私は普段、この「アイデンティティ」、「誇り」について深く考えたことがなかったのですが、今回参加して、もっと自分というものについて深く考えてみなければならぬと思ひました。

流れ星そのかがやきは刹那せつななれど我が心にはいまもかがやく

感謝のことば

(九州大学 法 三年 星原大輔)

はっとさせられたことがあります。教室で長内先生が、「文化、歴史とか自由とか、そんな言葉を使つてゐるが、自分の頭で考へてゐるか、自分自身の体験を深く味はつてゐるか」と話され、隣の学生に「どうだい?」と聞かれました。その学生は「はい」としか答へませんでした。すると先生は大きな声で、「はい」「じゃないだらう。人から何か教へを受けた時は、”ありがとう”ございました」と一言言ふべきだらう。本当に学問してゐる人、考へてゐる人は先ず感謝の思ひがでてくるものだ」と言はれました。

私も師への「感謝」は大切だと思つてゐましたが、最近自分自信の姿にそれは表はれてゐなかつたやうに思ひます。このことを自分に問はなければならぬと思ひました。

信じるものがない

(早稲田大学 第一文 二年 磨井慎悟)

僕には何も信じるものがない。信じようとしても出来ない。天皇の無私の聖徳も、教育勅語もそのままには信じない。天皇は祖先教の祭祀王ではあつても、神そのものではないし、教育勅語は善のすゝめではあつても、善そのものではない。さうした相對のものを、絶対のものである「かのやうに」信じることなど、出来よう筈もない。だが、僕はその信を笑ふつもりはない。それを信じる人々の真摯、それは確實である

からだ。

吾と君進める道は違へどもその眼の真摯疑ひのなし

日本の歴史を知ることが必要

(福岡県立大学 人間社会 二年 金光祐治)

「日本とブラジル」というビデオを見て、天皇陛下がブラジルを訪れた時、ブラジルは快く迎えている。それは天皇陛下の優しさ、謙虚さ、また表現力のすごさにブラジル人は感動し、それは今も信頼している。そしてまた、ブラジル人は「日本人なら大丈夫」と思ってくれていますが、果たして我々日本人は本当に大丈夫なのかと感じました。

日本人は、外国に出た時、日本の文化を自信をもって話せるのかと考えると、そのような人は少ない。

やはり、よりよい日本に変えていくには、日本の国民が日本の歴史を知ることが必要ではないか。また、日本に生まれ生きているという誇りを持てるようにならなければならぬと思います。

班友と深く語りて夜もすがら語りしことは忘れせぬかも

共同意識の素晴らしさ

(京都外国語大学 外国語 二年 大林尚史)

合宿の率直な印象は、やはり日本文化を通して感じる日本人としての共同意識の素晴らしさであります。昨今、価値観の多様化に因り日本人として一体感はおろか、アイデンティティすら持ちづらくなっているにもかかわらず、ここ阿蘇に



カメラ・レポート6

二日目の午前、ジャーナリスト・徳岡孝夫先生による「覚悟をもって生きるとは」と題する御講義が行なわれ、先生はバレーのフジモリ大統領がゲリラに人質を取られた時に、戦争が始まったと認識し、ゲリラを周到な準備で撃滅させたのは覚悟した者の姿だと述べられた。

於いて、日本人としてのアイデンティティを確立し、さらに一体感を強めていこうとするこの合宿は、一人の日本人として大変心強く思っております。

また、大変素晴らしい班友にもめぐまれ、彼らの思想に触れた時間はこの合宿で持てた最良の時間でありました。この合宿こそが、真の日本人を育てる場であると小生は確信しております。

美しき日本に生まれし誇りをば継ぎゆく子らに語り伝へし

「感動を感じる人間」になりたい

(法政大学 法 一年 山田 浩)

非常に心に残っている三つを述べたい。第一に、全体感想自由発表で発表できなかつたこと。挙手したが発表できず、また来年につなげたいと思う。第二、毎朝、国旗掲揚を体験することが出来て感動した。「おごそかに響き渡れる君が代の調べに合はせ日の丸昇りぬ」と詠んだら全体批評のとき、先生にいい歌だとほめられうれしかった。第三、與島先生のお話が心に残っている。「やさしさ」が満ちていた。純粹さ、正直さを、唯見ているだけで心がなごんできました。

私は今まで、何だかんだと言ったりしてきましたが、それは知識だけの表面的なものであったと思う。私はこの合宿で自分の感動に触れました。「感動を感じる人間」になつていきたいと思いました。

競ひ合ふ松下さんが発表しあわてて手を挙ぐ迷ひうち捨ていくたびも手を挙ぐれども伝はらず発表できず遂に終りぬ

発表を出来ぬくやしさにぞ刻みて今より生きんとぞ思ふ

第五班—男子学生—

これからの生き方を教えてもらつた

(慶應大学 法 一年 齋藤 崇)

この合宿での講義は全て私の心に響くものがありました。現在自分が存在しているのは連綿と続いてきた系統の一人としてであり、従つて、今自分がしなければならぬことは、祖先が大切にしてきた日本の伝統を守つていくことだと改めて確信しました。

また講義と同じ位私が感動したことは、班員の方々、そして班付の先生方が日本を思つて真剣に議論していらつしやつた姿です。私がそこで感じたことは、国文研の方々こそ、「覚悟」を持ち日本文化防衛を実践していらつしやるといふことです。ここへ来て、現在の無意味な世論に流されず日本の素晴らしさを理解して活動している先生方に、自分がこれからのように生きるべきかを教えて貰つた気がします。

阿蘇の地の五日間の研鑽で我が進む道を見つけたしけり

ジャンケンに負けて良かった

(福井工業大学 工 一年 福井剛師)

私がこの合宿に参加したきっかけはジャンケンで負けてしまったからです。そのため嫌だ嫌だと思つていました。しかし合宿が始まつてからはその思いがガラリと変わりました。

それは班別研修がとても楽しかったからです。

今までに自分は一つのことをみんなで作って考え、語るといふことはやったことがありませんでした。話すのが苦手だったからです。しかし実際にやってみると素晴らしいものでした。他人の意見を聞き、自分の考えを述べ、またそれに対して意見を述べる、そして結論を導いていく。この学習姿勢の中に楽しみを覚え、これが学問なんだという喜びを味わうことができました。このような体験ができたのはジャンケンに負けたためでした。本当に負けて良かったです。

この思ひ皆に伝へんと拳手せしに登壇叶はずいと悔しき

班友との交わりが最も嬉しかった

(下関市立大学 経済 四年 藤原平安)

小堀先生がおっしゃった「汝は何者であるか」の言葉が胸に迫っています。日本人として日本に誇りを持ち、日本を愛する心を、より鮮明なものとしていきたいと願っています。

この合宿に参加して最も嬉しかったことは班友との交わりです。お互いが自分の気持ちを素直に語る姿は感動でした。又内に秘めた日本に対する熱い思い。このような事を発見するにつれ、日本はまだ大丈夫だと思いました。

それと共に短歌相互批評などで、お互いの心を理解しようと努め、その人の気持ちになつて考えるという経験は素晴らしい経験でした。

短歌相互批評

班友の気持ちはおのづと伝はれどそをあらはすに言葉いでこず

カメラ・レポート7



御講義の後、各班室に入られて、学生の質問に丁寧に答へられる徳岡先生。

心に刻まれた三つのこと

(島根大学 教育 四年 三島 明)

合宿を終え非常にすがすがしい。今回学んだことで特に心に刻まれたことが三つあります。

一つは「冬の夜」の歌詞で、「過ぎしいくさの手柄を語る」父に「ねむさ忘れて耳を傾けこぶしを握る」子ども達がいたということ。合宿の講義でこぶしを握って先生方の話を聞いている自分が思い返されました。

二つめ、こぶしを握るといことは「第二の国民」としての自覚ではないでしょうか。私は第二の国民として何かをなしたいと思います。

第三に、「覚悟」という言葉です。覚悟とは何なのか、何に覚悟し、どう生きるのか、私に明確には分かりません。ただ覚悟をしたというなら、明日からの生活が、一つ一つ、一歩一歩変わっていくのだと思います。日常生活で改善したいことは多くあります。一つ一つ変えていきたいと思います。

胸に刻んだ二つの言葉

(福岡教育大学 教育 四年 宮原和久)

今回特に二つの言葉を胸に刻ませて戴いた。教育勅語の「中外に施して悖らず」と「ジャポニーズ・ガランチード（日本人は絶対大丈夫）」の二つである。

合宿中幾度か目頭があつくなる時があったが、その一つはブラジル日系人が生き生きとして私たちに呼びかける姿であ

った。高校生たちが体を左右に動かしながら歌ふ姿、瞳は本当に美しく輝いて見えた。何故かくも彼らは輝いてゐるのか。「ジャポニーズ・ガランチード」といふ言葉が生まれたその根本は何であったか。小柳先生のお話を聞きつつ、「教育勅語」がその根本にあるのだと次第に感じられてきた。

日本の歴史の積み重ねを本当に大事にし、この歴史の展開の中にこそ「教育の淵源はあり」と書かれ、最後の方では「中外に施して悖らず」と堂々と響え立つ如く宣明してゐる。この時、「ジャポニーズ・ガランチード」といふ言葉は、「中外に施して悖らず」といふ言葉にその淵源があるのだと思つた。日系人は「教育勅語」を当たり前のごとく、生活に活かしてこられた。その中から自然に生まれたのが「ジャポニーズ・ガランチード」でなかつたかと思ふ。

自己の成長を確認する場となつた

(東京大学大学院 人文 東中野多聞)

この合宿は今回が三回目でした。一回目は大学一年の時、二回目は三年の時、そして今回でした。人生には何らかの「区切り」がある様に思えてなりません。今回の合宿は、二年毎の自己の成長を確認する場となつたと思います。

班員の方はそれぞれ個性の強い方ばかりで、それぞれの政治的主張もある様でしたが、班別研修を通じ、また共同生活を通じ自己の人格を磨くことが出来たと思います。僕も他人の意見の底にある何かをつかみとる事で、少しばかり他人を理解できたと思います。

最後の「全体感想発表」で班員全員が手を挙げ、最初に発表した僕に続いて三島さん、藤原さんが続いた事には本当に感動しました。

次々と壇上に登る班友のその心意胸にせまりく

第六班 — 男子学生 —

もう一度自分なりに考えてみたい

(拓殖大学 経営 二年 新崎良介)

この合宿の参加は初めてで、いろいろな先生方の講義を聞いてもさっぱりわかりませんでした。初日の與島先生の「感受性を学んでほしい」というお話と、小堀先生の「アイデンティティ」「自分が何者であるか」という内容のお話が自分の印象に強く残っていて、これから先考えていこうと思います。また、班別研修で一人一人の意見を聞き、自分の意見を言うということがとても難しかったです。しかし、自分のどんな小さな疑問でも、皆さんが分かりやすく教えて下さった事がとてもうれしかったです。そして、「夜の集ひ」の班の出し物で五ヶ条の御誓文を皆で暗唱しましたが、覚えるのに苦労しましたが、とても盛り上がり大変楽しかったです。

最後にこの合宿で知り合った友達を大切にしていきたい。また、講義を聞いてわからなかった所は、家に帰っても一度資料に目を通し、自分なりに考えてみたいと思います。

夜の集ひの出し物のため五ヶ条の御誓文を暗唱せし折

夜更けまで集ひの練習いそしみて明日までにと御誓文覚えし

カメラ・レポート 8



真剣な眼差しで御講義に聞き入る参加者。

日本の心とは何なのだろう

(九州工業大学 情報工 二年 荻田俊二)

合宿で多くのことを学んだ。しかし、日本の心とはいったい何なのだろう。天皇陛下のことはかり話すのだろうか、わからない。講義内容が難しく要点がわかりにくいと何度も思った。先生のお話の中でも、御自身の生活の中で感じたことを話して頂いたことぐらいしか、しっかり理解できなかったと思う。この疑問に感じたことはいつ解決するのだろうかと思うと頭が痛くなってきました。来年の合宿までに何かを得ているのだろうか不安です。

自分と他人が共感している部分が異なり、大まかに見れば似ていても何かが違うように思えた。なぜその人がそこまで感動するのか、話を聞けば聞くほどわからなかった。ただ今の不安を解決したいと思うから、今回の講義で教わったことを考えていきたいと思えます。

班友とともに過ごしたこの時を自身の誇りとするなり

日本を自分の姿で体現していきたい

(早稲田大学 第二文 二年 松下文彦)

ビデオ「天皇陛下とブラジル」の中でサンパウロ州知事が「天皇陛下に対してお人柄以上の何かを感じる」と言われたが、私はこの「お人柄以上の何か」とは何なのだろうかと思った。このことについて班別研修をし、また、小柳陽太郎先生にご質問して、それは、長い歴史・伝統を背負われている

から威厳が感じられるのではということが分かってきた。教育勅語の「朕汝臣民ト俱ニ、拳々服膺シテ、咸其徳ヲ一ニセシテトヲ庶幾フ」とのお言葉に表された、天皇と国民が一体になってやっていくのだという「君臣相和」の関係が、ブラジルに於いては天皇と日系ブラジル人との一体感として顕現されたのではないかと思った。そして、天皇陛下はお姿やお言葉を通して、日本を表す一方、世界に通ずるものをも表されている。小堀桂一郎先生は御講義の中で、「世界は文明が衝突しており、国家が生き残る為にはアイデンティティの確立が必要だ」と語られ、「文化防衛の為には、一人一人がその戦士にならなければならない」と話されたが、私自身も文化防衛の戦士になるべく、天皇陛下のお姿を見習いつつ、日本を自分の姿で体現していきたいと思う。

伝統を負はるる姿に感じらるる陛下の威厳我も持ちたし

これからも短歌を作っていきたい

(金沢大学 理 三年 宮澤冬樹)

三日目の山方先生の体験発表をお聞きして、急に祖母のことを思い出しました。祖母は七月に一時危険な状態で入院しておりましたので、かなり不安でした。その日のうちに実家に電話をかけ祖母の元気な声を聞いて安心しました。その時の気持ちをお二回目の短歌創作で「受話器口祖母の明るき声聞きて胸なでおろし一安心す」と歌にしました。この歌を班別相互批評で話し合った時、班付の先生に「山方先生のように手紙を書いたらどうですか」と言われ、祖母に手紙を出す決

心がつきました。

これからも言葉だけでは伝えられないことなどは、短歌を作って伝えていきたいと思います。

昨日の歌をつづりし手紙をばうけとりし祖母の表情浮かぶく

歴史を学ぶ意味を知った

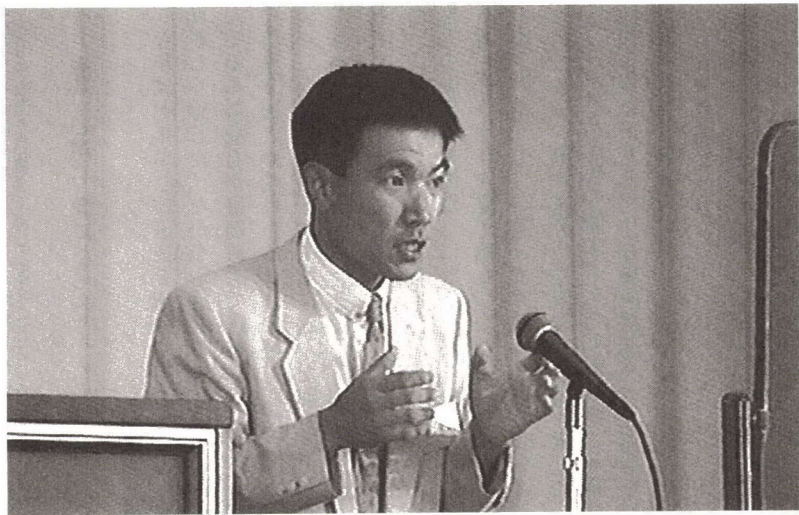
(鳥根大学 総合理工 三年 谷崎絃史)

今回の合宿で最も心に残った事は、志賀建一郎先生が古典講義の中で「自分の生き方、自分がどういった流れで、どういった位置にあるかといふ事を考へる為に、歴史が必要なのだ」と言はれた言葉だった。自分は以前から歴史に興味を持ってきたが、「なぜ歴史を勉強するのか」といふ疑問が絶えずあった。この合宿に参加するまでは知的要求を満たす為、過去の過ちを繰り返さない為、歴史上の人物を学ぶと勇気が湧いてくるといふ考へを持ってゐた。しかし、先生が話された事は、今後グローバル化の進む日本で、自己のルーツや自国の伝統文化を学び、日本人としてどう生きていくか、どう日本を守っていくのかといふ事を考へていく上で大変重要な事だと思った。小野吉宣運営委員長の話にあった、戦前まであった日本人の歴史や伝統といった縦糸の部分の回復して行くといふ事にもなると思ふ。この合宿に参加して得たものを活かして、自国の歴史や自分の理想を考へていきたい。

合宿を終へて

明日からは新しき日の生まれと阿蘇に学びしは決して忘れじ

カメラ・レポート9



短歌創作導入講義。福岡市立香椎小学校教諭の是松秀文先生は、初めて短歌を作る人のために短歌創作の意義・作り方の基本を説明され、自分の気持ちを見つめて素直な気持ちで作れば心のこもった歌が詠めると語られた。

言葉を磨いていきたい

(福岡教育大学 教育 四年 別府正智)

「合宿を顧みて」での「日本は縦の糸たる歴史・伝統を見失っている。どうして縦の糸がなくてこのような織物ができようか!」との小野吉宣運営委員長の言葉に、大変熱くこみ上げる思いがした。

私は、日本人は日本人としての自覚を強く持たなければならぬと思っていました。しかし、加納先生の「国民はたとへ無自覚であっても、心のどこか奥底で感じとっている。それが日本の姿、国体だと思ひます」との文章に心打たれました。教育勅語の「朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ」とのお言葉や新日本の建設の詔書の「朕と其の心を一にして自ら奮ひ自ら励まし……」とお言葉にふれ、陛下が常に国民の先頭に立たれ、国民を先導して下さっている、有り難く心強い言葉であると思われた。そして、このような陛下のお心に素直に響く心や教育がブラジルにあるが故に、日系人が誇り高く、限らない感謝と喜びに満ち溢れているのだと思う。だからこそ、陛下が日本では見せられない、あのようなすがすがしく、にこやかな笑顔をブラジルで見せられたのだらうと思う。陛下のあのようなお顔を国内で拝謁できるような日本、学生となりたいたと思つた。その為に、まことことば、真心(和歌)を磨きたいと思う。偽りの言葉に敏感に反応する言葉・心を養つていきたい。小柳先生が田中耕太郎氏の教育勅語に関する言葉を見抜かれたように……。

小柳先生の御講義を聞きて

偽りの言葉を見抜きて排したるまことことを磨きゆきなむ

皆の心が一つになった

(東急建設(株) 茅野輝章)

今年は七年ぶりに班長を務め、四泊五日の班友との生活は真新しく感じた。なかなか講義の内容について行けずに苦しんでゐる新崎君が班別討論で班友や班付の先生、先輩方からの言葉を何とか受け止めようと努力してゐる姿、そしてその姿をしかと見つめそれを歌に詠んだ別府君の歌が印象に残つてゐる。また、志賀先生の古典講義に嬉々として臨む谷崎君、初めての短歌創作で七首もそれも感動の良く表現された歌を作った宮澤君、何事にも前向きに取り組んでゐた萩田君、先生方の御講義を汗だくになりながら一所懸命に聞いてゐた松下君、それぞれの姿が頼もしく思ひ出される。最後の晩の夜の集ひの後、十二時過ぎまで掛つて皆の歌を直し合つた事は忘れたい。皆の心が一つになった思ひがした。小堀先生が「一人一人が文化の戦士となつて欲しい」と語られたが、今回知り得た班友と、住む場所は違つても連絡を取り合ひ、共に励み合つていきたい。

班別懇談の折に

今日の日を吾の誕生日と聞き知りて歌をうたひて祝ひくれにし
班友ら皆書き寄せくれし言の葉の有り難くして胸にせまりく
おのおのが文化の戦士とふ言の葉を胸に励まん班友らと共に

第七班―男子学生―

班友にお礼を言いたい

(福井工業大学 工一年 河村 明)

初めてこの合宿に参加させてもらった。不安と嫌気いっぱいでした。しかし、来て良かったと思います。まず、自分の言いたいことを言うことがあまりにも難しいこと。自分が何も考えないで生きているのじゃないかなと気付いたこと。それが一番に実感したことです。それでも班友は、僕の意見をわかってくれようと必死になってくれたことにお礼を言いたいです。

合宿を体験しての心の生長

来た時はまだ水かけぬ種なるが帰るころには芽の出でにけり

国名まで変えられたことに怒りを感じる

(青山学院大学 経営 一年 川島正人)

私は和歌に「触れる」という事ができ、さらに日本の「情」を歌う和歌を知る事ができ、嬉しく思っております。

小田村四郎先生にお会いできた時には言い表せない力を感じました。これが日本人の持つ力なのかと思いました。

私は大日本帝国の再評価を願ってやみません。GHQは国名までを変えてしまったのです。その事に対する怒りを感じました。

この合宿に参加できて、本当によかったと思いました。



レクリエーション。短歌創作を兼ねて、高岳の麓の高原を班友と楽しく散策。

悠久の国家理念の追憶を

（早稲田大学 政治経済 四年 田中裕一）

小田村寅二郎先生の開会式で仰言ったお言葉「私はひそかに憶ふ。日本の国を本来の国家にするためには、単に既往に戻す努力では何の効果もない。極東国際軍事裁判や、東京裁判史観の克服だけではなく、記紀万葉時代からの史観を基に悠久の国家理念の追憶からスタートするしかない。それが今後の国民に課せられた重大な責務と思ふのである」を胸に刻みてゆかうと思ふ。班友との話の中でより深まったが、戦後近代の克服は、敵陣営の論の誤りを指摘し直すことのみでは成し得ない。戦後世代のよろこびかなしみを共にして、共に日本に立ち返ってゆくことで初めて成し得ると確信した。小堀先生は「子供に畏れ慎みの心を教へるには理屈ではダメだ。形から入れ」と仰言った。形を厳修し、そこからあふれ出る内的生命力によって、自己を友を祖国日本の命に立ち返らしめたい。

戦後思想を撃つ研鑽とともに、日本悠久の大生命を呼吸する祈りと学問に皆といそしみてゆきたい。

「自分一人を立て」

（九州大学 工 四年 村上雅彦）

自分が講話を聞く中で、心につきささったことは「自分一人を立て」ということです。徳岡先生のお話で、「覚悟」する前に自分で立つことが大事だと言われました。また、宝辺

先生の言われた「自分一人で考えろ」との言葉。小野先生が「きつい』『あつい』『ぬむい』ということをすぐに言う」とおっしゃいましたが、まさに自分がそうだったなあと気付きました。ブラジルの日系人に残っていて、日本人にはあまり残っていないということに「悔しい」と思いましたが、自分自身がまず変わらなければ、本当の日本人にならねばならないと思いました。これからも、学問を深めていくにあたって、自分自身の姿勢から変えていかねばならないなあと思えました。

眠くともお腹すくともひたすらに友の歌をば偲ぶ友らは
外輪の山の高さは同じとぞさもめづらしげに眺むる友は
ブラジルの同胞達に劣らざる日本人としていざ我生きむ

自分の存在を肯定してもらえぬ歎び

（金沢大学 工 四年 濱田豊富）

合宿中に僕のことを短歌にしてくれた人が二人いました。その短歌の一つについて書きます。それは同じ班の田中裕一さんの歌で、休憩時間にバドミントンをしていて、田中さんが羽根を二階のバルコニーに打ち上げてしまったのを、私が「俺行くよ」と言ってさっさと取って来た時のことを詠まれています。私は全く意識していませんでしたが、「打ち上げてしまった、どうしよう」と責任を感じていた田中さんは僕の行動に感動して歌にまで詠んでくれたのです。田中さんが、僕に「自然に出る優しさ」があると教えてくれたとき、僕も内心とても感動しました。それは、自分という存在の有

為性を肯定してくれたからだと思います。そしてこの、自分の存在を肯定してもらえる欲びは、短歌によって心を通わすことにも増して大切だと感じました。

最後に、合宿で知り合った皆さん、特に田中さんに感謝しています。

短歌相互批評のことを

真剣に感じあはむと思ふため定めし時間トキは短しと感ず

「聞く」ことの難しさ

(佐賀大学 理工 一年 高橋宏太)

この合宿で自分が一番心がけた事は人の話を聞くという事でした。今まで講義等では聞くという事のむずかしさを感じていましたが、普段の会話や班別討論等でもむずかしさを感じ考えさせられたのは初めてだったと思います。さらに班別討論では、人の話を聞き、自分が意見を言う事のむずかしさも身にしみて分かったと思います。

話す人の気持ちや考え方を察しようと聞く事に集中するのは大変おもしろかったです。自分は人の心を察したりする事が苦手な方だと思うので今後ももっと心がけていきたいと思っています。

吾は誰か何故生くるのか十七ゆ思ひ悩みしこと幾度もあり
誠なる答見つけむと心に決めてこの合宿も参加しにけり

久しぶりに学生班の班長をした

(株神戸製鋼所 北村公二)



カメラ・レポート11

二日目の夜。「時代と言葉」と題して、福岡県立柏陵高校教頭・志賀健一郎先生による、古典輪読講義が行なはれた。先生は、明治天皇が国是として示された「五ヶ条の御誓文」が聖徳太子の「憲法十七条」の御精神を彷彿させ、しかも、昭和二十一年の「新日本建設の詔書」の昭和天皇の思ひに繋つてゐることに言及された。

久しぶりに学生班の班長をさせていただきますでしたが、至らぬことばかりで班員と満足な話ができません申し訳なく思ひます。開催が危ぶまれましたが運営委員の一人として思ふやうに動くこともできず、ただ日頃の努力の足りなさを痛感するばかりでした。

外来講師の講義も素晴らしく、また短歌創作や班別研修も、一応「成功」といへるのではないかと思ひます。今の世の中で、この合宿が開催される意義は甚だ大なるものがあります。

ビデオ「天皇陛下とブラジル」を見て

右左身体揺らして活き活きと唄ひゆくなり移民のうらはは

はるかなる国を慕ひて歌唄ふ子らの顔皆輝きてあり

この子らの思ひ描ける日の本の美しき姿を甦へらさなむ

第十一班—女子学生—

日本文化とは自分自身

(福岡女子短期大学 秘書 二年 諫山由紀)

この合宿で一番心に残っているのは「日本文化とは自分自身」であると言うしかない、と言われた長内先生のお姿だった。言葉でなんて言えるものじゃない、伝えるとすれば自分の姿を見て下さいと言うしかない。その言葉に自分自身、今まで感動したことをどれぐらい姿に表せていたかと考えさせられた。日本の女性として、正座することもしつかりできていない私でいいのだろうか、正座の中にも日本女性の文化があるのだから、それを表していきたいと思ひ、正座を班友と

共ががんばった。立派な人を見ればそうなりたいと思うもので、立派な生き方をしていれば後につづいてくるものだと言われた長内先生のお姿の一つ一つに、私達の話す言葉をじっと目を閉じて聞かれる姿や、私達が「方言」と言っていたことを「おくにことば」だと言われるお姿に、とても心が温くなった。私もそのように人の言葉の奥にその人の心、言葉の中に流れるものをぐっと心を寄せて唄んでいけるようになりたいと思つた。人の生き方を学ぶ中で、それを自分の姿として伝えていくことが大切なのだと思つた。今回教育勅語をはじめてしっかりと読んだが、その内容を姿をもつて示された「天皇陛下とブラジル」の中の日系人の姿、そして国文研の先生のお姿にとても感動した。教育勅語を受け継ぐ者として、そのお姿に続き、姿を示していける日本人(当り前の日本人)になりたい。日々、自分の生き方を問う中で、目を輝かせて学問に取り組んでいきたいと感じた。四泊五日、本当にありがとうございました。

全体発表の折に

壇に上がり言はむとすれどなかなか手あぐる勇氣出でこぬなり

昨年も勇氣の出ず発表をせぬまま帰りしこと思ひ出す

油山で小林先生の言はれしことを思ひだして

合宿で感じしことを語りしに「発言せんと」と先生に言はれけり

「来年はがんばります」と先生にこたへしことを思ひ出したり

先生にこたへし我を胸におき勇氣出して手をあげにけり

ブラジル日系人の姿に感動した

(佐賀大学 教育 三年 橋本さつき)

一番感動したのは「天皇陛下とブラジル」の映画で『夢の世界へ』を歌うブラジル日系人の姿でした。涙を流しながら、目を輝かせながら歌う姿に感動しました。また、ブラジルの村崎道徳さんの手紙で、母親が村崎さん兄弟に「日本語を忘れてはいけません。何故なら日本語の中に日本精神があり、大和魂があるのですよ」と戒められたところに感動しました。そしてはっとさせられたのは、明治天皇陛下の教育勅語の言葉です。「教育ノ淵源亦実ニ此ニ存ス」つまり「これから教育を押し進めてゆくその源は、このような日本民族の歴史的体験の中に求められるのである」とおっしゃっています。「歴史的体験の中に」ということは「教え」「規則」の中にはなく、「日本人の足跡」の中にあるということにはっとさせられました。どういう人がどう生きられたのか。それを教えることが教育に必要なことだと気づかされました。「覚悟をもって生きる」「文化防衛の戦士となる」ことは、自分の身より公のため、国のために尽くそうとされた人たちの生き方に学んでいくことだと思います。

御製、防人の和歌、聖徳太子様の文章に触れることは、その言葉に宿るその人の魂、その人の奥にある大和魂を感じるのだと思います。簡単に言葉に表現できませんが、目を輝かせ、涙を流しながら歌う日系人の子どもたちは、きっと祖父母や両親から昔話のように語られて、祖先と祖国とのため



カメラ・レポート12

御講義の後には、各班に戻り、講義のポイントを確かめ合ひながら、感想や疑問を班友それぞれが出し合ひ語り合ひ、御講義の内容を深め合ひてゆく。

のつながりをもち続けているのだと思います。

和歌、古典にたくされてる”まごころ“をじっくり味わって、文化防衛の戦士として、それを汚すものに敏感に反応していきけるような人になりたいと思います。

「天皇陛下とブラジル」の映画を見て

日系人の涙うかべて声たかく日本の歌歌ひけるなり

日本がとても好きになりました

（東北女子大学 家政 二年 久保田響）

私は大学の先生におすすめていただいて、この合宿に参加しました。初めはどんなことをやるんだろうとか、何をお話されるんだろうという気持ちで、特に強い思いのようなものはなかったのですが、自分を鍛えることができそうな気がして参加させていただきました。合宿を終えてみて、今、心の中に残っていることを文章にしようとしても、ここには書きつくせないほどです。振り返ってみて頭に浮かぶその一つ一つの瞬間を書こうと思います。私は同じ青森県からいらしている国文研の長内先生のお言葉「自分自身が日本文化なんだ」ということに強い思いを抱きました。はたして自分は胸をはって、私が日本文化です、と言えるだけの人間であるかという事です。また、その時に「自分とは何なのか」ということを考えました。そして「天皇陛下とブラジル」でも日系人の日本へ対する思い、合唱する生徒達一人一人のあの澄んだ目、私は自分が恥かしくなりました。これから自分は何をなすべきか、どう生きるべきかを本当に自分の心の中にきき、

考えることのできた合宿だったと思います。また、真心を素直に、適切な言葉で詠むことはこんなにも難しく、ここまで自分の心にきかなければ作ることでできないものなのだなあと思えました。奥深い世界に入り込めた喜びは大きいものでした。また、私の大切な宝物となった班友と過ごした時間というのは本当に忘れることができません。班友の心を聞いて語ったあの真剣なまなざしと、意見や気持ちに感動しました。自分を顧みて反省させられることが沢山ありました。これから日本人として歴史を、文化を大切にすることを忘れず、誇りを持って生きていきたいと思っています。私は日本がとても好きになりました。この合宿で過ごした時間や学んだことは、自分の心にしつかり留めておきたいと思っています。

最後に貴重なお話をして下さった先生方、班友、この合宿に関わった皆様に、そして私をこの合宿にすすめて下さった東北女子大学の先生方、本当にありがとうございます。私の貴重な心の財産としていこうと思います。

合宿の全体感想自由発表の折に

壇上で思ひ語りし班友を見て思ひであふれ涙のみつつ

班友と真剣に語り合った

（東北女子短期大学 被服 二年 内山恵里）

私は先生に勧められてこの合宿に参加しました。ここに着くまでの道のりが長く、いろいろな面でもとても心配でした。しかし部屋に入ると、班の人達がとても親切にして下さって、私の心配もどこかへ飛んで行きました。

ご講義では、私達が忘れかけていたものに気づいて、ハッとすればかりでした。それについて班友と真剣に語り合ったあの日のことが一番心に残っています。これをきっかけに日本人としての私のあり方を考えながら生活していきたいと思っています。

最後に、このような機会を与えてくださった今村城太郎先生に感謝申し上げます。又、このような素晴らしい合宿を主催なさっている国民文化研究会をはじめとする皆さん、本当にありがとうございます。皆さんとお会いできたことは私にとって画期的な出来事でした。

縁ありて阿蘇に^{あそ}出会ひし我が友よ集ひし日々を忘るべからず

心豊かに生きる

(中央大学 総合政策 三年 岩越里子)

合宿に来て、私の普段の生活では味わえない体験ができたことが一番の収穫だったと思います。同年代の方々が、国とか文化とか歴史という重いテーマについて真剣に語っているのを聞くことができたこと、又、班付の先生や班長さんなど、人生の先輩方が、私達学生と向き合ってお話し下さったことなど、とても新鮮でした。

講義全体を通して私が考えたことは、結局、人としていかに心豊かに生きるかを考えよ、ということではないかと思えます。心の貧弱さがさかんに叫ばれ、本来どのようなあるべきか、何が欠けているかを考える時、自分とは何なのか、という事に最終的には行きつくのではないか、そして日本人と



三日目の午前、明星大学教授・東京大学名誉教授の小堀圭一郎先生による「日本人はどう生きるか—『国際化』の要求と民族文化の防衛—」と題する御講義が行なはれ、先生は国際化の流れの中で受容しても良いものと受容してはならないものの一線を画することの重要性を訴えられ、国語や民族的信仰といった文化は民族のアイデンティティとして守るべきものと語られた。

して生まれ育った私達は、自分自身の中核の中に、日本の歴史、文化を受け継ぎ、将来へとつないでいく生き方によって、自己を確立し、心豊かに生きていくことができるのである、私は合宿全体を通して、先生方がおっしゃりたかったことはこのようなことではないかと解釈しています。

最後に、無事、集団生活を送ることができるだろうかと不安でいっぱいだった私と、楽しく過ごしてくださった同班の皆さんに感謝したいと思います。ありがとうございます。

キャンプファイヤーにて
夜の闇東の黒き山の端より金色の満月顔を出したり

大切なことは目には見えない、心で見なければ

(東北女子大学 家政 二年 佐々木由枝)

今回合宿に参加して思うことは「参加してよかった」ということです。この合宿でいろいろなことを感じ学び得ることができました。その大きさに自分自身驚いています。胸の中にある思いは、言葉にすることが難しく文として表現することではできません。でも私の好きな言葉である「大切なことは目には見えない、心で見なければ」ということが少しわかったような気がしました。いつも言葉として理解し、目で見ただけで物事を知ったつもりになっていたのです。でも大切なことは、自分の心の目で相手の立場になって込められた思いを感じる努力をすることだったのです。このことは人が生きて行く上で見失ってはいけないことのように思いました。

もう一つ思ったことは、自分が存在しているということ

した。普段、人の話を聞き入れるばかりで、自分を思いを相手に伝えていなかったのです。その理由として、自分の心を見せる恐怖心があったからだと思います。自分の意見を聞き、受けとめ、考え合える友、という存在を忘れていたからだと思います。それらを班別研修を行って気づいたとき、私はこれまで相手をどのように理解してきたのだろうかと思っていました。心を開き語り合ったこともないのに、どうして相手を知っていると云えるのだろうか。このような語り合える機会が、日常少ないということを思いました。けれどもこれこそが心を成長させる上で大切なことだと思えました。

この合宿で得たことを忘れず、そして疑問を持ち続けて生きていこうと思います。

心から素直に語れし我をみて班友の大事さ改めて知る

班友と笑ひ合ひたるこの時間止まればよいと願ふ我あり

表面的な意見から積極的な発言へと変わった

(九州女子短期大学 英文 二年 竹林直子)

班ごとの活動・研修が多かった合宿でしたが、目を重ねるたびに班員の結び付きが強くなって行くのを感じました。それは研修の際の発言に顕著に表れていたと思います。合宿前半での講義を受けての班別研修では表面的な意見や、先生はこんなことをおっしゃっていましたという説明に近い発言だったものが、研修を重ねるごとに「この講義のこの言葉に、この文章に、私はこう思っています、だからこれから私はこのように生きて行きたいと思います」といったような具体的

な意志・課題として自分の中にとどめて行こうとする姿が印象的でした。そんな班員の姿に感化され、私も積極的に発言するようになりました。研修中での皆の姿や、自分の心を真の言葉で表現出来ないもどかしさを和歌に詠んだ班員もいて、私たちの班別研修は、ただの感想発表会ではなく、互いがそれぞれの意識を向上させ、深めて行く、素晴らしいものとなったことが喜びとなっています。

また、このような全国の仲間が集う合宿に参加したからこそ、出会えた友とのつながりをこの場だけのものではなく、それぞれの地に帰ってから高め合う関係でありたいと思います。

五日間共に学びし班友は壇上に立ち活き活き語る

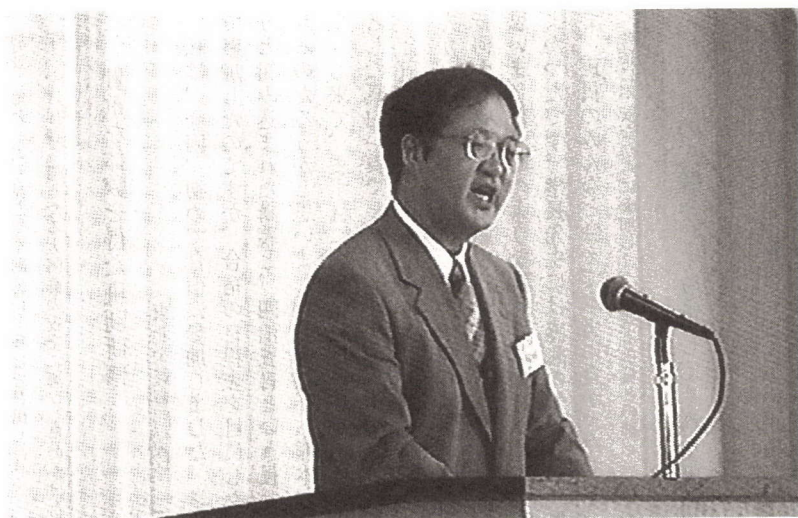
友らとの共に学ぶ喜びを教えて戴いた

(国文研 清水久仁子)

最近では家でゆっくりしていることが多く、この合宿の日程に耐えられるのか、また班長という役ができるのだろうかと初めはやはり不安でした。しかし、與島誠央先生をはじめ心のゆり動かされる先生方のお話を聞き、こんな素晴らしい学びをさせていただけることの感謝がよるこびとなり、とても楽しい合宿となりました。

班友はみんな誠実で可愛らしく、みんなと話していると忙しいのになぜかゆっくりとした、と言うか何か時間の感覚がなくなってしまうのも不思議な体験でした。全体発表では中園さんという学生さん(長崎大・教育・二年)が「友とのつ

カメラ・レポート14



住友電工(株)布施雅義先生による「創作短歌全体批評」。全参加者の歌稿をもとに作者の気持ちをたどりながら批評をし、添削が行なわれ、相互批評のポイントを話された。

なかりを通して学ぶことができるんだなあ」と言うことをおっしやっています。なんてすごいことを言うんだらうと感動いたしました。この合宿に参加させていただく中で、友らとの共に学ぶ喜びを教えてください、本当に有難うございました。

友だちの言葉の葉聞けば日の本を親しく思ふ我に氣付けり

第十二班—女子学生—

日本人としての使命をつかんだ

(東北女子大学 家政 二年 高橋沙都子)

この雄大な阿蘇で、私はこの夏、すばらしい経験をすることができました。これも、学長先生の御紹介があったからだと、とても感謝しております。はじめは、私の浅い知識では先生方のせつかくのすばらしい御講義も理解できず、意見を発表することも無理だと思ひ、参加する事を悩んだこともありました。そんな時、友達に、「わからなくても、話せなくてもいい。いろいろなことを聞いて、自分が感じた思いを素直に伝えてくれればいい」と励まされ、私は勇気をもつて一歩を踏み出しました。そのおかげで、班友と共に日本人として日本を支える使命のようなものをつかみ得ることができました。お互いに心を感じ取ろうという気持ちの温かさを改めて感じました。この気持ちをこれからの生活に活かしていきたいと思ひます。

一夜の集ひの折

肩並べ離れし君と見た星を阿蘇にて我は思ひ出しけり
手みやげに持ち帰りたる大阿蘇の夜空に舞ひし星のかけらを

貴重な体験を得た班別研修

(東北栄養専門学校 二年 一戸利香)

私は、今回、初めて合宿に参加しました。学長先生の推薦で参加したのですが、合宿の日程表を目にしたとき、びっしりと組み込まれた講義と、四泊五日という長い期間に耐えられるのだろうかと思ひました。青森から熊本に長時間かけてやって来て、まず目に焼きついたのが、美しい緑ともくもくとした真白い雲でした。

合宿では講義を終えた後いつも班別研修が行われていましたが、私には辛い研修でした。講義内容が難しくても班員は皆何かを感じ取っていて、私も皆のように発表ができたらと思ひました。このような貴重な体験をさせていただき本当によかったです。学長先生には感謝の気持ちで一杯です。そして、班員のみならずと会えて本当に良かったです。

合宿に不安ながらに参加して心に残る班員との絆

一人の人間として尊重してくれた班別研修

(東北女子短期大学 保育 二年 井手千尋)

私は世の中の社会情勢は、ほとんど把握していません。ましてや日本の文化のことなど考えたこともありませんでした。そんな私が学長先生の推薦を頂き、この合宿に参加する

ことになり、とても不思議に思いました。全国から集まった方々の顔を見た時、大変な所に来てしまったと不安に思いました。話しかけて下さった班の方に初めて発した言葉は、「私は難しい事はわかりません」でした。しかし、その方は、「自分の意見言い合おうよ」と言って下さり、その言葉に自信がつき、この合宿を乗り越えることができたとように思います。

私が一番感動したことは、班別研修の時、班員が皆、私の話真剣に耳を傾け、同感してくれたり、意見を言ってくれたことでした。一人の人間として尊重し合うことができたことが一番心に残っています。

夜の集ひにて

友どちと手を取り合ひて歌ひゆけば皆の真心笑顔に現る

考えが深められた班別討論

(青山学院大学 経営 二年 小川美和)

私は今回、親戚の叔父の勧めもあり合宿に参加しました。私はあまり行動的な方ではないので参加するかどうか悩みました。ですが、この合宿には多くの講義があり、自分の視野を広げるにもよい機会ですし、何か得るものがあればと思います。実際参加してみても、この四泊五日は大変充実したものでした。特に、講義だけで終わらず、その後の班別討論では班員皆の意見を聞くことができた事が良かったと思います。同じ講義を聞いても様々な捉え方があるのだと思うと同時に班別討論をすることによって講義の内容をより深められ



班別による短歌相互批評。班員の歌を一人づつ皆で作者の気持をたしかめながら、歌の表現をよりの確になるやう添削していく。

ました。また、討論によつて、自分の表現力のなさ、考えの浅さを感じさせられました。今回の合宿で得たものをこれから生かしていければと思います。

気がつけば四泊五日過ぎゆけど集ひしこの地離れがたし

自分の中にある日本人らしさに自信をもちたい

(福岡教育大学 教育 二年 相浦佐知子)

私は今回、この合宿に参加するのは二度目です。昨年よりも学ぶ姿勢があり、班友にも恵まれ、有意義な五日間でした。合宿の中で、私は「文化防衛の兵士となれ」という言葉が、大変印象に残りました。しかし、文化伝統を受け継ぐといった想いはあるのですが、具体的にどうしてゆけばよいのかわかりません。まずは、文化を知らなければと思つたのですが、それ以前に、自分の中にある日本人らしさを自信をもつて表していくことなのだと思ふかされました。また、慰霊祭の前に紹介された、寺尾さんの和歌に涙する友人を見て、その感じる心がすばらしいと思ひました。今は、自分の祖父母に対しても涙を流せないような、命の分断を感じるといふことを友人と共感しました。私は教師を目指しているのですが、私たちができることは、教師となつて、わずかな力でも、命のつながり、縦糸を修復していくことだと思ひました。私が教師、親となつたとき、子供たちに日本人としての自覚や誇りを育んでいきたいと思ひます。そのためにも、私自身に日本を感じとつてもらえるよう、自信をもつた生き方をしたいと思ひます。

友どちの壇上あがる姿見て我れも思はず右手のあがる

日本人として生きたいという内発的な願い

(長崎大学 教育 二年 中園まどか)

今回合宿に初めて参加して学問をするという喜びを知つた。私は今まで学問というと、自分で本を読み、思考するものだと思つてた。しかし、この合宿で、先生方の御文章の一字一句の中に込められている命といふべき思いを偲び、自分達の生き方に重ね合わせ、班員たちと共に感じ、心が重なる瞬間があつた。学問というのは、友と共に行うことにより、喜び、悲しみ、苦しみを体験できるのだと思つた。そして、もう一つ合宿に来て、自分の中で日本人として生きたいという理屈ぬきの内発的な願いがわきおこつた。これは、寺尾さんの和歌を偲ばせて頂いたことや、「天皇陛下とブラジル」のビデオを見て心の底から湧き上がった。最後に、この五日間、泣き、喜び、悲しみを共にした班員のみんなにお礼を言いたい。そして、いつも暖かく見守り御指導して下さいました。生方ありがとうございます。これからの日々、日本女性として恥ずかしくない私であるよう、努力していきたい。

日の本の命こもりし言の葉を深く心にきざみゆきなむ

和歌を通して心通じ合う世界を得た

(九州女子大学 音楽 三年 石松知恵)

今回初めて参加させて戴きましたが、本当に来てよかったという感動でいっぱいです。歴史の問題や文化、天皇陛下の

お話など、感動はあったのですが、一番私にとつての感動は実際に、小柳先生、長内先生などたくさんの方と直にお話をさせて戴いたことです。そして、和歌を通して班員みんなと心通じ合う世界ができたことです。先生方の御講話や一つ一つの御言葉には、熱き情熱とあたたかさを感じました。それは何故か、と思う時、昔ともに戦った仲間や亡くなつていった友への思いがあるからだと思います。先生方の詠まれた和歌にはたくさんの方に対する思いがよみ込まれていました。数十年たった今でも守り語つていこうとされるのは、やはり、私達若者に感じとつてほしいという願いがあるからだと思います。そう思う時、私は日本人として生まれてきたことが、有難く、うれしいと思えてきます。また、班員と共に生活し、和歌を詠み語り合う中で、自然と心を開き、自分の胸の内にある思いを語り合うなかで一体感ができました。私は今まで和歌にふれる機会は多々あったのですが、今回のように言葉を見つめ、皆と共に共感しあう喜びを体験したのは初めてでした。最後のお話の中で日本文化は縦糸と横糸が重なりあった織物であると言われましたが、その体験を今回させていただいたのではないかと思います。班員の村山先生が、「今のあなたたちの姿をそのままあらわし、言葉にしていって下さい。そうしたら立派な日本女性になります」と言われました。自分の中に眠っている日本人としての感性はたくさんあると思います。それをありのままに表わしてゆける自分でありたいと思います。



「慰霊祭」。戦時、平時を問はず、祖国日本の為に尊い命を捧げられた方々の御霊を、屋外に設営された祭壇で心静かに慰める。

日本人としての美しい面を学んだ

(熊本市立西原中教諭 山方富美子)

国文研の合宿には数回参加させていたでいています。今回の合宿で、また一つ、日本人としての美しい面を学ばせていただきました。

先人の方々の残された文化を真摯な気持ちで受け止め学んでいかなければならないことを痛感しました。「文化」と一口に言うものの、それは何かと具体的に考えた場合、多くの様々なものを意味するのでしょうか、日常生活の中で、自身自身の身の回りの場面から学び、またそれが実践に結びつくように心がけていきたいと思えます。

また、今回十二班の班長をさせていただきましたが、班員の方々にとても恵まれ、初めての参加者が多くいらしたのですが、皆さんとても前向きに、素直な態度で班別研修にのぞまれ、私自身、皆さんの姿勢に大変学ばされるものがありました。

また、今回「青年体験発表」をさせていただく機会をいただきましたが、日頃何気なく見過してしまいそうな仕事での取り組みを振り返ることができ、心より感謝致しております。本当に有難うございました。

合宿の最後となりし日の夜は時を惜しみて友と語らむ

第十三班—女子学生—

非常に充実した日々を過ごすことができた

(東北女子大学 家政 三年 中野渡えみ)

恵まれた環境の中で先生方のご講義を聞き、衣食住を共にしながら班友と語らい、歌を詠んだり、非常に充実した日々を過ごすことができました。短歌相互批評の時には、班の方から「創ることに信じられないくらい上達していつてるね。」との言葉をいただきうれしかったです。自分の気持ちに正直になって、ありのままの気持ちを表現できました。この合宿を通してとても素直になれました。これからもその時々的心情を短歌に詠んでいきたいと思えます。短歌には人の思いや状態を克明に映す不思議な力があると思えます。今回、『今上陛下御製・皇后陛下御歌集』の冊子をいただきました。この冊子から、陛下の御心に共感してゆくことができました。今も。今回もこの合宿に参加して本当に良かったです。

キャンプファイヤーを囲んだ夜の集ひにて

さまざまの工夫を凝らした発表を胸躍らせて次待つ我あり

つた
本当の自分の言葉が増えていくことがうれしか

(福岡教育大学 教育 二年 中丸暁子)

最も心に残った事は短歌創作でした。歌は真心の表現であるといはれますが、自分のいつはりのない心と真向かって言

葉を選び出す営みは本当に難しく、自分の感ずる思ひをなんとかあらはせないものかと言葉を探してゆく中、生まれた言葉は本当に嬉しく大切なものとなりました。先生方のご指導を戴き、自分の言葉となり、心の中に自分の想ひが刻みつけられ、本当の自分の言葉といふものが増えていくことが嬉しくてなりません。自分の言葉が増えると他の方の言葉に込められた想ひに心を寄せることができるやうになる気がします。相互批評において班友の言葉より普段接する中には感じられない友の心を見つけ、皆が多くの思ひを持ち、合宿に参加してゐるといふことを気づかせて戴きました。

班別短歌相互批評の折

言の葉を選び選びて御友らの想ひは歌になりてうれしき

今、何ができるのかを問い続けていきたい

(東筑紫短大 食物栄養 一年 野口純子)

「時代と言葉」の講義の中で聖徳太子の十七条の憲法、古事記の三種の神器、五箇条の御誓文、教育勅語などは、時代や言葉は違うけれども、すべて今の時代につながっているのだと思いました。三種の神器の鏡のすべてであるがままの姿を映しだしている正直さや、玉の不思議な形の中でも調和する和となる慈悲の心、剣の考えて使わなければならない知恵の心など、日本人がもつとも大切とすべきことが、古事記の世界で何千年前にいわれていて、今もそういう心がかたと文化とされている。不思議だけれど、つながっているのかなと思えました。わたしはそういう流れ、続いてきた命の中で、「今、

カメラ・レポート17



四日目の午前。国民文化研究会副理事長・元九州造形短期大学教授の小柳陽太郎先生による講義「ビデオ『天皇陛下とブラジル』に思ふこと—教育勅語を中心に—」で、先生は天皇と国民の一体感を示された「教育勅語」を原文にそって、読み味はれ、我々の今後の勉強を促された。

何ができるのか」「今しかできないことは何であるか」ということを問い続けていきたいと思います。

流れつづきのちの中で今できることは何かと問ふてゆきたし

自分も日本精神を受け継いでいきたい

(長崎大学 葉 一年 日高秀子)

この合宿を終えて思うことは、参加して良かったなあという事です。それは日本という国に対してのいろいろな見方を知ることができたからです。また、日本に多少なりとも誇りを持てるようになりました。それはビデオ「天皇陛下とブラジル」を見た時、一層感じることができました。ブラジル在住の日系二世、三世の方の目が生き生きと輝いており、祖国を思い、今の日本人が忘れかけている日本精神の「清き赤き直き心」を実行しておられる姿に大変感動いたしました。自分もこのような日本精神を受け継いでいきたいと思いました。茶谷さんの遺書のことや班付の末次先生のお話を聞く中で、日本が大東亜戦争をした本当の理由、わたしたちに寄せられた思いを知ることができました。

合宿教室を受けて思ふ

わが胸に覆ひ隠されし大和魂今はかすかに光を放つ

日本人としての心、大切にしていきたい

(東北女子短期大学 生活 二年 伊藤亜由美)

この四泊五日の合宿教室において、私は様々なものを吸収することができました。徳岡先生、小堀先生はじめ諸先生方

のご講義は、どれも皆内容が濃く、考えさせられるものばかりでした。ご講義を終えてからの班別研修では班員一人一人が意見や感想を出し合い、ご講義より得たものを更に深めてゆくことができたと思います。またこの班別研修を重ねるごとに自分自身の視野が広がってゆくのを実感しました。当然、考え方の違いはありましたが、そういうものを超越して、一人一人が日本人であるということを実感することができました。ここでの生活によって多くのものを学びました。自分の中にある日本人としての心を大切にしたいです。

封筒の日ごと日ごとにかくれゆくを見るにつけてはうれしく思ふ

分かり会えたという喜びは決して忘れない

(東北女子大学 家政 二年 小野慶実)

この合宿に来るまでは、全く知らない人達との五日間をとっても不安に思っていた。でもそんな心配とは全く違い、班の人とは簡単にうちとけ合い、初日から体育館でソフトバレーをしてお互いの距離を縮めていた。講義では、自分が考えたこともなかった日本の善さを各先生より、聞くことができ、とても嬉しく思った。中でも、ブラジル移民の日本を尊ぶ心から、感動と自分の日本に対する思いに疑問を感じた。昔から受け継がれている日本の心を忘れている自分に向き合っていて、「これはいけない、自分にこそこの日本の心を残していかなければ！」と痛感した。この心を初めての挑戦である和歌に歌うのはそう容易ではなかったが、班の皆さんとよく考えながら自分の思いをそのまま表現できて、本当に感激した。

班の方々とは和歌の相互批評、班別研修、輪読はもちろんのこと、生活全体で深く心を通わせることができたことに無上の喜びを感じている。我が国について深く語り合い、善さを伝えていきたいと目を輝かせて語り合うという貴重な体験は中々できないと思います。同じ志を持った仲間に出会え、分かり合えたという喜びは決して忘れないと思う。私は教師を目指しているので、この貴重な体験と日本を大切に思う心を子供たちに教えられるようになりたいという目標を見つけることができた。この体験の喜びを故郷に帰ってから家の人、友人などたくさんの人に聞いてもらおうと思っている。

これほどに心を開いて語り合ふ班友と出会へて我は嬉しき

父の姿を誇らしく思いました

(明治大学 経営 二年 岩越久子)

私は今回、初めて参加させていただきました。父からの熱い勧めがあったからです。先生方のお話や班別研修で沢山のものを学び、また心を動かされました。日本のもっている素晴らしい文化、大和魂、今まで私達の祖先が築き上げてこられたものを尊く思いました。その日本文化を批判する人のいることには怒りにも近いものまで感じました。私達は日本人なのだから日本に誇りをもって生きべきであるはずです。茶谷さんの「第二の国民のために・・・」という言葉が聞いた時、私達のためにこんなに立派な人が命を落とされて、なんだかとても恥ずかしい気持ちになり、自分自身をもっと磨かなくてはと思いました。また、多くの先生方に声をかけ



食事風景。各班毎に食卓を囲み、おいしい料理をいただきながら話も弾む。

て頂き、父の姿を思いました。少し誇らしく思いました。

大阿蘇の草原の中滞在し我は知るなり大和こゝろの魂

自分にとつての課題を見つめました

(北九州大学 外国語 一年 西原葉子)

自分の意見を述べたり、他の人の考えを聞いたりするのは全く初めてのことだったので、最初は何をどう話したらよいのか分からず、口ごもることも多かったのですが、班の皆さんがやさしく、そして一生懸命に話を聞いて下さって、段々と自分の思いを口に出すことができるようになりました。合宿を通して、日本人としての自分を考えること、自分の国に誇りを持つことなどを学び、自分の勉強不足や未熟さを感じ、今後の自分にとっての課題を見つけました。その課題を見つけただけでも自分にとってすごく貴重な体験だったと思います。そして、班での共同生活を通して人の心のあたたかさや人の話を聞き、その人の心に触れることができるということを知った気がします。

班友と共に語り過ぎて過ぎし日は自己を見つめし貴重な時間

素直な心の大切さに気付いた

(高知市立潮江中学校教諭 岡つぐみ)

合宿導入講義で與島誠史先生が、小林秀雄の「美を求めめる心」について話をされました。「私たちは言葉を使うことに慣れてしまつて、言葉で置換えてその美しさをながめつくすことを忘れていゝる」とおっしゃつた時に、本当にその通りだ

と思ひました。大学卒業後、講師として中学校に勤務するようになって三年三ヶ月が経ちますが、いつのまにか職場に対しても不満に思ふことや、いらいらすることが多くなつていて「優しい心」を持つていなくなつた自分の姿が見えてきました。私は日常の生活の中で、自分の心を見つめる時間をほとんど持つていませんでした。まわりの人に対しても、心を寄せることをしなくなつていたのだと思ひます。

講義や班別研修を通じて学んだことは多くありました。なかでも、合宿でもっとも苦しみ、そして真剣に取組んだのは和歌創作と相互批評でした。一回目の相互批評の時は、和歌を詠むことと、自分の心情をうたうことがうまく結びつかず、班の皆でとても苦労したのですが、二回目は班の全ての人がすなおな気持のあふれる歌を詠むことができました。大切なのは、飾らない、「すなおな心」だということに気付く体験でした。班付の方や班の皆がいてくれたからこそ得ることのできた貴重な時間でした。

有難うございました。

班別相互批評にて

すなはなる思ひのままに和歌を詠む班友の心を尊しと思ふ

第十四班—女子—

本当に来て良かった

(北海道大学 農 四年 服部泰子)

来年は、長かった学生生活を終え、社会に入る。その前に、今一度私を育ててくれた両親、家族、友、先生、郷土、祖国について考えたい、勉強したいと思いい、参加した。

三回目の参加になるが、毎回それぞれ違った発見、驚きがあつた。しかし、いつも合宿を終えて思うことは一つだ。それは「本当に来て良かった」という事、そしてそんな思いにさせて下さるのは、沢山の真心である。

睡魔と闘うのがやっとで居眠りをした講義、難しすぎて消化不良のまま終わった講義もある。否、完全に理解できなご講義など一つもないだろう。しかし、先生方の話される姿から感じるものがあつた。気概であり、真心である。班別討論においても、ぶしつけな質問をする学生に対し、深く暖かい眼で説かれる姿にも、理屈なしに真心を感じた。

私は、日本について少しは解っているつもりでいたが、改めてまだまだ解っていない事に気付かされた。しかし確かに感じることもある。それはなんて美しく深い伝統を持った国だろうという事だ。そんな国に生まれた事に、静かな強い誇りを持ち続けていきたい。そして、日本人として背筋を伸ばしてこれからの人生を歩んで行きたい。

最後になりましたが、今までこの合宿を通して出会えた多



カメラ・レポート19

国民文化研究会・副理事長・(株)宝辺正久先生による講話「ますらをの歌」で先生は、万葉集の防人の歌や今上天皇の御製を引用されながら、日本の国の命を護ってきたますらをの志を忘れることがあってはならぬと語られた。

くの先生、友人に深く感謝いたします。

日系二世からの手紙を読んで

速くより祖国よたてと同胞の熱きさげびにいざやこたへむ

大きな収穫―祖国の素晴らしさに触れた

(九州産業大学 経済 四年 小早川多代)

合宿に参加して、日常生活では得ることのできない貴重な体験をした。大きな収穫は、日本の素晴らしさに触れる事、又気付いた事だ。それは国文研の方々のご指導を受けると共に、語り会う事のできる班友がいたからだろうと思う。

短歌と出会い、自分で詠む事で、少しでも日本人の素直で人进行いやる謙虚な心を養うと共にそれに触れる事が出来たのではないかと感じている。それは、やはり相互批評があったからこそと思う。

そして講義を聴くことにより、文化を継承する大切さや、両親、家族の素晴らしさを学び、これから生きて行く上での目標(自己の価値観、アイデンティティの確立)を持つことができた。

最後に一番感動した事は、天皇様も常に国民と心一つにしておられるということである。天皇様に習い、国民全体が心を大切に心を寄せ、天皇様と一体になる事ができたならば愛国心と誇りを取り戻すことができるのではないかと思う。

私もまず、両親、兄弟、友人と心を共にすることから始めたいと思う。

全体感想自由発表にて

壇上に勇氣を持ちて上がりたる彼らこそみな日本人かな

「慎しみの心を持つ」べく努力を決意

(アピリティーニッケン 浜田典子)

今回初めて、この合宿教室に参加させて頂いた。友人から参加費を負担するから行って欲しいとまで言われたが、何時でも参加できるからという思いでいたが、あるきっかけで参加させて頂く事になった。けれど、五日目の今日思う事は、本当に来て良かったという事ばかりだ。

友人からの忠告もあり、全てのものを置いて、参加しようと思っていた。しかし、いつの間にか自分の中に課題を設けて構えている自分が付いた。そんな中、短歌の班別相互批評や、班別研修があり、壁にぶつかった。班の中に長内先生が加わって下さった時、私は「天皇陛下とブラジル」のビデオの感想を語っていた。私の「歴史をもっと勉強して、人に伝えることができた」という感想に、長内先生は「伝えるとかそういうことではなく、慎しみの心を持ちなさい」とおっしゃられた。私は初め、自分の素直な感動からそう言ったつもりだったが、歴史の事も陛下の事も、とても概念的にとらえていて、何時のまにか感動ではなく、知識だけを話している自分に気付いた。

私が今回、不遜にも持って来た課題というのは、人に言葉を伝える時に、感動から離れた会話をしない、みずみずしい感情を言葉にする心を養うことだった。企らずも、先生の御

指摘により、いつの間にか口先だけの言葉を話している自分に気付かせて頂き、難しい事だが、日々心を磨く努力をするという新たな決意をさせて頂いた事に心より感謝申し上げます。

天皇の深き慈愛に抱かるこの日の本に生をうけたり

班友の心に触れて

(社福岡県中小企業経営者協会 井手美絵)

初めて参加させて頂いたが、四泊五日という長いようで短い間、本当にたくさんのお話を学ばせて頂いた。

最初は初めてという事もあり、不安を抱きながら臨んだが、諸先生方のご講義は素晴らしく、日本という国について、日本人とは何かなど私の日常生活では到底考えることはなかったであろうことに気付かされ、私達が日本人としての誇りをもち、歴史を知り、そして伝えて行く事の大切さに気付かされた。

また、特にこの合宿に来て良かったと思うのは、短歌を詠む楽しさを感じる事が出来たことだ。短歌を詠む事で、相手の気持ちを知れる事ができるというのは、素晴らしいと思う。また、班友の心に触れられたようで感動した。

なかなか思っていることをうまく文章にはできないが、班別研修で沢山のご指導ご助言をいただいた班付の先生方、そして沢山の思い出と感動をくれた班友の皆に、心より感謝申し上げます。有難うございました。



「夜のつどひ」は屋外でキャンプファイヤーを囲みながら班や大学別に寸劇や、歌が披露された。合宿最後の夜、心の通ひ合った友等との夜は忘れられないものとなった。

小柳先生のご講義のあと、班別研修にて
涙する我らのそばで白髪の師もまた涙我は忘れじ

短歌を創り続けて行きたい

(残波ロイヤルホテル 上原真紀)

心に残っている事があまりにも多すぎるので、最も言いた
い事を述べたい。

第一点は、短歌創作、相互批評を通して、班友そして私自
身の心情に触れる事が出来た事だ。五日間、起床、三度の食
事、入浴等を始め二十四時間共に過ごしたにもかかわらず、
その中からは思ったよりも人の心情に触れることは難しいもの
であった。しかし、短歌を詠み合い、相互批評を繰り返して
いるうちに、各々がどのように感じ、考えているのかが、私
の中に響き、又自分自身がどのような心情にあるのかという
事を感じることが出来た。阿蘇を離れても短歌を創り続けて
行きたいと強く思っている。

第二点として、来月アメリカへ出発するが、この合宿を終
えようとして、日本人として誇りを持って発とうとしている
自分を実感している事だ。今まで、外国の現地の人によそよ
そしさが気になっていたが、それは相手がそう思っているの
ではなく、日本人としての誇り、自信を持っていない私がい
た、という事に気付かされた。

最後に、国文研、参加者の皆さん、私に声を掛けてくださ
って本当に有難うございました。その行為に、私の存在を認
め、私を受け入れるという、皆さんの真の心遣いを感じた。

そして何よりも十四班の皆様、本当にこの五日間有難う。班付
の先生方、御指導有難うございました。毎日、笑える日々を
送る事が出来た事に、喜びと感謝で一杯だ。

四日目の班別研修にて

忘れへぬ涙ありけり語りあり情開ひた阿蘇の友どち

かけがえの無い友人を得た

(伊豫豆比古命神社 近藤加代子)

日本とは、どういう国なのだろうか。漠然としたそんな思
いが、いつの頃からか私の心を占めるようになった。私の生
まれた憎くて懐しいこの国を、拙くてもいい、語り学びて行
ける友が欲しかった。どこへ行くのかは分からない。けれど
も私のルーツは、この国にある。何も知らないままでは、私
自身いられなかった。

そして同じように学を求め、縁あつて出会った班友。私達
を見守つて下さつた先生方、国民文化研究会の方々。全国そ
れぞれの地域に帰つても、私達の中に出来た相手を思いやる
心情はなくならないものと信じている。この合宿に参加し、
日本の事を勉強出来たことは勿論だが、かけがえの無い友人
を得られたことが、阿蘇の地に来ての私の大きな喜びである。
学びあて我ら若きと覚えしかそれ胸にしていつこへ行くかも

第二十一班―社会人―

本場の日本人になることを目指したい

(社福岡県中小企業経営者協会 安徳和樹)

この合宿に参加して感じたことは、私自身「未だ未だ知らないことが多い。」ということである。例えば「戦争」という言葉に対して、私は、今までの知識で十分解っていると思いい込んでいたということがある。勉強するということは、一つの視点からではなく、色々な視点から学んでいくことが必要だと感じた。今、私に足りないものは、やはり、本を読むということなのだと言ったので、習慣づけていきたい。

合宿教室“を体験し、私の考えの中に、新しい考えが入ってきたことは間違いない。しかし、私が二十六年間生きてきて学んできたことを、一度に変えることはできない。日本をもっと知り、本場の日本人になることを目指していきたい。短歌もつくっていききたいと思う。

合宿が終って

班友と共に学びし阿蘇の地をはなれることの淋しかりけり
明日からはそれぞれの道歩み出す我ら見送るこちよき風

感動し合う場が悠久の歴史の中にある

(拓殖大学卒 作山 徹)

学問研鑽の場とは、この様な雰囲気と言うのであろうか。学生、社会人、先生方と、数日に渡り、日々を共にして、考



「夜のつどひ」の寸劇に興じる一コマ。

え合う中に感動というものがある。

日本人は感動する機会を求めて、世界中を彷徨うが、自ら人に感動を与えることなしに、感動を求めているうちは、決して尊敬される民族とはならない、というミヤンマーの有名な高僧の話があります。痛切に日本人の有り様を言い得ておりますが、この合宿の様に共に感動し合う場が、国内に、悠久の日本の歴史の中にある、ということを実感いたしました。歴史の中に自己の生命を感じるには、歴史の真髄を我々青年に語り伝えて下さる諸先生方の心に触れることであることを、参加した皆さんから学ばせて頂きました。

合宿の最終日にて

合宿を続け続けて今日に積み重ね来たる思ひを知りて
学び合ひ共に過ごせる大阿蘇の草のかほりを胸に秘めつつ

自分自身の心を素直に晒け出せた

(陸上自衛隊 業務学校 齊藤肇夫)

五年振りに参加の機会を得、予想以上に得るものが多い合宿でした。特に国を思ふ若き学生らと触れ合ひ、又、自分自身の心を素直に晒け出したこと等、今後の生活の糧となりました。又、これまでも、色々な先生方のお話を聞く機会は多くありましたが、自分でいかに考へ、いかに伝えてゆくかの努力は足りなかった、と感じました。日本の伝統と文化を守るため、又、国際人として生きるため、これまで続けてきた茶の湯の文化と共に和歌の世界にも改めて踏み出してゆきたいと考へてをります。阿蘇の地で学び、又得た班友らとの絆

を胸に新たな一歩を印してゆきたいと思ひます。

夜の集ひにて

全国の学生たちと集ひ来し阿蘇にこたます日の本の歌

全体感想自由発表にて

日の本の”をみな”求めし女学生永久に幸あれと願ふ我しも

合宿を終へて

新たな出発書ひ阿蘇の地でペンを走らせ思ひ書きゆく

知らないことを知らされた

(日本植生院 四国支店 青木正行)

初めて合宿に参加させて頂き、様々な年代・職種を超えた幅広い層に驚かされました。普段の生活では、今回の合宿で学んだようなことを考えたり、気づかされることは殆ど無い様に思われます。私にとつて、一番の収穫となったことは、知らないことを知らされたことにあります。諸先生方がお話しになった事には、この日本を何とかしたい、良き伝統・文化を守り伝えてゆきたい、ということにあるかと思いますが、それを受け継ぎ、日本人とは何なのか、私自身も誰なのか、胸を張って主張できる様になることを、私も含め、今の若人に自覚させるには、あまりにも自覚が無すぎることを、知らされました。こうありたい、こうしたいと考えるよりも以前に、こうであるということを知る為に、正確な歴史を学ぶ必要があると、今回知りました。

合宿中講義室へ向ふ

ご講義で知らぬ歴史を学ばむと長き通路も足どり軽し

夜の集ひにて

班友の背に射す青き月光に明日の別れを悲しく覚悟

心強く励みとなった

(株)オフィックス 鈴木智彦

私は、自分の目指すものを、はっきりと定めた上での参加でありましたので、一般の、然も初めての参加という人達との間に、心の内で、少々軋みを感じながらの研修会でした。

然しながら、志を持った多くの先達が地下水の様に、目立つことなく、この国を支えて来たのだという事と、更にそれが受け継がれ、今尚この様に頑張つて居られる事を知り、大変心強く励みとなりました。

小野吉宣先生の講義を聞き

皇国の道の心を伝へむと雄叫ぶ大人は時鳥の如

夜の集ひに参加して

南の高天原と覚ゆらむ北斗の七星間近に見ゆる

決意

如何ならむ障りあれども皇国の道の曙指して進まん

若い人達の熱い思ひに感動した

(株)デジタル・ツーカー北陸 営業部副部長 古川 修

「全体感想自由発表」を聞きながら、ことしも又、若い人たちの熱い思ひに涙の出るのを禁じ得なかった。特に沖繩の上原真紀さん（第一四班）があふれる涙を押し止じめて語ってくれた姿には、参加者全員が心うたれた。



「地区別・大学別懇談会」同じ大学、地区ごとに集まって、参加の感想や、合宿後の勉強会の話を行った。

小野吉宣運営委員長の「合宿を顧みて」も本当に素晴らしかった。この一年のご努力に対し心から感謝申し上げます。日比生哲也指揮班長をはじめ、合宿運営にご努力された全ての方々に対し厚く御礼申し上げます。

ことしは第二一班（社会人）を担当させていただき、若い社会人五名と四泊五日を過ごすことが出来て、久しぶりに心洗はれる五日間を過ごしました。合宿後も是非、絆を大切にしていきたいと思ひます。又、北陸からは金沢大学から二名、福井工業大学から四名の参加がありましたので、九月以降、何としても読書会等の会合をはじめたいと思つてゐます。

小野吉宣運営委員長の「合宿を顧みて」を聞き

一年をこの合宿に捧げ来し君の言の葉こころに迫り来

「たて糸」を忘れし民の「ひよわさ」を君は語りぬ雄叫びのこと

若きならも君の「叫び」に立ちあがり語りてゆかむ熟き思ひを
この思ひ共に忘れじ明日からも努めはたさむすらすらをとし

二十数年振りの合宿に感動した

（富士通株）CS本部CS推進室 浜田 實

昭和四〇年代後半の合宿参加以来、二十数年振りでした。その後の世代間コミュニケーションセッションギャップが叫ばれ、社会の混乱、劣化等が進む中、学生も志ある社会人も悶々としてをりましたが今回の合宿も講師の人選、プログラム全般にわたりとても充実してをり、参加者の期待に十分応へるものであつたと思つてをります。

今回、和歌創作の比重を増す工夫をされたこと、今後の企

画も考へ併せて大賛成です。はじめて和歌を作る人には苦勞が伴ひますが、日本の伝統的精神文化を人に伝へるには、これをおいて無いの思ひを深くします。四〇五日の格闘の苦勞が必ずや実り感動を与へると思ひます。日本の文化防衛とか、古事記における日の本の建国理念など歴史・伝統の永久性、悠久性を伝へるうえで、和歌創作の修行は欠かせません。つまり、見えない世界、生命の永遠性を知ることなくして精神文化の根本は決して伝達できないと思ひます。

合宿で学びしことはただ一つ人の真の心なりけり

友どちの真のこころ重なりてたのしき討議尽くことなき

大阿蘇に雲のかかりて急ぎゆく合宿最後の日を伝へるがごと
敷鳥の大和ことばを伝ふるは我等がつとめと班長の云ふ

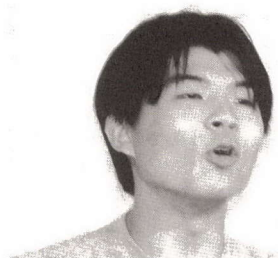
諸先生方の講義に深い感銘を受けた

（下関）乃木神社司 松吉宣和

合宿導入講義「学問・人生・祖国」奥島誠史先生、「覚悟をもつて生きるとは」徳岡孝夫先生、「日本人はどう生きるのか」小堀桂一郎先生、「時代と言葉」志賀建一郎先生、「天皇陛下とブラジル」に思ふ―教育勅語を中心に」と題した小柳陽太郎先生をはじめとして諸先生方の講義を拝聴させていただき大変に深い感銘を受けました。

教育において現教職員の方々が、本当の日本の歴史を踏まへて教育を行つてをれば国旗・国歌の問題は起らなかつたと思ひます。

ビデオ「天皇陛下とブラジル」を見て、天皇と国民が一体



「参加者感想自由発表」最終日、合宿で得た感想を次々と登壇して率直に語ってもらった。

であることが理解できたといふことを参加学生から聞くことが出来、国文研の合宿の目的が一步進んだと感じました。

国文研運営委員の方々に厚くお礼申し上げます。

全体感想自由発表

真心の通ひ合ひたる合宿で勇氣出しきり若人語る

朝の散策

草原の緑広がる大空をトンボ飛びかふカルスト台地に

充実感ある研鑽が出来た

(出光興産(株) 人事部 山田幸治)

今回も新たな友との出会ひがあり、とても充実感ある研鑽が出来ましたこと感謝申しあげます。

加へて、大阿蘇の雄大な自然の中で天候に恵まれたことも何よりであったと思ひます。特に今回は、国文研会員たる自覚のもと短歌の相互批評に力を入れました。はじめてこの合宿に参加された班員がどのやうな気持ちで短歌を作ったかを確認しながら、一つ一つ言葉を吟味してゆきました。班員の思ひにピッタリくる感じの歌ができ、ほっとした笑顔を見たときに、私も良かったなといふ心持ちが湧きました。さらに班員の胸の秘めたる思ひにも共感出来ました。短歌創作と相互批評によるまごころのふれあひと心を鍛練する大切さを強く実感致しました。又、自分が日本人なんだといふこと、そして、長い日本の歴史の中で祖国を思つて力を尽した方々をじっくり偲べたこともこれからの力になると確信します。古来より日本人が大切にしてきた伝統や、家族的な人間関係をべ

ースとして、自らの「まごころ」を鍛へ、激動の社会の中で、お互ひの気持を感じとりながら、仕事に家庭に「思ひをこめて」取組み、一層尽力してゆきたいと思つてゐます。どうもありがとうございました。

さみどりや深緑なる山肌は朝日に映えて鮮やかに見ゆ

班員と語らひ終へて外見れば強くはためく日の丸の旗

この思ひ大切に於て明日からの仕事に励み力尽さん

第二十二班—社会人—

日本の歴史を子孫に語り継ぎたい

(新企業業(株) 笠島 健)

この合宿で実感したことは、先人達が多大な努力を連綿と積み重ね、その結果現在の自分そして文化・伝統で世界に誇れる日本の国が成り立っているということでした。現代はともすれば個人の自由を優先し、自分さえ良ければという風潮ですが、早々にこういう考え方を改めなければならぬと思ひます。今日私達が何不自由無く暮らせるのは祖先のお陰であり、祖先が築いた歴史を正しく理解し、日本人としての誇りをもって世界の人達と付合つていかなければならないと思ひます。

現在の私は、歴史について知らないことがあまりに多過ぎるので、少しずつ勉強していきたいと思ひます。そして、子孫へ日本のアイデンティティーを語り継いでいきたいと思ひます。

最後に、ご熱心にご講義していただいた講師の先生方、生活を共にした班友、合宿を運営してくださった方々に深く感謝したいと思います。

雄大な阿蘇の自然に抱かれて学びしことは忘れざらなむ

自信をもつて日本を語れる自分になりたい

(九州日植株 熊本支店 川上治喜)

私は今回社命により初めて合宿に参加させていただきましたが、最初は合宿講義の内容が理解できないところがありました。最初は合宿講義の内容が理解できないところがありました。最初が、和歌を通して日本の文化・伝統と正しい歴史を知っていくうちに、それを今の若者達へ伝えることが大事であることに気付かされました。

私は歴史等今迄余りにも知らなさ過ぎたと反省しています。が、今回学生達が真剣な態度で講義に臨んでいる姿を見て私も日本のことを少しづつ学んでいき、日本がこんなにも素晴らしい国であることを自信をもって言えるようになりたいと思います。さらに日本の歴史・伝統を子孫に伝えていくのが自分の使命だと考えました。

この五日間は、大変有意義な日々でした。関係者の皆さんに厚く感謝したいと思います。

阿蘇の草原にて

朝露に打たれて咲きしヒゴタイの薄紫の花弁美し

問題解決の糸口を見つけた

(日本植生株 大阪支店 斎藤典祥)

カメラ・レポート 24



閉会式で学生を代表して挨拶をする北海道大学四年の服部泰子さん。「日本は本当に美しく伝統を持った国だと思ひます。そのことを誇りに思つてこれからの人生を歩みたい」と語つた。

今回合宿に初めて参加させていただきました。初日から大変内容の濃いプログラムが続き、色々と勉強になりました。日頃は仕事に追われて日本の歴史や自分のことをゆっくり考えることが少ないままに過ごしていましたが、この合宿はそういうことを考える良い機会だったと思います。そして、講師の先生方や先輩のご指導により、自分一人で思い悩んでいた問題を解決する糸口が見つかったように思います。

日本には自国の悪口を言う人達がまだ沢山いて、とても残念に思いますが、その人達の間違いを正すとともに、正しい日本の歴史を子供達へ伝えていきたいと思っています。

最後に合宿を運営していただいたスタッフの皆さんに有意義な五日間を与えていただいたことを感謝いたします。

阿蘇の地で初めて会ひし友達と日本を語りて行く末案じぬ

神職の使命を果したい

(靖国神社 久野和穂)

今回この合宿に初めて参加させていただきました、小田村寅二郎先生の開会式のお言葉に先ず感激いたしました。私は日本が東京裁判史観から脱却することによって、正しく日本の精神復興ができると信じていましたが、小田村先生は五十三年前の終戦に戻すだけでなく、我が日本の二千年の歴史・文化・伝統を踏まえて、本来の日本のあるべき姿に立ち戻るべきとお話に接し、身の引き締まる思いがしました。

與島先生の合宿導入講義では、「言葉は真心のこもったものでなければならぬ。自分がどのように感じ、何に感動し

たかが大事である」ことを気付かされました。

徳岡孝夫先生の『覚悟をもって生きること』では、戦時に英霊達のもった死の覚悟は現代では持ち得ないが、「覚悟した者だけが神のご加護を得る」という言葉が印象に残りました。

また小堀桂一郎先生が「一人一人が日本文化防衛の戦士だれ」と言われたことを深く心に止めておきたい。

最後に五ヶ条御誓文、教育勅語、憲法十七条等の先人の言葉を改めて読み返し、神職である自分の使命を果したい。

日の本の文化の淵源辿りつつ己が務めを果して行きなむ

慰霊祭に奉仕して

皇国の為に尽くせしみ魂をば阿蘇の齋庭やぐらに招きまつらむ

三十数年振りの班長を経験した

(株)竹中工務店 C M本部部长 稲津利比古

先づ小田村理事長には開会式でご挨拶を賜りましたことを有難く存じました。小田村事件の背後背景に伏在してゐて現在まで尾をひいてゐる戦前戦中の思想傾向の問題についてお触れになったことが心に残りました。

徳岡先生の「覚悟をもって生きること」と題してのお話は、穏やかなお話し振りの中にも、私どもが如何に生きべきかといふ点で厳しいご注文を出されたと思ひました。また小堀先生は己のアイデンティティが語れなければならぬといふことを強調され、多くの示唆を与へて頂いたと思ひます。

ビデオ「天皇陛下とブラジル」が上映されましたが、教育

勅語など日本国内では顧みられてゐないものを大事にしてゐる日系人の心情に感動した。

学生時代に班長を経験して以来、三十数年振りの班長経験でした。班員の半数が国文研の会員で、他の社会人の方も参加意識が高く、従って班運営に難渋することはなく、却って班員の方々に教へられることができました。

この四泊五日は私にとつて、また力を与へてくれた合宿となりました。有難うございました。

徳岡孝夫先生のご講義をお聞きして

諄々と「覚悟を持つこと」説き給ふ師のお言葉は気魄こもりて
若きらに語り給へるご様子は穏やかなれど言の葉厳し
うちつけに語り給へるお言葉に素直なお心何はれずがし

文化の戦士となることの大切さを感じた

(伊佐ホームズ株 代表取締役社長 伊佐 裕)

小堀桂一郎先生、志賀建一郎先生の御講義を聞き、日本国の永生に亘る困難な歴史の中で、新しい文化への対応には民族固有の文化を根底にすることがいかに大事であり、このことが国家、国民をいかに護ってきたことか、聖徳太子の御偉業をはじめ尊き精神と命の積重ねに深い感動と命のつながりを感じてをります。

正しき国の選択の爲には、小堀先生の「一人一人が文化の戦士になることだ」との明確で力強いお言葉を国民一人一人が大切にして行くことだと思ひます。



別れの時は来た。「元気で、また来年会ひませう」再開を期して名残りはつきない。

八年振りに合宿に参加した

(日本大学卒 井坂信義)

八年振りに合宿に参加させて頂きました。思へば、この国民文化研究会の学問の道統に触れたことが、これまでの人生の中で極めて大きな意味を持つてゐました。今回、人生の転機において再び参加させて頂き、小堀桂一郎先生から、また小柳陽太郎先生から、自分の生きる姿そのものが、日本の文化であり、自分をして、文化防衛の戦士たらしめよ、との御趣旨のお話を承り、これ迄、自分はとてもそんなことは言切れない、そんなことは日本文化に対して失礼であると思ひ、しりごみしてゐましたが、徳岡孝夫先生のお話にあつた、「覚悟」を以つてそれをしっかり受止めて行かねばならぬことに気付かせて頂きました。

先人の生き様の積重ねの中に、文化の本源がある。自分の生き様も、その内の一つとなつて行くのだ、といふこと。恥づかしくないやうに生きて行きたいと思ひました。宝辺正久先生のお話の中で、先生の背後に防人が、人麿がすつくと立つてゐるやうに感じられました。歴史を甦らせる力を目の当りにさせて頂き有難く感じました。

全体意見発表を聴きて

登壇しおのが思ひをひたすらに述ぶる友らの姿美しも

発表す後輩の姿に受継がれし友の姿のだからて浮ぶも

見る度にたくましくなる後輩らの発表の声たのもしく聴く

第二十三班―社会人―

和歌の伝統を伝えていかなければならない

(日本植生(株) 豊原大介)

今回の研修で和歌の伝統に触れて、大和言葉の美しさと、天皇から庶民に至るまで共有されていたしなみのようなものを強く感じました。言葉の乱れている現代において、この伝統を伝えていかなければ、と思ひました。

また今回の合宿で、自分が歴史について無知であると感じかされました。学校で学んできた事は表面的な事柄のみであつて、内容についてはほとんど学んでいない、と思ひました。最後に、大自然の中で、班として協力しあつて学ぶ姿に、本當の教育とはこういうものだと感じました。

豊かなる心をつくる大自然すなおになれる心に気づく

大阿蘇に学びし我にあたたかな思ひときし大空こえて

阿蘇青年の家にて

彩らるる子らの瞳は大阿蘇のすそに輝くキラ星のごとく

歴史を学ぶ事により今の日本を違つた目で見られる

(日植緑地 森岡英司)

民主主義は、アメリカから導入されたものだという固定観念を抱いていましたが、志賀先生のご講義で、聖徳太子の十七条憲法、五箇条の御誓文にすでに民主主義の精神があると

話され、この固定観念を碎かれました。二千年続く歴史を学ぶことにより、今の日本をまた違った目で見られるような気がします。

短歌創作では、班での相互批評でいろいろな意見を言っていたとき、素晴らしい短歌を詠むことができました。

合宿を通して、自分の知識のなさを実感しました。今後、日本人とは何かという事を考えながら、多くの知識を身につけていきたいと思います。

窓の外をなげなく見た時

ふと見れば陽はかたむきてカルデラの阿蘇の大地を紅に染む

日本の歴史と心を伝えられる人になりたい

(社福岡県中小企業経営者協会 諸岡広人)

この合宿でいろいろ日本のことについて学んできましたが、はつきり言つて、心中にまだ何か「もやもや」したものが残っています。というのも、私自身が日本について今まで深く考えたこともなければ興味もなかったからだと思います。

これを機に、日本の歴史と日本のことを再度勉強し、伝えることのできる日本人、日本のことを持った日本人になれるよう努力していきたいと思います。

つとひの夜班友と語りて空みれば数多の星ぞしるけく輝く
山すそにのほりし月の光にてまわりの星影うすくなりけり

小田村理事長のお話を聞けなかったのが残念

(宮崎神宮 日高憲司)

今般の合宿で心残りが一点ある。それは開会式に少し遅れ、小田村寅二郎理事長のお話を少ししか聞けなかったことだ。班友が短歌で「十年前本にて読みし先生の気概の今も我に迫り来」と詠んだが、その気概を私も肌で感じ取りたかった。

現在、私の奉職する神宮では、両陛下の外国御訪問の折は、御渡航安全祈願祭、御還幸報告祭を率先して行い、皇居勤勞奉仕、祝日毎の祭典（特に紀元節奉祝行事等）を行っているがまだまだである。解決すべき難問は山積みであるが、ご支援ご協力をお願いいたします。

ひたむきに班友ら歌を詠み交わし日を追ふことに見事になりゆく

短歌で自分史を作りたい

(肥後銀行福岡支店 荒木勇作)

徳岡先生の「覚悟を持って生きる」とは「を始め、これまでの生活では決して出会えなかったすばらしい講義をいくつも受講し、非常に刺激的であった。その中でただ一つをと問われたら、やはり短歌創作である。短歌を作る事によって、いかに自分が無感動、無気力、無関心な生活を送っているかに気づき、また逆に自分の心の底からわき出る一途な気持ちを短い言葉で正確に、素直に、他人に伝える事の難しさを学んだ。

私は日常の仕事の忙しさに流され、非常に怠慢な生活を送

っている。しかしこんな私にも深く心に残る出来事や思い出はたくさんあるし、自ずと湧き出る様々な気持ちを伝えたい尊敬と友情を抱く人もいる。これから先の人生では、そういう一つ一つの思いを短歌に込めて残していきたい。それは自身の「自分史作り」として、私のライフワークとしたい。この気持ちを奮い起こしてくれたこの合宿に感謝するばかりである。

心より慕ふ貴き人ありていつしか希有の尊敬覚ゆ

かの人が付き合ひ先も続けると頂きし御言葉ゆめ忘れまじ

この先は不安も多き人生なれど御言葉支へに我はゆくなり

志賀先生のお話に感銘した

(株)日本教文社 第二編集部 坂本芳明

昭和五十九年以來、十四年ぶりに参加させていただいた合宿教室は感動的なものでありました。

言葉一つ一つを大切に使ふ姿勢、班友のことを心から思ひやる心など、会社生活の中で忘れてゐたものでした。特に短歌相互批評で、拙いながら班友の気持ちを憶念して作った歌がよるこぼれた時などうれいものでした。

お聞きした講義の中で最も感銘を受けたのは志賀建一郎先生のお話でした。現在の学校教育で何が教へられてゐて、何が教へられてゐないかを明らかにされ、その上に立って、現在のわたしたちに必要なものを明確に示されたやうに思ひます。先生が指摘されたやうに、現代の困難を克服するには、現代が如何なる時代なのかを明らかにする「言葉」が大切な

のだと痛感しました。

その言葉はただ表現されてゐないだけで本当はわたしたちの心には感じられてゐるはずです。それを明らかにしていくこと、それは短歌創作につながると思ひます。今後はこの合宿教室で培った心を持続していくことが課題です。

班友に

この場にて初めて会ひし友なれど語らふことになつかしきわく

われ一人帰るはかなしいつの日か又会ひたしと祈るのみかは

日本人とは短歌を詠む民族である

(住友電気工業(株) 生産技術部 布瀬雅義)

「短歌相互批評」を二回入れるといふ初の試みであつたが、二度目には皆で一緒に添削してゐるうちにどの歌も素晴らしいものになつて驚かされた。また短歌を詠む楽しさ、詠みはらせた時の快さを感じてもらへたやうで班長としても嬉しかつた。

「日本人のアイデンティティ」といふ問題が小堀桂一郎先生から提起されたが、短歌は国民誰でもあゆむべきまた容易にあゆめる「敷島の道」であるから、「日本人とは短歌を詠み、かつあじはふ事に生きがひを感じる人々」といふ定義もできやうか。

ともあれ、班員の皆さんには短歌を詠みつつ、生き方を正し、かつそれぞれの場で「一隅を照らす」存在であつて欲しい。

二度目の班別「短歌相互批評」にて

み友らの作りし歌をそれぞれの心偲びつつ直しゆきたり

悩みつづ歌ひはらせぬ心偲びともに言葉を探しゆきたり

うつつくも心の様を言ひおほす言の葉出づれば友の顔輝く

かくの如見事な歌になるとはとあらはれし歌に驚き見入る

小堀先生の御講義に感動した

(日章工業株) 専務取締役 藤新成信

合宿地としてこの「青年の家」は大変良いと感じました。

日頃よりこつこつ学び、友らと学びあつて行くしかないと思ひます。来年は社会人班の参加に向け、また工夫してやってみたいと考へます。

小堀桂一郎先生の御講義を聞いて

生きること難き時代に我々は生きてありしと語りたまひぬ

気概もちて生きてしあればおのおのアイデンティティは定まるといふ

みおやらの生命につながり我もまた生きて行かなんひとすちの道を

心を通じあわせることの大切さ

(熊本市役所市民生活局 濱口知久)

今回は社会人になって初めての参加となりました。仕事に

も慣れ、学生時代には見えなかったものが見えてくるような

気持ちになり、いままでと違い落着いて参加できたと思います。

職業上多数の人とお会いするので、いかにしてその人に合わせ

せ応対していくが大変悩むところです。そのような意味では、

今回講師の先生方が何度もおっしゃった「心を通じあわせる」

ことが大切というのは、これから仕事をしていくにおいて大変なためになったと思っております。

これからは、どう自分に生かしていくかという段階となりますが、そこは歌を詠むのと同じように肩に力を入れずに行つていけば大丈夫だと思います。これからもみなさんよろしく御願ひします。

ひとすちの思ひを伝える大切さ心にとめて仕事に励む

班友に軽い気持ちで詠めたい我の歌には力を入れたる

徳岡先生の講義に深い感動を受けた

(社福岡県中小企業経営協会 会長 小早川明徳)

徳岡孝夫先生の「覚悟をもって生きる」と題した講義には心洗はれ深い感動をふるはせた。ベトナム戦争の末期、サイゴン空港に避難し、緊急救出に出勤したヘリコプターを目前にした、若き日の徳岡記者の心の葛藤と悔悟。ヘリコプターから陽炎ごしに見えた足の悪いベトナムの老人と腕を組んで堂々と歩くイギリス記者の五十路の姿。その中に「死」と隣なり合はせの環境にあつて、覚悟した者だけが持つ冷静さと気迫に圧倒された徳岡記者。ここに「覚悟する」ことの意味を知る。

また、ベルーのテロリストによる日本大使館襲撃事件でのフジモリ大統領と橋本首相の対応の相違。大統領としてのあるべき姿を求めるフジモリ氏と、国民やマスコミに阿ね常にわが地位の安泰を考へる橋本氏。そこに表れた覚悟した者と覚悟のない者とのあまりにも大きな対応の違いを全世界に見

せた事件の教訓。

尚、最後の「戦時においては平和の時の論理と真反対の論理が求められる」という講師の言葉をわが胸の奥深く刻み込んだ。

若き日の徳岡記者と戦場の述懐

静かなる言葉で語るサイゴンの戦場記者の葛藤のさま

英国の五十路の記者の堂々と陽炎の中を老人と歩く

訪ねんと尋ねし記者は過ぐる年痛の病ひに倒れしと聞く

筆をとり遣児へ伝える父上のあの日の勇気神々しき姿

今もなほわが身を責むる戦場の心のさまをありありと見ゆ

第二十四班——社会人——

真剣で、清らかな雰囲気につつまれていた

（九州大学 講師 高瀬正仁）

合宿全体の根底に、非常に純真な心を感じました。講師の諸先生は熱意にあふれ、耳を傾ける人たちも、皆真剣で、清らかな気分につつまれていました。大学生たちが次々と質問し、感想を発表したことに、新鮮な驚きを感じました。

このような人たちも、自分の所属する学校に戻れば、少数派になるのかもしれませんが、それでも心強く思いました。日本は、大丈夫という確信を持ちました。

夜の集ひにて

星くずを散りばめし野に火の粉舞ひ清らかな歌闇にとけゆく

多くの示唆を与えられた

（尚綱学園尚綱中学校 教諭 中村淳一）

今回初めて「合宿教室」に参加しました。徳岡孝夫先生や小堀桂一郎先生などの著名な方々の講演を聞くことができ、この不透明と言われる時代において、多くの示唆を与えられた思いがしました。徳岡先生の講演においては、「高瀬舟」の話やベトナム戦争末期のエピソードなど、興味をそそる語り口で、いつの間にか、自分の来し方やこれからの人生をふと思ひ、考える自分に気づかされました。また、小堀先生の講演においては、深い知識に裏打ちされた分析力に驚き、今の時代の日本人の課題を改めて認識させられました。一泊だけでしたが、班別討論などで多くの方々と語り合う機会が持てて、有意義な時を過ごすことができたと感じております。

「和歌の心」に触れた

（福岡県立筑紫高等学校 田中昌道）

日程表を見て、短歌創作・相互批評の時間が多いのには驚きました。しかし、実際に参加していく中で、適当なプログラムであったと感じました。和歌は今まで我流で、しかもほとんど創作していませんでしたが、「和歌の心」に触れたように思います。講義も「日本人の育成」「日本の心」「日本とは何か」というような視点が含まれ、充実していました。

運営される方も、滞りなくスムーズに指揮されていて、感謝しています。また、班単位の行動を通して、班員全員との

心の交流もできたと思います。最後の「夜のつどい」の寸劇は、もつと時間があればよかったと思う程でした。いろいろとお世話になり、感謝しております。ありがとうございました。

夜のつどいに参加して

いやだなあといふ高瀬氏は寸劇にはまりて我を忘れゆくかな

印象深かつた講義

(尚綱学園尚綱高等学校 教諭 井上剛毅)

徳岡孝夫先生の話をお伺いして、覚悟を持って生きることができたら、素晴らしいだろうと思いました。徳岡先生は、覚悟を持ってベトナムに行かれたと思いました。志賀建一郎先生の話も聞いて、ジュネーブ条約などは、少しは国民も知っておかなければいけないと思いました。小堀桂一郎先生の話では、文化は譲れない、個の確立が大切、ということが印象に残りました。

十七条憲法は素晴らしい、戦後教育はなつとらん、という話がありました。大切なのは、今後二度と戦争を起ささないためには、憲法はどうあるべきか、教育はどうあるべきか、考えることだと思いました。

白熱した議論をされる人を見て吾れの知識の不足を嘆く

短歌の会を今後も続けてゆきたい

(福岡市立香椎小 教諭 是松秀文)

初めての社会人班でしたが、とても楽しく四泊五日間を過

すことができました。特に短歌相互批評の時間は、短歌の一つ一つの言葉に皆で心を一つにして迫ってゆく体験を久しぶりにして、短歌の会を今後も続けてゆけたらと思ひました。「短歌導入講義」の時間、本当に自分が感じた思ひを生きた言葉で語ってゆくことの難しさを痛感しました。自らがまづ短歌を詠むことを継続すること、そして短歌についていろいろな本を読んで幅広く奥深く学んでゆくことをしてゆかうと思ひました。

教職に就いて久々の全日程参加。学生の頃のあの新鮮な感動を再び取戻すことができました。今回の合宿は冷房のきいたホテルではなく、当初は暑くて過しにくかったのですが、だんだん涼しくなつてきて、天然の風が講義室に入つてきて、とても爽やかな気持ちで講義を聴くことができました。何といつても気持ちよかつたのは朝の散策です。本当に体も心も清められました。周りが緑一杯の大自然に囲まれてゐるといふことが実に素晴しかつたです。

夜の集ひの折に

丘の上に登りて空を見上ぐればあまたの星は輝きにけり
かの丘ゆ月のやうやく登りゆき照らし給へり吾らの集ひを

充実した数日間であつた

(福岡県立香住丘高校 教諭 藤 寛明)

充実した数日間であつた。社会人班に入るのは初めての経験であつたが、班員が皆活発に意見や感想を出し合ひ、有意義な時を過した。教員が多かつたので、食事の時間や就寝前

に職場の状況を話合ったりした。数々の問題点があり、何とか対処しなくてはならないと思ひ乍らも立ちつくしてゐる感があった。

徳岡孝夫先生の覚悟についてのお話をお聴きして、自分の職場での問題に對して、小さな事であっても覚悟を決めて取組んで行く勇氣を与へられたやうに思ふ。また、志賀建一郎先生のご講義では学校で教へられてゐない事は何か、歴史を蘇らせる力、時代の状況に敏感に對応する精神等について力強く明解に教示して頂いた。

“ 国 ” のいのち “ の継承に努めたい ”

(福岡県立筑紫高校 教諭 黒岩真一)

六年ぶりの合宿参加となりました。ここ数年、仕事に埋没してゐるうちに理想や気分が失せていくのを感じてをりました。一方でわが国の政治、経済の混乱、特に私の關つてゐる教育現場での威力の衰退を感じつつも、その復興の方途に光を見いだせず嘆きやボヤキの多くなつてゐる情けなき自分の姿に焦燥感を抱いてゐました。

小堀桂一郎先生の御講義に続く質疑応答の時間、我が御祖らが神々への畏れと己の慎みを持つて生きて来たといふこと、又小柳左門さんが慰靈祭の説明の折り示された、生きとし生けるものへの共生の思ひや慰靈を通しての “ 国 ” のいのち “ の継承の在り方を再確認できた事が一番の収穫でした。現代日本の混乱の核心がこれらの欠如にあることも確信できました。” 国 ” のいのち “ の継承といふ己が努めに改めて気づ

かしめられた思ひです。

慰靈祭の庭で

歌々と照りさす月に根子岳や阿蘇の山影しるけく見えけり

朝の集ひのあとに

朝露にぬれし大阿蘇草原を語りつ登るは心愉しも

間違つたものを正してゆく勇氣

(福岡市立大原小学校 事務主査 奈田明憲)

今回の合宿は今まで参加した中で一番短く感じました。

徳岡孝夫先生と小堀桂一郎先生のお話を楽しみにしていましたが本当に良いお話でした。特に小堀先生のお話、後の談話室でのお話もそうですが、内容もさることながら、お近くで話を聞きお人柄も少し好きになりました。ご著書もこれから又どんどん読んでいこうと思います。

短歌相互批評並びに班別輪読も班員が皆遠慮せず意見交換できましたので充実していたと思います。最後の全体感想発表の時には、まだまだ真面目な学生はたくさん居るのだと感じました。

それからやはり、今から色々勉強していかなければならぬことは当然ですが、現在の日本を少しでも良い方向に持っていく為に、周囲に向けて具体的行動を少しずつでも取り、間違つたものを正して行く勇氣、覚悟があると思ひました。

全体感想自由発表にて

壇上で精一杯に胸の内語る若人頼もしく見ゆ

改めて活を入れられた合宿であつた

(熊本県立天草高校 教諭 今村武人)

参加して刺激となつた。日頃は学校の仕事に追はれ(そのほとんどが事務的なこと)また合宿で学習する内容についても語り合ふ機会に恵まれず、次第に近視眼的思考に墮して行く思ひを持つてゐた。改めて「活」を入れられた合宿であつた。

最初に拜聴した志賀建一郎先生のご講義は、最近の学校教育において教へられてゐる「人権教育」「平和教育」に触れられ、その学習の基礎となる「国民」とは何か「日本人」「日本民族」とは何者かについて徹底して教へられてゐない問題を指摘され、歴史の流れの中で考へる姿勢を強調された。特に平和教育については「平和を守る」といふ視点が欠けてをり、国際法(例、捕虜待遇に関するジュネーブ条約)の学習を訴へられた。

又小堀桂一郎先生は、青年にとつて現代は生きることに難しい時代で、志を持たないことへの問題、危機感を述べられた。その上で聖徳太子から大東亜戦争までの歴史を振り返り、日本人がいかにして日本民族の意識を確立してきたかを縷々話され、戦後日本の政治、文化上のゆがみ(安保条約の片務性、靖国神社の否定など)を正していく必要性について強調された。また我々の在り方として、日本人のアイデンティティについて語りうる人物になること、その意思を持つことを提言された。

両先生のご講義で共通することは、「人間」とか「国際人」とか抽象的な「人間像」を追求するのではなく、「日本」「日本人」とは何かしつかり地に足をおろして考へていくところに自己の確立があり、生きることの意味が生じるといふことだ。歴史伝統を否定した「個人」など存在しないといふことだ。これからまた学習を深めていきたい。

天草(本渡)を出発して

急がんと思へど車連なりて合宿の地には未だ遠かり

秋山先輩の姿に感動した

(熊本県立宇土高校 教諭 久保田真)

日頃は教師として、世界史選択者の受験指導、野球部の指導を行ひながら一日が過ぎていきます。併せて一〇〇名ぐらゐの、この生徒達がこれからいかに生きていくのか、何か大切なものを一つでも彼らの心に残せないだらうか、さういふことを考へる毎日です。ここから私の学問をしたいと思ひます。

レクリエーションの折に秋山先輩を見て

道探し走りまはりて世話される孤軍奮闘秋山先輩

我がことはおきても人のことどもを必死にされる秋山先輩

以前から全く変らぬ人柄にふれて昔を思ひ出しぬ

第二十五班—社会人—

新しい課題を背負った

(シューマツハ研究会 中西次男)

諸先生の講義は大体期待した通りでありました。志賀先生の講義内容が小生が今、研究しているのと酷似しているのが吃驚しました。

新しい課題を背負った重苦しい気持、そんな気持でいます。社会は精神だけでは存在できない。精神は上半身、下半身は経済体制、その下半身の部分を放っておいて社会は機能しません。シューマツハはそれをセットで唱えました。今の資本主義経済体制の中で日本人の精神をどう習合させるのか、その智慧、能力が日本人に問われていると思うのです。

キャンブの火の赤々と燃ゆるに照らされつつ老人と共に軍歌をうたふ

教育の貧困を感じた

(東北女子大学 會津明郎)

国民文化研究会の関係の方々が非常に誠実で人間的に立派であり、この事が参加した学生達に大きな感動を与えた最大の理由であると思います。この合宿教室の企画・運営が素晴らしい、特に徳岡孝夫、小堀桂一郎両先生の講義がよかつたわけですが、講義や講話に対する学生たちの質問や感想を聞いていると今の教育、特に歴史教育の貧困を強く感じています。

この研究会が今後一層学生たちへの歴史教育に取り組むこ

とを心から願うする次第です。

みどり濃き阿蘇の山脈仰ぎ見て心あらたにこの国思ふ

日本の現状と合宿教室

(元サンデン交通(株) 取締役 加藤善之)

例年の合宿に較べて、どことなく余裕が感じられたのはどうしてであらうか。緊張感が不足してゐるのであらうか。

日本国内外にわたる情勢の悪化、危機感が増大してゐるに拘らず、今年の合宿自体の中からは、それが感じられないのはどうしてであらうか。不可解である。各先生の御講義と関連があるのであらうか。

情勢は悪化してはゐるても、日本の、我々の進むべき道が最近になって明らかにされつつあるやうに感じられるからであらうか。現実には決してさうだとは思はれもしないのであるが。何か日本の国自体、海外情勢の中に好転のきざしでもあるのであらうか。分岐点に立ちはじめたのであらうか。わからない。疑問の残る合宿であつた。

朝みどり遙か波打つ大阿蘇の静けき様の永久なれと祈る

日本文化を護持する自覚

(元浄土真宗本願寺派 沼田組広隆寺 僧侶 岡棟 猛)

今回の合宿は健康上少し不安がありました。やはり来て良かったと思ひました。小堀桂一郎先生のご講義の中で、先生は最後に、日本文化を護持することは私達一人一人の肩にかかつてゐると言はれましたがこの言葉は忘れることができ

ません。この自覚は持ち続けて生活の指針にしなければなら
ないと思ひました。

ビデオ「天皇陛下とブラジル」は感動しました。日本の本
当の姿は今の日本には無くて、遠く離れたブラジルの日系人
の人達の間に在ると思ひました。この人達に学ばねばなら
ないと強く感じました。

日本の民と生れしよるこびをともしせしかなこの合宿で

八十と言う齡を忘れて参加した

(株公正不動産 代表取締役 安東祐範)

八十と言う齡を忘れて参加した今回の阿蘇青年の家におけ
る感想は以下の通りである。

一、講義の先生方の貴重なご講義の数々の内容。腐った今日
の世相に対し、如何にかもして心ある世の人々に伝えた
きもの。われらに出来る、その手段方法はなきものか。

一、各県別に、出来たら当初は如何に小さなものであつても、
郡、市町村毎に組織を作り出すことが、今日の行き詰り
の日本が些かなりとも展げてくる可能性なきにしもあら
ず、と思惟すること頻り。

斯様なサンプル的好事例がブラジル以前に日本の何処か
に現存しているのでは！

大阿蘇の緑燃えたつ学びやに集ふ若人の声高らかに

この会がいつまでも続いて貰ひたい

(市ヶ谷漢方クリニック 院長 桑木崇秀)

二五班は国文研の人が大半、国文研以外の初参加者も二名
あつたが、レベルの相当高い人のみで、恰も大学院課程のク
ラスの感があつた。

その中で小田村四郎先生の如き(布団の上げおろしまで)
全く他の班員と同じやうに振まはれる姿に感動した。唯今回
は若い人達の班に入って親しく若者達に接する機会になかつ
たことが少し残念であつた。

この会がいつまでも続き、真の日本建設の中核的人物を輩
出することを願つてやまない。

合宿最後の日

合宿もこれが最後か年老いて力ふりしほりて五日を終へしが
かにかくに命全うして五日間を終へし喜び胸にかみしめむ
ここに集ふ若き心一つにして真の日本をつくれかしと祈る

合宿中に創作された「短歌詠草」

—しきしまのみち—



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまうてをります。従って、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様にはれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分階級の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に和歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば和歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、和歌を詠むことを人生の修業の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、和歌を詠ひ交はすことによって、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。祖先の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に祖先の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく祖先とつながりをもつた日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重さが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作と其の後の参加者同士の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人間性を取り戻さうとする

試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、是松秀文氏（福岡市立香椎小学校教諭）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌しい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きはしほしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに布瀬雅義氏（住友電工株式会社）によつて、和歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもつて偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行なはれ短歌の表現を通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において寝食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

特に今年は合宿期間中に短歌の創作体験を二回していただき班員の心の交流がさらに深まりました。かうした短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。ここに載せた短歌はかうした営みの中で作られたものであり、合宿教室での生々とした肉声が聞こえてきます。また心と心の架け橋としての歌がまさしく参加者を実現されてゐることを、御読み取り下さればと念ずる次第です。

第一班

早稲田大第二文三 浦 義勝

班員のはしやぎし姿うれしくて思はず我はシヤッターをさる

(二回目の作品)

班員的那須君に寄せて思ふ

分からぬをあきらめずして問ひてゆくその姿勢こそ大切に思ふ

ふり向けば涙をぬぐふ姿あり美しき心持ちてゐまさむ

我が事を身内の様に気づかひて尋ぬるひとの尊く思ふ

長崎大教育三 外村 聖典

日の入りを見とどけてふとふり向けば雲より白き月出でにけり

(二回目の作品)

「天皇陛下とブラジル」を見て

祖国へのあふるる思ひをとどけんと涙流して同胞の歌ふ

へだたりし祖国なれどもブラジルに強き絆の今もありけり

九州工大情報工三 桑 木 康宏

阿蘇に来て不安なりしも班員といつしか心の打ち解けにけり

(二回目の作品)

早道と思ひて入れど草深く歩の進むたび足だるくなる

福岡工大工一 小林 広和

滝つばに遊びてメガネを落とせども気にもかげずに水に飛び込む

(二回目の作品)

壇上の先生方を目に浮かべ亡き祖父のこと重ねて思ふ

島根大法文二 那須 参

だいたい、くまひ 橙と紅に染まりし阿蘇の山に今日も夕陽のしずみゆくなり

(二回目の作品)

合宿に来たりてあひし先輩はいつにもまして大きく見えけり

福井工大工四 久保 博之

山の道歩みてゆけば水の音聞こえて心せかるる思ひす

美しく澄みたる水に誘はれて友と飛び込む我を忘れて

(二回目の作品)

大阿蘇の野ゆき沢ゆき滝に入り集ひし友と満足したり

朝早く体動かし汗をかき食べる朝食おいしかりけり

立教大文三 上村 隆倫

服を脱ぎ川に入りたる友どちを汗ぬぐひつうらやましく見つ

(二回目の作品)

小柳先生のご講義を拝聴して

天皇と國民の心一つになる國に生まれしをありがたく思ふ

第二班

早稲田大政経三 伊藤 俊介

受付で一年ぶりに友をみかけ思はず我は駆けよりにけり

(二回目の作品)

慰霊祭の折に

頭垂れ警蹕の声聞きをれば思ひもかけず戦慄走る

佐賀大理工四 和田 晃次

傾斜地の木々の重みを支へるあらはなる根の力強しも

(二回目の作品)

食堂の窓ゆかなたを眺むれば青き草原陽に映えて見ゆ

同志社大法二 折本 太郎

陽差し浴び坂を登ればたまに吹く草原の風心

にしみる

(二回目の作品)

寝ころべばふと目の前に髪とつめ消しゴムの
かすあり合宿四日目

麗澤大国際経済三 鈴木良登

與島先生の講義において

先人の守りし国の今に生くる我は第二の国民
として

(二回目の作品)

短歌創作

刻々と提出時間の近づきて言葉出で来ぬ我の
もどかし

東京大文Ⅲ一 濱田和範

阿蘇に来て草を喰む牛を眺むれば我が遙かな
る道をぞ思ふ

(二回目の作品)

風呂上がり外に出で見れば日は落ちて虫の音
いよよ涼しく聞こゆ

我一人佇む阿蘇の草原に虫の音響くいと涼し
げに

福岡教育大教育一 小島智

草原のどかに見ゆる牛の群れに一人近づき
触りたきものを

(二回目の作品)

うろたへる我に手を振る先輩の姿見出しう

れしかりけり

東京経済大経営三 松村希一

仲間らとボールをければ久しぶりのその楽し
さに心の弾む

(二回目の作品)

「天皇陛下とブラジル」を見て

開拓に世代重ねて勤しみし日系移民の姿に胸
あつくなる

福井工大経営工二 東山敏之

人気なき牧の中にも牛たちの命を保つか水飲
み場のあり

(二回目の作品)

日は昇りかなたに見えし白き雲に月の映えた
る青き空かな

第三班

慶応大商二 斎藤一 佐

幼き日を思ひ出しぬ偵察と緑の草原をわけ入
りゆけば

(二回目の作品)

山路来てふと見上げれば清き青我の心も澄み
渡るかな

福岡教育大教育一 小林国平

散策にて

「行けるさ」と道なき道を分け入りて友らと
進めばきづな深まる

(二回目の作品)

慰霊祭の月夜の下でなつかしき祖父を思ひて
頭を垂れる

「天皇陛下とブラジル」を観て

遠き地の若人達は日本の歌うたひゆく声さは
やかに

拓殖大商一 宮原壮平

見渡せば阿蘇の山なみ連なりて草原に吹くさ
はやかな風

(二回目の作品)

眠たさをこらへて講義さきゆけどつひに眠れ
る我を恥ぢをり

東京大理Ⅱ一 坂口精一郎

阿蘇の山美しき自然に囲まれて心開けゆく思
ひするなり

(二回目の作品)

大阿蘇の空気を吸ひて班友と汗を流せば眠気
さめゆく

長崎大教育二 益富孝重

帰り道に近道をしようと険しい道に向か
った折に

草のたけ胸までありてなかなか前へ進めず
不安になりたり

「また一つ良い思ひ出ができたね」と励まし
合ひて登りゆきたり

つかれしも班の友らがだんだんとまとまりゆ
きてうれしくなりぬ

(二回目の作品)

村崎道徳(日系二世) さんの手紙をよみ
て

日の本の心が人類の滅亡を救はむといふ言の
葉強し

母上の五十年前に言はれたることを忘れず君
生きこし

早稲田大商二 吉 田 洋 亮
緑濃く雄大に広がる大阿蘇の景色見下ろし血

潮沸き立つ

(二回目の作品)

教育勸語を拝読して

国民を我が事のごと思ひます大御心に触れし
うれしさ

第四班

京都大総合人問四 庭 本 秀一郎

合宿の地にて師を待つ

明日こそはなつかしき師にあふ日かな床の中
にて思ひ出に浸る

(二回目の作品)

金光君

目を合はせ話さむ意志を伝へくる君がまなざ
したのもしと思ふ

「思ふことそのまま言つていいですか」と口

ビーで我に問ひし君かも

はじめての合宿にきていけばかり心もとなき

思ひやしけむ

山道を歩み来たりて汗つかきの君は笑ひぬ目
を細めつつ

大林君

我よりも若くはあれど淡々と語りし君は頼も
しく見ゆ

教育の道歩まむと語りたる君の声には力こも
れり

磨井君

人見しりすると見えしも語らへば笑みを見せ
けり顔赤らめて

人見しりする君のことを、よろしく、と頼み

し君の先輩もたふとし

福岡県立大人間社会二 金 光 祐 治

初めから目をあはずこともなかりしが話して
みれば心かよひぬ

(二回目の作品)

外みつつ歌の題材探せどもみつからざりてつ

らき思ひす

日本大文理三 山内 曉生

心地よき風ふきわたる草原を歩みてゆけば疲
れ忘れぬ

(二回目の作品)

涼しさに時を忘れて門限の来たるを知らず鍵
かかりをり

部屋内ゆ明りもれくる戸にたちてたのみて入
りぬやうやうにして

法政大法一 山田 浩

朝礼にて国旗掲揚見たりて詠む

おごそかに響き渡れる君が代の調べに合はせ
日の丸昇りぬ

(二回目の作品)

慰霊祭に参加して詠める

月明かりそそぐ齋庭にみ祭りす古人に思ひは
せつつ

早稲田大第一文二 磨井 慎 吾

山道をゆく班友の背を見つつ汗拭き歩む追ひ
つかんとて

(二回目の作品)

慰霊祭にて

祭文終り頭上ぐれば根子岳にさやけき月のか
かりたる見ゆ

九州大法三 星原 大輔

下りゆく道のかなたに学び舎の日の丸風には
ためきて見ゆ

(二回目の作品)

ビデオ「天皇陛下とブラジル」を見て
ブラジルゆ遠く離れし日の本を「祖先の國」と
言ふ若人らは

父母の「教育勅語」受け継ぎ母國に生きてゆ
かむと語る女子は

日の本の精心を言葉にはつきりと語らふ姿に
たのもしさ覚ゆ

京都外国語大外国語二 大 林 尚 史
高岳の雄々しき姿眺むれば自づと心洗はるる
思ひす

(二回目の作品)

映画「天皇陛下とブラジル」を鑑賞して
ブラジルに渡りし人の國思ふ高き誇りを持ち
たし吾らも

第五班

東京大大学院修士一 東中野 多 聞
懐しき阿蘇の山々眺むれば二年前の思ひ出だ
さる

(二回目の作品)

ブラジルの日本語学ぶ人々の祖国思はるる氣

持貴し

下関市立大経四 藤 原 平 安
海原のうねりのごとく緑なす阿蘇国原をあか
ずながむる

(二回目の作品)

「天皇陛下とブラジル」のビデオを見て
日の本のコーラス歌ふ若きらの瞳は清く我に
迫れり

福岡教育大教育四 宮 原 和 久
山々に囲まるる阿蘇はみどりなすがめてを
れば心澄みゆく

(二回目の作品)

小柳先生の御講義で教育勅語を拝読して
君臣の心を一つにし歩み来し歴史に「教育の
淵源」はあり

「中外に施して悖らず」と宣明す言の葉いと
ど堂々として

「汪洋と大海の水」流るごと堂々とせるしら
べなりけり

島根大教育四 三 島 明

風呂呂出でほてる体にさやさと阿蘇の夕風
ここちよきかな

(二回目の作品)

天皇陛下とブラジルを見し折に
ブラウン管ゆ聞き覚えあるコーラスの流れ出

づるを懐しく聞く

かつて吾も歌ひし歌を日系の友は歌ひし母國
の言葉で

身をゆすり声高らかに歌ひたる日系の友の瞳
は輝きにけり

歌ひつつ涙ぐみたる友を見て吾も目頭熱くな
りたり

ブラジルと日本遠く隔つれど同じ祖國に生ま
れし友かな

慶應義塾大法一 齋 藤 崇

カルデラの阿蘇は周囲を取り囲み野へ行く友
等も小さく見ゆる

(二回目の作品)

朝明けの阿蘇山見むと思ひしが目覚めし時に
は日は昇りたり

福井工業大工一 福 井 剛 師

阿蘇山のカルデラ目にしてその規模に息をの
みたり富士にくらべて

(二回目の作品)

班友と語らふごとにお互ひの心かよひて楽し
さおほゆ

この集ひ明日おはるともいつの日か再び来む
と思ふがうれし

第六班

早稲田大第二文二 松 下文彦

四方より耳を澄ませば聞こえるセミの声し
げし合唱のごと

(二回目の作品)

ビデオ「天皇陛下とブラジル」を見て

「本当に御苦勞様と」陛下より賜りしときの
喜び語る

皇室をおのが心の支へとし生きてこられしい
たづき思ふ

拓殖大経営一 新崎 良介

まぶたとちねころびをれば草原をふさくる風
のこちよきかな

(二回目の作品)

輪になりて一人一人の意見聞けど意味のわか
らず一人黙せり

島根大総理工三 谷崎 紘史

草の香に幼き日々を思ひ出し胸一杯に息を吸
ひこむ

(二回目の作品)

志賀建一郎先生のご講義の折

期待して臨みし講義なりしかど資料忘れて困
り果てぬき

資料なき我に気付きてある人の一部をさつと
さし出してくれぬ

指揮班の方の気づかひうれしくて一層講義に

耳を傾く

九州工業大情報工二 荻田 俊一

草原を歩き疲れて立ちどまればわずかな風に
もすずしさおほゆ

(二回目の作品)

「天皇陛下とブラジル」のビデオを見て
今もなほ教育勅語を語り継ぐ心を忘れぬ日系
人も

我もまた勅語に学び日の本の誇りをもちては
げみゆきたし

金沢大理三 宮澤 冬樹

こかげにて目を閉ち耳をすませると葉ずれき
こえく虫の音と共に

(二回目の作品)

かたはらに小さく咲ける野ギキョウは風に吹
かれてさらに美し

(二回目の作品)

病床の祖母へ電話して
受話器口祖母の明るき声聞きて胸なでおろし
一安心す

(二回目の作品)

福岡教育大教育四 別府 正智

新崎君の班別研修を見し折に
「覚悟」との言の葉丸で幾度も困みつ御文
に見入る君はも

「わからぬ」と言ひてもしかと先生をみつむ
る姿にならひてしかな

(二回目の作品)

班別研修の折の班友を見て

いくたびも言葉つまらせ一つ一つ胸の思ひを
つたへむとする

思ふこと言ひあらはさむとけんめいに言葉選
びつとつとつと語る

徳岡先生の御講義を聞きて
国文研 茅野 輝章

覚悟せしものみだけに御神の御加護を受く
る資格ありとふ

我もまた己が大事を見定めて励みゆきたし怠
らずして

(二回目の作品)

(二回目の作品)

小堀先生の御講義を聞きて
若者の生きゆくことのむつかしき時代ときの再び
来たりてをりぬと

その昔進歩に遅れをとらざるが若きの使命と
されしと語らる

わが国を呪縛せしもの文明の普遍性より現れ
出しと

普遍なるもの求めしは建国の時ゆ我が国つと
めつづけしと

しかれどもキリスト教の排他性と独善性には
反発せしと

西欧の自由主義こそわが国の実践せしことと

のたまひたまふ

我が国の戦ひたるは自由主義とデモクラシーの要求なりしと

自らのアイデンティティの確立の大事なることと語られたまふ

おのおのが文化防衛の戦士なりと語られたまふ若きら前に

第七班

早稲田大政経四 田中裕一

バトミントンをして

「俺行くよ」と吾よりも先に窓開けて友はとび降り羽根とりくれつ

(二回目の作品)

ブラジルの日系人の方々のことを仰せられたる大御言葉を押して

「この人たちの自信の持てる日本に」とのらせ給ふも天皇陛下は

外つ國での勞きのりこえ生きる人の思ひをすべてしらせ給ふも

日系の人にも深くみ心をよせさせ給ふはありがたきかな

金沢大工四 濱田豊富

ファインダーを覗きたれども大阿蘇は広きに

すぎてとても撮りえず

(二回目の作品)

美しさ大阿蘇の景色ひとしほに心に染みぬ歌詠めばこそ

九州大工四 村上雅彦

一歩づつ登り来たりて見上ぐれば阿蘇の山肌大きく迫りく

(二回目の作品)

歌詠むと草原に寝ころびて心地よき風に誘はれ不覚にも歌詠まずしてうたたねしけり

佐賀大理工一 高橋宏太

山の向かふにいかなる景色広ごるかながめてみたき思ひつものりぬ

(二回目の作品)

天皇すめみかみの人柄語る人々見吾もぜひにも会ひたく思ふ

青山学院大経営一 川島正人

丘に登り小さき町を下にみて我の心も広がる思ひす

(二回目の作品)

吾言へば友言ひ返すやり取りに時を忘れて熱中しにけり

福井工業大工一 河村明

トレニアの花あちこちに向きて咲く一輪一輪

に心あるごと

(二回目の作品)

慰霊祭 かがり火の炎夜空をこがす中み祭りの式おごそかに進む

そかに進む

感想を求めらるるもいやつよく心うたれて言葉出でこず

国文研 北村公一

幼子の小さき手を振るさま見れば家に残せし吾子を思ほゆ

(二回目の作品)

ビデオ「天皇陛下とブラジル」を見て遠つ國の大地耕し生きて来し人らの顔に深き

皺あり

すめらぎのさし出されし御手を握る人らの気持ちいかにあるらむ

第十一班

福岡女子短大秘書二 諫山由紀

班室ゆふと外見れば夕焼けのあかあかとした空に気付きぬ

(二回目の作品)

長内先生のお話を聞きし折に

日の本の文化は自分自身だとみ声を大に師は

のたまひぬ

吾の姿見れば日本の良き文化伝へられしか問
はるる心地す

一時の正座する姿も日の本のをみな姿あら
はすことぞと

九州女子短大英文二 竹林 直子
散策で疲れし折に

見上ぐれば続く山道その先に青く映えたる先
輩のシャツ

(二回目的作品)

「よくなると思つて飲んでね」と我が班友が
四粒の薬我に賜けり

その葉班友の故郷では有名な代々伝はりし
良薬と聞く

銀色の粒飲み込めば何となく痛みやはらぐ心
地するかも

講義聞きつつ眠りてしまひし吾の腕をやさし
くゆするとりの友は

佐賀大教育三 橋 本 さつき
散策の途中休みし折りに

ふりかへり吾のかぶりたる麦わら帽子ほめて
くれたる後輩のうれしき

(二回目的作品)

ブラジル日系二世の村崎道徳さんの手紙
を見て

「日本語を忘るべからず」とかの母のいまし
むみ言葉心に沁みぬ

東北女子大家政二 久保田 響
我が班友と共に大阿蘇登りゆきかきたる汗の
すがすがしきかな

(二回目的作品)

まなざしのあつき班友らの言の葉は至らぬ我
の身にしみにけり

東北女子短大被服二 内 山 恵 里
山道を下りつつ我つまづけば友はすかさず手
を差し出す

(二回目的作品)

今日一日ありしことども思ひつつ我が友の顔
しばし見つむる

中央大総合政策三 岩 越 里 子
ビルの間に見慣れし空は狭けれど阿蘇の大き
深く広くあり

(二回目的作品)

昼下がりに友らと畳にねころびて寄せ合ふ枕
涼風のすぎゆく

東北女子大家政二 佐々木 由 枝
大いなる阿蘇の自然に包まれて笑ひ声まで吸
ひ込まれること

(二回目的作品)

講義うけ胸に感ぜしこの気持ち忘れはすまじ

いついつまでも
思ふこと述べむとすれど我思ひ言葉にならず
もどかしきかな

国文研 清 水 久仁子
バドミントンをせし折りに

風を切る音をたてつつせまりくる羽をおひか
けラケットをふる

友どちの打ち上げし羽を見上げつつ力のかぎ
り飛び上がりたり

(二回目的作品)

阿蘇の山道にて
先生の指につかまり止まりたる赤きトンボの
すがた可愛ゆし

第十二班

東北女子大家政二 高 橋 沙都子
友どちと来し道のりを振り返りよく登りしと
我驚きぬ

(二回目的作品)

友どちと母の思ひ出語り合ひ時がたつのもし
ばし忘るる

青山学院大経営二 小 川 美 和
雄大な阿蘇の山々眺めをれば時のたつのもし
ばし忘るる

(二回目の作品)

班員の語るを聞けば我もまた心豊かになりたしと思ふ

東北女子短大保育二 井手 千尋

ひびきの鳴く声聞きつつ阿蘇の山眺めてをれば
疲れ忘らる

(二回目の作品)

夜は更けて満月高く昇りゆき阿蘇の山なみ浮き出でて見ゆ

東北栄養専門学校二 一 戸利 香

白き雲みどり豊けき阿蘇にたち来しかひあり
としみじみ思ふ

(二回目の作品)

友どちの語る言葉に母思ふ真心こもり涙あふれつ

我もまた家を離れてありがたき母のことのみ
思ひ出さるる

福岡教育大教育二 相浦 佐知子

濃き薄きみどり綾なし広がれる阿蘇に照りつく日射しやはらぐ

(二回目の作品)

「天皇陛下とブラジル」を見て
日本の若者たちへ「夢の世界を」歌ふ二世
の瞳かがやく

夕暮れ空を見し折に

大阿蘇の広がる空にあかねさす雲の姿に心奪はる

班友と語り合ひたる楽しみの日に日に増しゆくことのうれしき

長崎大教育二 中園 まどか

生き方を互みに問ひあふ学問を御友と共に学ぶうれしき

(二回目の作品)

茜色の暮れゆく空は美しく友らと共にしばし
たたずむ

友どちと阿蘇の夕やけはるかにもながむる時
よいつか忘れむ

国文研 山方 富美子

草を踏み分け進みゆく山道に虫の音きこえ涼風
の吹く

(二回目の作品)

青年体験発表を終へて
発表を終へ部屋に帰れば次々に感想よせられ
うれしさこみあぐ

九州女子大音楽三 石松 知恵

山道を声をあはせて歌ひゆけば友らの顔に笑
みのひろがる

(二回目の作品)

「天皇陛下とブラジル」を見て
天皇を日々仰ぎつつはるかなる祖国の心を守

る人々

日の本を思ひ集ひし人々にこやかにして答へゆかるる

第十三班

東北女子短大生活一 伊藤 亜由美

ふるさとを遠くはなれてはるばると阿蘇の大地に友と立ちたり

(二回目の作品)

師のきみのよみ上げたたまふ大君のみ歌にたましひのふるへを感ず

長崎大葉一日 高秀子

茶谷さんの文章を見し折に
後に生くる子孫を思ふお気持ちのいと有難く
涙こみあぐ

(二回目の作品)

映画にてブラジル日系二世の姿を見し折
に

祖国より離れ住めども御祖らの心受け継ぎ生きる人らは

東北女子大家政二 小野 慶実

様々な人の気持ちに触れ合ひて己が心は開け
ゆくなり

(二回目の作品)

「異国にて辛き思ひに日を経れど祖国忘れぬ姿
尊し」

己がじし忘れし御国の尊さをブラジル移民の
姿に学ぶ

ブラジルに今なほ生きる大和魂永遠に残さむ
我が胸内に

明治大経営二岩 越 久子

大阿蘇の息づく自然にかこまれて夏を感じる
我そこにあり

(二回目の作品)

日程はきびしくつらき日々なれど内容濃くて
充実したり

かくのごと充実したる日々もあるを知らず過
ごせし夏の日くやし

東北女子大家政三 中野渡 えみ

緑濃き阿蘇の山々迫り来て雄々しきさまに胸
は高なる

(二回目の作品)

「天皇陛下とブラジル」の映画を見て
我が胸に自づ湧きたる大和魂ブラジル移民の
言葉を開きて

北九州大外国語一 西原 葉子

大阿蘇の夏の自然に囲まれて晴れ渡る空のご
と心澄みゆく

(二回目の作品)

正座して班別研修終へたれど足のしびれに立
ち得ぬ我は

福岡教育大教育二 中丸 暁子

あなたより明るき歌声聞こえて見れば友ら
の姿ありけり

(二回目の作品)

朝講堂へむかひし折に

後輩ともみぢのうたをうたひつつ講堂へむか
ふ足どりかるし

東筑紫短大食物栄養一 野口 純子

そそり立つ険しき山のみもとには青一面に圃
広がる

(二回目の作品)

国がらを守らむとして戦ひし先人の御霊忘れ
ざらなむ

国文研 岡

つぐみ

歌うたひ山道をゆく班友の楽しき声に疲れ忘
れる

(二回目の作品)

ビデオ「天皇陛下とブラジル」を見て

ブラジルに移り住みたる人々を思ひたまひし
御心たふとし

思はざる天皇陛下の御行幸に服装忘れて迎へ
出でたり

第十四班

九州産業大学経四 小早川 多代
朝の集ひにて

友みなと体操しつつ深ぶかと澄みたる空気を
胸にみたくも

(二回目の作品)

短歌相互批評にて

うたを詠み友の気持ちに心よせ語り合ふこと
楽しかりけり

北海道大学農四 服部 泰子

ひたすらに歌を考へる横顔を友はパチリと写
真にとるなり

(二回目の作品)

山方富美子先生の体験発表を聞きて

壇上で母への想ひせつせつと語るその目の涙
美しくし

アピリティーニッケン 濱田 典子

ふもと見え我待つ友の姿ありて「おーい」と
呼べば手をふりかへす

(二回目の作品)

輪になりて己が気持ちを語らへば友の情にふ
れられしかな

残波ロイヤルホテル 上原 真紀
根子岳はふもとにつくまでそのままに姿を変

へず我を見守る

(二回目の作品)

早朝五時半スタートのジョギング

あけぼのに見えかくれする月の影我だけ見しと思はずニヤリ

(社)福岡県中経協 井手美絵

友の手をとりつとられつ登る崖遠く根子岳に雲かかる見ゆ

(二回目の作品)

夜の集ひの練習にて

出逢ふまで顔も見知らぬ班友と今では心をひらき踊らむ

伊豫豆比古命神社 近藤 加代子

あまりある緑の中よりすくひたるみつばの青さ貴方の青さ

(二回目の作品)

学び舎よ若人たちの励むさま我も続けて心動かむ

第二十一班

(株)オフィックス 鈴木智彦
皇国に殉ぜし英霊仰ぎつつ馳せ来たるかな阿蘇の館に

(二回目の作品)

外国で信頼受けし同胞のたのもしき姿朋友に見せたし

拓殖大卒 作山 徹

大阿蘇の雄々しき姿眺むれば心あらはれずがすがしきかな

(二回目の作品)

ビデオ「天皇陛下とブラジル」を観て

異国へと移り住みたる人々は今も変はらず祖国思ひて

村崎道德さん(日系二世)の手紙を読み
て

同胞よ目覚めたまへと呼びかくる熱き心に我応へなむ

福岡県中小企業経営者協会 安徳和樹

秋まだき草原の上ただ一匹赤とんぼ飛びなつかしきかな

(二回目の作品)

慰霊祭が終つて

満月の下でいたたく直会の神酒はいともうましと思ふ

日本植生(株)四国支店 青木正行

蛇口よりふきだす水の冷たさにハッと目覚めし合宿の朝

(二回目の作品)

早朝の散歩にて

朝の日にはえる草むら眺むればスツクと伸びたるナデシコの花

陸上自衛隊業務学校 齋藤肇夫
帰りきて一目散に駆け込めばあびるシャワーに疲れ忘るる

(二回目の作品)

「天皇陛下とブラジル」の映画をみて

母国想ひ勅語の言葉忘れじと励む教師の高き思ひは

名札みて「自衛隊か」とにこやかに声かけける班友と語らふ

小堀桂一郎先生の御講義を顧みて
民族の文化を護る志ざし胸にきざみて故郷に帰らむ

国文研 山田幸治

あさつゆを豊かにふくむ草はらをふみしめゆけば心すがしも

(二回目の作品)

「天皇陛下とブラジル」を見て

外国で目を輝かせいきいきと学びし日系人らを美しと見ゆ

小柳先生ご講話
いにしへの人の心にあふるのがまづはじめと熱く語りき

永^{ながさね}争らひとつひとつの言の葉に心血そそぎし
教育勅語

昼休み先生と廊下でお会ひして

「どうでした」と師はひかへめに我に問ひ
「よかったです」と我は応へり

「勅語二度班友らと朗読せしあとで語り合ひ
し」と我は告げたり

目を細めほほ笑みたまふ先生のお顔を見ると
うれしさこみあぐ

いたらざることはかりなれど自らのできるこ
とからなさむと思ふ

漸くに歩む道あり皆笑顔おもき足どりかるく
なりけり
(二回目の作品)

慰霊祭

先人の御霊慰めのみ祭りに友らと集ひ遺徳偲
ばむ

早朝

大阿蘇の澄みわたりたる朝空に飛びかふツバ
メの姿雄々しき

阿蘇の峰紅く染めにし天津日は太古の昔もか
くてありなむ

国文研 浜田 實

(二回目の作品)

映画「天皇陛下とブラジル」をみて

母国^{くに}思ふ日系ブラジル人の熱きこころに感き
はまりて涙止まらず

伝統を守り来たりし百余年受け継ぎし人の苦
勞を偲ばむ

両陛下に旗振る子らの瞳には日の本思ふ美し
さを見る

今上陛下(皇太子殿下) 昭和三十六年フ

ンシャルご訪問

過ぎし日に陛下は思ひ立ちフンシャルの人
を励まさむと訪ひたまひぬ

国文研 古川 修

大阿蘇の緑さやけき草原にトンボ群れ飛びそ
よ風の吹く

いく度も来たりし阿蘇の山々をこししも友ら
と仰ぎ見るなり

根子岳は佛の顔に似たりてふ友らの声のはづ
み高なる

根子岳高岳中岳と連なる山並み美しく阿蘇の
五岳は神々しきかな

(二回目の作品)

八月十日(四日目) 早朝

今朝もまた空澄みわたり大阿蘇のつらなる山
並み美しきかな

稜線のくつきり浮かぶ高岳は絵葉書に見るア
ルプスのごと

登りくる朝日は山に照り映えて佛舍利塔の白
く輝く

第二十二班

国文研 伊 佐 裕

真夏の根子岳を眼前にして

頂きを白雲昇り流れ行く深き緑の山塊雄々し

靖國神社 久野 和穂

大いなる阿蘇の自然に抱かれて友等と学ばむ
この合宿を

(二回目の作品)

慰霊祭を奉仕して

篝火の消されし浄^{やみ}闇にみ魂呼ぶ齋^{ゆは}庭を照らす
月あかりかな

九州日植(株)熊本支店 川 上 治喜

我が友と語らひながら大阿蘇の空に輝く星を
見しかな

(二回目の作品)

講義室にて

学生の真摯に取り組む姿見て我も負けじと講
義聴き入る

日本植生(株)大阪支店 齋藤 典祥

草原ゆ見下しをれば聞こえくる若人達の楽しき歌声

(二回目の作品)

雄大な阿蘇の草地に腰下ろし雲の流れをあかず眺むる

月光にさそはれいづれば青黒く浮かび上がれる阿蘇の山々

新企産業(株) 笠 島 健

草原に寝ころびをりてふと見れば慎しく咲く小さき草花

(二回目の作品)

通り雨熱き路面を濡らせしもすぐに消えゆき涼しさ残す

国文研 稲 津 利比古

草むらを分け入り登れば雄大な阿蘇の山脈迫りてぞ見ゆ

高原の道を歩めば緑濃き大展望ははるかに望めり

雲の間ゆ陽の幾筋も差し込みてもやに煙れる阿蘇の町静けし

(二回目の作品)

ビデオ「天皇陛下とブラジル」を観て、

今上陛下が皇太子殿下の折(昭和四十二年)、公式日程外にブラジル日系人開拓

地を訪れられ、昨年(平成九年)再び同

地をご訪問されたことを知りて

三十年前開拓地への訪問を一旦諦め給ひけり

とふ

フンシャルを訪ひたしとふお気持はご出発前のお忍びとなりぬ

突然の皇太子殿下の訪れに村人達はさぞ驚きけむ

村人はねぎらふ言葉賜りてもつたいなしと感

激せしとふ

日系人は老いも若きも沿道で「日の丸」打ち

振り陛下出迎ふ

少女からカトレアの花受け給ふ笑みをたたへて両陛下はも

とふ

国文研 井 坂 信 義

友どちとひたに山道登り行けば吹き来る風の心地よきかな

草原に坐りてをればをちこちゆ虫の鳴く音の静かに聴こゆ

久々に山路歩めばかつて共に歩みし友ら思ひ出さるる

(二回目の作品)

慰霊祭にて

霊祭る宵闇の中根子岳の上に昇りし月の清けさ

国のためのち捧げし先人の御霊慰む月の明

りに

○

をとめらが足をとどめてながめたる彼方の空

に茜雲照る

久々に出会ひし友は吾の歌を楽しみなりと言

ひくれしかも

中島さんの体験発表をききて

和歌つくる苦心の体験語りゆく先輩の顔晴

れやかに見ゆ

第二十三班

(宗)宮崎神宮 日 高 憲 司

緑濃き谷の間に大き岩あまたころがりぬ砂防

ダムらし

(二回目の作品)

慰霊祭を奉仕して

火の粉ちる松明のあかりにてらされて齋主の

姿淡くてらさる

松明のはじくしじまに祭文の声のひびきてか

すかにこたます

(社)福岡県中小企業経営者協会

諸 岡 広 人

坂道の頂に立ちて見渡せば山並みはるか続きたりけり

(二回目の作品)

流れゆく雲の影受け色変はる大阿蘇の緑美しく見ゆ

日本植生(株) 豊原 大介

山肌若きやまはぎ覆ひたり土の流れし後に伸びるか

(二回目の作品)

短歌創作を学びて

をちこちの目に映るもの歌にせむと知らず知らずに思ひはめぐりぬ

たちどまりここで一首とこころ踊るされど思

ひは歌とはならず

さはあれど我が心根の動くさまかく変はりしがうれしかりけり

日植緑地(株) 森岡 英司

我が友は一番目指し草原を真一文字にかけぬけていく

(二回目の作品)

慰霊祭にて

頭垂れ耳を澄ませば警蹕の低き響きに驚き覚ゆ

肥後銀行福岡支店 荒木 勇作

草原の道なき上を一文字に行きて他班をあまた抜きけり

(二回目の作品)

奄美大島民謡「ヨイストラ節」を聞きて

親の如頼みと慕ふこの我を心にかけてくれる人あり

語聞きて同じ想ひを見つけたり人の心はかくも似たるか

国文研 布瀬 雅義

はるかにもひろごる阿蘇の山原にひびき渡れる君が代の調べ

御祖らの守り来るか緑なすこの山原をうるはしと思ふ

(二回目の作品)

山方さんの体験発表を聞きて

友どちとつきあひできぬ生徒ありてその母に会ひ事情語りし

母親のつとめて子供と過しゆけば子の心根も直くなりしと

一人一人の子供の心を思ひやり直く伸ばせる御業貴し

国文研 藤新 成信

合宿で学ぶが如く会社にも友らとともに語り行きたし

国文研 坂本 芳明

小田村理事長のお話をききて
十とせ前本にて読みし先生の気概の今もわれにせまりく

悠久の国の理念に居るこそ国立て直す道とのおたまふ

国文研 濱口 知久

道に迷ひ地図を見れどもわからずに心あてなる方向に行く

(二回目の作品)

山方さんの体験発表にて

次々と舞ひ込む仕事いとはずに我の役目と先輩語る

与へらるる仕事にはげむころこそ大切なりと確かに思へり

第二十四班

国文研 是松 秀文

茶谷さんの遺書朗読を聴きて
遣されし和歌を詠みゆく友の声に亡き人の御声を聴く思ひせり

(二回目の作品)

山肌の一面茂れる草原の淡き緑のあざやかに見ゆ

さはさはと爽やかに風ふきゆきて草なびきたり緑の丘は

九州大学 高瀬 正仁

徳岡先生の御講義を聴きて

礼をつくし師に問ひかくる若きらに真の学まなぶやを見るこちする

(二回目の作品)

慰霊祭に参列して

月の夜に火の粉小さく散らばりてはたる火のごと消えゆきにけり

福岡県立筑紫高校 田 中 昌 道

歌詠めず大の字になり寝ころべば虫の音聞こえ風心地よし

(二回目の作品)

ビデオ「天皇陛下とブラジル」を見て

日の丸の小旗打ちふり迎へたるブラジル移民の心すがしき

ブラジルの移民のいらいきのばるる陛下のみ姿胸迫りくる

国文研 奈 田 明 憲

短歌創作の為、散策に出づ

高岳を見ながら友と歩みつつ時を忘れて語り合ひけり

(二回目の作品)

ブラジルに住む村崎道德さん(日系二世)の手紙を読んで

同胞たうほうに勸語のこころ訴へし二世の文に心ひきしまる

尚綱中学校 中 村 淳 一

学生時代の想ひ出

風鈴のこち良き音ねに手を休め慕ひし君の声を偲ぶぬ

尚綱高校 井 上 剛 毅

おだやかな口調の中に覚悟ある講話をききて生き方を思ふ

国文研 藤 寛 明

徳岡孝夫先生の御講義を聴きて

覚悟もて生きたる人に感ずるは畏敬の念と師はのたまへり

○

鷗外の高瀬舟を例に取り胸迫るがごと物語られし

貧しさと病ひに耐へかね弟は兄を思ひて死を選びたり

驚きて近寄り見れば弟の喉にカミソリ突き刺さりなり

カミソリの刺される喉ゆ息もれて我を殺せと兄に迫りぬ

弟の苦しむ姿にたまりかね刺さりし刃もて成仏させり

死にぎはの弟の命を己が手でとどめさす兄の胸のうちはや

第二十五班

国文研 加 藤 善 之

茜雲たなびく阿蘇の外輪山つらなりつづくを飽かず眺むる

いくそたび眺めし阿蘇の茜空また仰ぎ見る過ぎし思ひて

大阿蘇の山ふとところに迫らむと若き友らと登りゆくかな

(二回目の作品)

四十年の昔キャン普せし仙酔峡まると眼下まるとに眺む高岳のもと

懐かしき仙酔峡を見降しつつ阿蘇國原をゆくは染しも

敗戦後の日本の歴史を憂ふれば神代の昔思はるるかな

(二回目の作品)

悠久の大地に聳ゆる大阿蘇の姿尊しあかず眺むる

ほうし蟬鳴く音聞きつつ細道を峯を目指して登り降りぬ

峯つづきめぐる山山かすみ立ち友らと登る大阿蘇の山

阿蘇の山

(二回目の作品)

道の辺に小さき野の花咲きをりぬ大阿蘇の原
めぐり歩めば

明日ははや大阿蘇の地を離ると思へば惜し
まるこれの集ひの

シューマツハ研究会 中西次男
歌詠まむと暗き森をば抜けたれば阿蘇の草原
緑広がる

(二回目の作品)

慰霊祭

敵かにみ霊を招き皇国に殉ぜしみ祖ら安かれ
と祈る

阿蘇に登る

夏盛り風吹き渡る阿蘇の原なでしこ咲きてす
すぎそよげり

東北女子大学 會津明郎
大阿蘇に集ひし若さらに日の本の行く末託さ
ん共に学びて

(二回目の作品)

雲まつる齋庭ゆ見れば大阿蘇の山脈照らし月
は昇りぬ

国文研 桑木崇秀
雲は湧き雲は流るる阿蘇の山ひねもす見るも
飽くことぞなき

赤とんば夕べの空を飛び交ひて阿蘇は早くも

秋来るらし

われ八十路を過ぎ体力とみに衰ふるを覚
ゆ

再びは訪ふことなけむ四年前阿蘇に來し日は
なほ若かりし

日の本は今ぞ危ふしここに集ふ若きらよよく
努め励めや

(二回目の作品)

足もとゆ跳び立つバツタのいとしくて跳ぶ
先々をじつと眼で追ふ

戦場の壕で見つけし小さき虫のいのちいとほ
しみにしいにしへ思ふ

小さき虫とな言ひそいのち短くも無限のいの
ちいやつぎ生くるを

よき歴史伝へ來し国ぞさかしらに国のいのち
を亡はずなゆめ

事務局・写真班

久留米大附設高校 小柳雄平

阿蘇の夜

月光星もかきけすまぶしさで暗い夜空をほの
かに照らす

香椎第三中学 小柳マホ
バイトの仕事にて

蒸し暑く疲れを感じて外にでると静かな風に
心やはらぐ

筑紫丘高校 嶺 絵里香

食事の際に

バイキング友はトマトを一人じめ我はとなり
で恥づかしき思ひす

筑紫丘高校 諸賀学美

一日のバイトを終へて

仕事終へ疲れ果てども宿題をソフトンに入る
はずで深夜なり

文化服装学院 小野アリス

一人暮しの東京で家を出る前に

無二の友ここに居ればと目をつぶり思ひ浮か
べつつコートをはおる

九州産業大 赤星利江

あそ山でカメラ片手にかけ回りひとの儂さ身
にしみにけり

国民文化研究会

(株)宝辺商店・代表取締役会長

開会式小田村理事長御登壇 宝辺正久

そろそろと壇に進みし君の声力こもれり老い
給へども

み国の伝統そしりつづけし東大の正されざる
を見よとのらすも

熱き日のたださす阿蘇の丘の上風吹き通ふ講
堂にして

第二日草原散策

近々とひぐらしの鳴く林絶えて開くる空に高
岳の見ゆ

青草の阿蘇の山路を友とゆき熊本に病む友を
し思ふ

病む友がわれらに会はむと馳せたりしきのふ
のことをしくしく思ふ

憩ふ野に秋萩の花丈低く咲くがいとしと君に
告げなむ

朝、夕

郭公の声きこえけり朝もやにかくる森の遠
き方より

朝日子のかがやき出でて木がくれに根子岳の
尾根ひとり立つかも

高岳の黒雲の間の空いまし夕あかねして暮れ
てゆくかも

最終日

月残る朝の空に日の御旗ひるがへるなり風の
すがしさ

元九州造形短大教授 小柳陽太郎

合宿第一日朝

朝日かけたゞさす中をしづしづと雲は流る、
根子のいたゞき

高岳に雲はか、れど山すその稜線するどし朝
の光に

山肌を吹く風早みのぼりゆく日の丸の旗はた
めきやまず

合宿開催の時は迫りぬ久しくも離りし友と会
ふ時近く

亡き友も我が胸に來れもろともに力つくさむ
これのつどひに

外輪のかなた熊本の町にして病み給ふ友をし
のびやまずも

若松の友もなつかし早も癒えて合宿に來まさ
むその日待たる、

徳永正巳大兄、病軀をおして來会
思はぬに君は來ませり合宿を一筋に思ふ矢た
けごころに

にこやかに語りたまふみ声に力ありてうれし
きおもひわきいづるかな

禍つひをはらひ清めて逞しく蘇ります君と信
ぜむ

さかりゆく車の窓に手振らししその手忘れじ
時はゆくとも

○

思はざる急坂けはし張りわたすロープつかみ

てあへぎつ、ゆく

坂道はさらにつゞきて若きも吐息つきつ、

坂のぼりゆく

や、行けば道なだらかに木の間より高岳の姿
見えてうれしき

尾根にいづれば根子の全貌あらはれて山肌を

吹く風のすゞしさ

すでに遠く丘のかなたをゆく友のすがたも見
えて心はづむも

天地創成の神の業かも山肌もあらはにそびゆ
ごし高岳

元開発電子技術(株)取締役 長内俊平

徳永正巳さんへの便りに添へて

いかにますと思ひ馳せぬし肥後の友の訪ねき
ませしさまをさくかな

思ひのほかすこやかなりしと告げくるる友
(宝辺君)の言葉をきけば嬉しも

肥後の酒飲めよとわれに賜はりし瓶をいだし
てわれは帰らむ

妻への便りのはしに

ふけてゆく阿蘇の高原かそかにも虫のなく音
の枕にきこゆ

ひぐらしの声にあけゆく高原のしづけさ郷の
吾妹にもがも

あめつちのあけゆくしるしと鳴く朝のひろき

高原に沁みてきこゆる

○

あまた子ら集み来つれどわが孫の姿をみざる
が淋しかりけり

講堂中ピアノの音の流れくるをきくにも思ふ
わが孫のこと

「祐子さんは」と友らこもごも問ひくる、み
情嬉しくききまつるかな

慰霊祭

立待ちのおぼる月夜ののぼりきてみたままつ
りの斎庭をてらす

若きらが伐り来し竹にしめ縄を張りてつく
りし斎庭ゆかしも

高原をわたり来る風に垂ゆれてみ前のかがり
音たてて燃ゆ

天降りますみたまのなかにわが友（青砥宏一
兄）も交りて近くゐる心地する

心こめ営むみ祭りとときのまに終りて昇神の
警蹕の聲

ときの間のいとなみながらみ霊らと共にあり
たるまつりなつかし

拓殖大学総長 小田村 四郎

レクレーション

久しぶりに登る山道喘ぎつつ足踏みしめて歩
みゆきけり

尾根に出れば風草原をわたりきて涼気浴びつ
つ汗を拭ひぬ

みさくれば阿蘇の国原ひろびろと緑の稲田遠
くつらなる

外輪の山のかなたに薄青く九重連山霞み見え
たり

慰霊祭

この宵はさやかに月の輝きてみたままつりに
ふさはしきかな

みまつりの篝火燃えておごそかに阿蘇の夜空
を赤く焦しぬ

みいくさに敗れし日より五十あまり三とせと
なれど国立直らず

皇国の永遠の栄えを天かけるみたまに祈りつ
ころ一つに

合宿を終りて

この朝は空青く緑なす阿蘇の山並み美しく映
ゆ

しばしの間まがごと多き世を離れ正気すがし
き阿蘇に暮しつ

五日間共に学びし若きはふるさとさしてけ
ふ別れゆく

次なる代のみくにを担ふ若人の幸多かれと祈
りてやまず

(株)中央塩ビ製作会長 星野 貢

阿蘇山の山なみより吹き渡り来る朝風すずし
気持よろしも

目の下の丘の斜面に牛五頭草食む見ゆる美く
し絵の如

井手美絵さんの歌によせて
班友ら夜の出し物に心よせ歌ひつ踊りつ班内
にぎはし

○

合宿教室はや終りしか思ひ出はたゞぼうぼう
として夢の如しも

若々しき班員の姿ほのほのとまなこに浮かび
影したはしも

舞岡八幡宮宮司 關 正臣

八月六日（合宿前日）
今年亦参出来にけり新たなる力得しめと乞ひ
願ひつつ

見さけやる御空遙けく棚引きて白雲の群動く
とも無き

八月七日（合宿第一日）
爽やかに夜は明けにけり外輪の尾根遙けくも
見えわたりつつ

理事長の気魄かかぶり皇国を本つ姿にかへさ
む友よ

新時代の国の姿を示します明治の勅仰ぎ奉ら
む

八日夜 (志賀君の講義)

幾年か会はずりし友健やかに一時間あまり雄
叫びましき

九日夜 (慰霊祭場にて)

闇の彼方ほの明らむと見るままに大き月影昇
り來にけり

○
新しきいのち賜り今日はしも阿蘇国原を我が
下りゆく

元高千穂商科大学教授 名越 二荒之助
大阿蘇は太古の姿さながらに緑濃くはえ雲は
流るる

去年の夏訪ねし時の虫の音は今も変わらず
だき続くる

○
大阿蘇は生けるしるしか中岳の噴煙今も吹き
あげてあり

日の本の地熱は今も衰ふることなく伝はる若
き男子に

いつの日かマグマとなりて大空をこがすばか
りに吹かやむべきに

元佐賀県立佐賀商業高等学校教諭

故小林兄を偲びて

末次 祐司

共々に語らひ登りし山路に現に偲ぶ友のみ姿

○
薄暗き谷間の路を登りつめ思はず迫る高岳の
山

我に迫る大阿蘇のいのち身にうけて生きんと
思ふ身果つるまで

小柳先生の御講義をお聞きして

朗々と大御歌を誦み給ふ澄みたる声は講堂に
満つ

ひたすらに大御心をば偲びつゝまなこを閉ぢ
て聴き入りにけり

国民を忘れ給はぬみ心のかたじけなさに胸ふ
さがりぬ

小林國男兄を偲びて

よく似たる後ろ姿を遠く見て君居ますやと驚
きにけり

笑み浮かべわれを迎える懐かしき面輪も失せ
て悲しかりけり

月冴ゆる浄闇の中に霊招き君がみ魂は降りま
すかも

今は亡き君がみ魂を胸にひめまことの道に進
みゆかなむ

不動産鑑定士 松吉 基順

夏雲のかかれる高岳緑なす裾野の草原風にな
びくも

大阿蘇の緑ひろがる草原に吹きくる風の心地

よきかも

根子岳のこごしき岩山み佛の顔に似るとかあ
かす眺むる

阿蘇外輪つらなるかなたに薄あをく九重の山
なみかすみて見ゆる

○
大阿蘇に天降りたまへとみ祖らのみ霊なごめ
の齋庭をつくる

若きらと齋庭つくりつつ見あぐれば阿蘇の夕
空星のまたたく

うす雲のかかれど月の昇りきて照りわたるな
り阿蘇の國原

○
体調をくづせし吾をば友らみないたはりくる
るみ情有難し

次々に氣遣ひくるる友みなに励まされつつ安
らぎおぼゆ

いたはりの友らのみ言葉み祖らのご加護なる
かとただ謝しまつる

(株)千代田コンサルタント専務

上村 和男

すぎし日のなつかしく思ふはたとせあまりも
まみえぬ君の姿に

なつかしく友と語らひ草原をあゆみてゆけば
心なごみぬ

友の体験発表を聞きて

歌よむはむづかしけりと壇上に語るみ友はに
こやかにして

なかなか心に心の思ひ述べえぬとくるしき語る
とつとつとして

日々のことなりはひのこのくさぐさの心の
思ひ歌になりたる

歌よむは苦しかりてふ吾が友はいそしみつと
め歌集つくりぬ

慰霊祭

かゞり火の燃えさかる中おごそかにみ魂まつ
りのとり行なはる

斎庭^{さき}べに友のみ魂も集ひ来てわれらの祭みそ
なはずらむ

いつになく阿蘇の山々美しくおごそかに見
ゆ目かげさえて

○

大阿蘇は昇る朝日にてりはえて山波うるはし
雲のたなびく

大阿蘇のふもとに遊ぶ赤牛の朝のしじまに声
ぞ聞こゆる

合宿に集ひし若きら明日よりは学びの窓に帰
りゆくなり

神奈川県立平塚江南高校校長

國 武 忠 彦

夏草を踏みわけ行けばアザミありいばらを残
して朽ちはててをり

慰霊祭にて

去年の日にあひにし人は今は亡くその面影を
偲びまつりぬ

○

語らひし友と別れるとききたりまた会ひたし
と写真とるなり

語らひの足りぬ思ひを抱きつつ手を握りしめ
友と別るる

航空自衛隊生徒隊 村 山 寿 彦

をちこちの草むらの中ゆすず虫の声のしきり
に聞こえくるなり

すず虫の鳴く草原をわたりくる風はわが身に
こちよく吹く

○

高岳を真むかひに見て登りゆく道に乙女の歌
声ひびく

草原の道登りゆく乙女らのはづむ歌声たのし
げにきこゆ

○

満天に星のきらめく草原のキャンプファイヤ
ーの火はあかく燃えをり

キャンプファイヤーのあかりの中で乙女らと
声を合はせて歌ふはたのし

日本エネルギーサービス(株)取締役

澤 部 壽 孫

天つ日のゆたかにそそぎ濃き薄き緑しるけき
阿蘇の国原

大阿蘇の国原越えて渡り来るさはやかにして
うましこの風

徳岡先生を空港に迎へ車にて宿に向ふ
四年前まみえし時より健やかな大人のみ姿見
えて嬉しき

飾り気のなきお人柄そのままに語り給ひて楽
し山路は

○

ふたそま^{わたせ}二十余り六年ぶりにて合宿に来しとふ友と久
方に会ふ(合原俊光君)

過ぎ去りし日々たちまちに消えゆきて語らひ
会ひぬ昔ながらに

○

老いの御身^{おみ}ふるひたたせて合宿にはるばる来
ましし師の君たふと(小田村理事長)

○

ロープ張るけはしき道を登りゆく師と友どち
と声かけ合ひて

野間口行正兄を偲ぶ

はや三年蟬鳴きしきる真夏日に君逝きましし
悲しき日より

朝夕にふとおそひ来るかなしみよ語り合ひた
き君いまさずて

みまつりの時近づきていよいよに君の面輪の
浮びなつかし

八月十日、合宿最後の夕

さはやかに風吹きわたる大阿蘇の夕べかなし
くひぐらしの鳴く

八月十一日、「全体感想自由発表」を聞
きて

若さらの次々に立ち素直にて心のこもる発表
つづく

新しき学びの風のおこるらむと予感しにけり
発表聞きて

久留大学附設高校教諭 合原俊光

開会式に於ける小田村先生のお話を聞き
て

師の君のみ姿仰ぎみ言葉を聞けばあふれ来熱
き思ひの

み教への道につらなる不可思議の縁かしこみ
つとめゆきなむ

與島先生のお話を聞きて

笑みた、へ汗を拭きつ、胸内にあふる思ひ
語りゆく友

おのづから笑らひ生れくる語らひに友らの心
開かれゆきぬ

班別和歌相互批評

くり返し読みては語りまた読みて歌の姿の整
ひてゆく

おのもく心開きて若さらは語らひあへり時
を忘れて

みずまひを正して友は直されし歌読み終へぬ
さも嬉しげに

言の葉のいのち生れくる喜びに若き友らと
ひたる嬉しさ

ビデオ「天皇陛下とブラジル」を見て
とつ国に生きる心の支へとて故国日本を思ふ
人々

「ジャポネーズガランチーノ」とブラジルの
人々語るテレビ画面に

すめろぎの御言賜はり涙ぐみ胸つまらす老
ひし移民ら

終業式に教育勅語を拝読し「仰げば尊し」歌
ふ若人

いくたびも涙あふれ来日系の人らの思ひ胸に
せまりて

神奈川県立厚木南高校（定時制）教諭

語りつつ時に笑ひを交へつつ歩む若人すこや
かにして

居並びてポーズをとりし若さらはシャッター

の音にぞどよめき声あぐ

第一回班別短歌相互批評の折

詠みし友の胸中思ひつつふさはしき言の葉た
づねて額寄せあふ

なかなか言葉のいで来ずもどかしく思へど
皆で知恵をしほりぬ

やうやうにことのは出でてあらためて指を折
りつつたしかめてみる

おそるおそる声に出だして読みゆけばふしぎ
と歌の形となりぬ

うた詠みし友のいかにと顔みればうなづくさ
まにほつとするなり

「この歌ですつとしました」といふ友のみ声
を聞くはうれしかりけり

講義室裏の草原での最後の「班別懇談」
車座にすわりてこもごも胸内を語る面輪はは
れやかに見ゆ

それぞれに「ありがたうございました」と礼
をいふ直き若さらさはやかに見ゆ

なかなかに得がたかりける学問の道につらな
るをよろこぶがごとく

この夏も己れ自身をふりかへる機会にめぐま
れうれしかりけり

（株）講談社宣伝局長 磯貝保博

ビデオ「天皇陛下とブラジル」を見て

父母がしたふ陛下を二世らもほこりに思ふ姿
たふとし

まごころの通ふ思ひす二世らの熱き思ひの言
の葉ききて

新日本製鐵(株)プラント事業部長(囑託)

今 林 賢 郁

朝まだき緑を帯びて連なれる阿蘇山脈のただ
に美し

美しと見るにたちまち雲きたり高岳根子岳つ
つみゆくなり

雲去りて又ゆるやかな山脈と緑あらはれあか
ず眺むる

青年体験発表

一年の創作経験を基にして歌読む楽しさ語る
君はも(中島兄)

この母の娘(こ)に生れて良かったと語る言の葉胸
にしみいる(山方さん)

「冬の夜」は歌詞が良ろしメロデイもまた素
晴らしと皆で歌ひぬ(森田兄)

講義室での感想文執筆

若きらはいかなる思ひを書きゆくかコトコト
コトと筆の音する

おのがじし自立のほか道なしと思ひて進め
若き友らよ

中島法律事務所弁護士 中島 繁 樹

そそり立つ高岳のもと山道を我らの班が先頭
を行く

外輪の山々見ゆる広がる野原に座り虫の音
を聞く

○

日本語のこころ豊かな歌うたふブラジル国に
若き人らが

○

資料とて心づくしの文ぶみをいくつも我らい
ただきにけり

守るべき国の文化は我がうちにありと思ひて
生きむこれより

(社)国民文化研究会事務局長

山 口 秀 範

開会式を待ちつつ

我が書きし名札つけたる若きらの次々集ひ来
講義室へと

直前に体調くづし不参加を氣遣ひし学生(とも)恙な
く来し

弘前ゆ誘ひ合はせて申し込みし乙女らも見ゆ
明るき顔で

電話での勧めに応じて迷ひ断ち参加決めたる
友も来たれり

参加証を書きつつ思ひ巡らせし若きらにけふ
会ふが嬉しき

来年の運営委員長を山根清兄に要請せり
合宿もたけなはの夜に来年の集ひに向けての
語らひ始まる

幾人か運営託す候補者の名前上がりて絞られ
行けり

来年の合宿担当委員長を君に頼むと打ちつけ
に問ふ

忙しきなりはひ更に繁くなりその大役はと口
ごもる君

君ならで誰が果たすべき来む年に友ら集へる
合宿の長を

近々に転勤あらむその時は如何にすべきと迷
ひ隠さず

支へ合ひ扶け合ふ友全国に数多(かまた)ありせば起ち
給へ君

大役の我に勤まらばその次に後輩(とも)ら続くは易
からむと言ふ

君らしき慎み深きことばにて重き任務(つとめ)を引き
受け給ふ

新しき企てなども奮ひつつ語らふ程に夜は更
け行く

夜昼と積もりし疲れ癒すがに一陣の風部屋内
渡るも

建設省建築研究所地震防災研究官

大岡 弘

班別討論における長内先生の御発言に新鮮さを感じて

お人(おひと)を助け走りし外国(とこくに)の兵は偉しとズバリ一言(ひとこと)

副司会として号令のかけちがひしたるを恥ぢて

はるばると足はこばれし先生になせし失礼ただ謝しまつる

神奈川県立小田原城内高校教諭

原川 猛 雄

雄大な阿蘇の景色の広がりて沈みゆく夕日をあかずながむる

短歌相互批評の折に

つくり手の気持ちを含みて懸命に推敲すれども言葉浮かばず

苦勞して成りたる歌を友どちと声を合はせてくり返し読む

○

中島繁樹さんの体験発表を聞きて

にこやかに笑みを絶やさず語りゆく友の面輪は輝きて見ゆ

福岡県立柏陵高校教頭 志賀 建一郎

大阿蘇の広野に涼風吹き渡り掲揚台のかなた星のまたたく

福岡県立嘉穂高校教諭 小野 吉宣

絶景の阿蘇の五岳に見守られ合宿セミナー開くかしこし

広ごれるなだらの草原前景に雄大なるかな高岳そびゆ

師や友のあつきなさに支へられ合宿セミナー順調にゆく

若き日に思ひさだめしまごころを参加の友にひたに伝へむ

○

参加者の勇気引き出す願ひこめ我は語りぬ思ひのたけを

国立病院九州医療センター臨床研究部長

小柳 左門

車で合宿地に向ふ途次にて

大阿蘇の姿かすかに見ゆるかな夜空をてらす月の光に

合宿地めざして走る道の上の夜空に光る一つ星かな

たどりゆく暗き山道(やまみち)にこほろぎのなく声しげし大阿蘇の野は

月かげに照らし出されて高岳のごしき山根目にせまるかも

夜の道行けばあなたに今見えつ友らの集ふ宿の灯

○

日の本の国のもとゐるを獅子吼する友の言葉は天に響けり

真向ひの尾根に赤牛幾頭も動きを止めて草をはむ見ゆ

両陛下(ごうてん)下(くだ)ブラジル御訪問

おちこちゆはせ集ひ来し同胞は陛下(ごうてん)真近に旗振り迎へぬ

正装し陛下(ごうてん)見すゑるまなざしで身を乗り出して旗打ち振りぬ

年老ひしそのかんばんせに御苦勞のあとしのばれし深きしわ見ゆ

○

来年も参加したしとふ班員の短かき言葉に力わき来る

小野吉宣運営委員長の「合宿を顧りみて」木訥(ぼくたく)に時にはほほゑみ時に吠え我が心に訴へ語りぬ

合宿をやりおふせたる先輩のかんばんせ晴れて見るもすがしき

札幌西陵高校教諭 本田 格

赤蜻蛉(せせがたけ)赤き色見せ草を飛ぶ阿蘇高原の午後の夏の日

草むらに休む人ありひとときを歌つくらんと心静めり

慰霊祭にて

国柄を思ひて集ふ人々に美しき月傾ぶきてを
りぬ

ビデオ「天皇陛下とブラジル」を見て
外国のブラジルに渡り年を経て日本の誇り今
も忘れず

○
大阿蘇に集ふ人々国しのび星降る丘に出でく
つろげり

熊本市役所情報企画部 折田 豊 生
徳岡先生の御講義を拜聴して

その昔み国のためにとみ生命を捧げたまひし
人々を思ひぬ

ふるさとの知覧の基地を飛び発ちて征きし
人々を殊に思へり

遺されしうつしゑとみふみはただならぬ覚悟
の様を示してありけり

○
友みなと立ちて眺むる夕焼けは見る間に色の
うつりゆくかな

夏空にときめくばかりひとときのいろどりを
見せて日は暮れにけり

熊本県立教育センター研修主事

白濱 裕
高岳の猛き岩肌そひ昇る夏雲見れば力湧さく

も

山方富美子さんの「体験発表」

登校のかなはぬ生徒らに母のごとき情をそそ
ぎつとめこし君

「親思ふ心にまさる親心」初めて知りぬと君
は語りき

山口県立下松高校教諭 宝 辺 矢太郎
宮中歌会始のビデオを見る

預選歌に思ひもかけずあづかりしと乙女が胸
はふるへたるらむ

セーラー服の佐藤美穂嬢うやうやしくぬやせ
る姿けなげなりけり

講師の誦すこはねは神代のひびきかもたゆた
ふしらべ宮中に満つ

○
阿蘇国原うましこの野辺にみともらは並みて
霊まつるとき近づきぬ

祭壇の上にかかれる月清く斎庭に立ちて仰ぐ
かしこし

魂よばふのりごと低く流れ来て警蹕の声やみ
にとけゆく

天翔るあまたみたまの天降りまし身内のかた
くひきしまる覚ゆ

去年の夏丹沢の野辺のたままつりにお伴せる
師の今は亡きとは（小林国男先生を）

なつかしきお声は今に耳朶うつもふたたびは
きけぬさびしかりけり

○
満天の星降る野辺にふさわたる夜風すずしく
心足らへり

もえいだすファイヤーを囲み乾杯の声たから
かに夜空をつきぬ

次々とくりだす班の出しものに月影さしきて
シルエツト浮かぶ

神々のをどるさまかと思つるかもときをり荒
ぶる神も出で来ぬ

海上自衛隊技術教官室 鏝 信 弘
窓辺より

のどかにも尻尾振りつつ草を食む赤牛五頭窓
辺より見ゆ

夕光のはや傾むきし高原に心にしみるかな
なの声

夕映え
広ごれる雲朱に染み青々と澄みたる空に映え
て美し

山方富美子さんの「体験発表」

女手おんなてに育てたまひし母君いだちの労を偲しのび胸こみ
あげしと

幾年月育てくださされてありがたしとふ想ひを
手紙てがみにて母に送りしと

母君は涙流されて「育てたる甲斐のありし」と語りたまひしと

生みて良かりしといふ母の言葉に君もまた生まれしことの喜び湧きしと

早朝散歩の折に

高原の松の木の前に声上げて古事記を誦しまつりぬ

吹き渡る朝風涼し緑なす阿蘇高原にたたずみをれば

真澄みたる朝の空に有明の月のかかりて美しきかな

聞き入れば速く近くにさまさまの虫の鳴く音の聞え来るなり

久留米大学附設高校教諭 名 和 長 泰
遅れ来て講義レジメの封筒の重きにせかるるわが胸内かな

師の君のゑみなつかしく励ましのみ言葉たびて有難きかな

○ 大阿蘇の峰をよぎりて白雲のはやとびゆくを
あかずながむる

運営のいたづき多きを若き友のみ姿みては頼もしともふ

亜細亜大学総合企画部 平 楨 明 人

散策にて

見たせばまことに盆のふちのやう山はぐるりと囲むがごとし

山方先生の発表を拝聴して
学舎にながく通はぬ子供らの家庭のさまを語りたまひき

よき方にかはるる子らはすべてみな母の力のたまものなりとふ

家の内なべても母の役割はとて大きくあるとのべらる

これまでのわが身の上を振りかへり母にお礼の手紙を書けりとふ

母君は女手一つで四歳より今日の師を育てられしとふ

母君は「あなたを生んで良かった」と電話のむかうで涙聲なり

かく聞かば「生んでもらって良かった」とあらたな力の湧くとのべらる

ひたすらに子らをみちびく若き師にありがたきかなと頭をたるる

いつしかは師も良き夫とめぐりあひうまし子さづかり母となられむ

夜の集ひにて

玉もるりもかくこそとばかり輝ける阿蘇の空にぞあまたの星見ゆ

防衛施設庁総務部環境保全準備室

山 根 清

山道を語りてゆけば沢づたひ吹く風涼しく心地よきかな

久々に会ひ得し友ともうちとけて語りあひつつ山道をゆく

尾根づたひ草はむ牛もあらはれて山道ゆくは
楽しかりけり
慰霊祭にて

みいのちを捧げ給ひし人々の御魂まつりの厳にして

みまつりを行なひゆけばゆくまに己が心も清しくなりぬ

時の間の隔てを越えてみ国護る御魂をろがみまつりゆかなむ

與島誠史君の講義を聞きて
ふるさとを偲びて歌ふヨイスラの節室内にひびきゆくかも

壇上ゆ友の歌へるヨイスラの節しみ通るごと聞え来るかも

夜の集ひにて

山の端ゆ月も出て来て来ても大阿蘇の原夜に集ひす

(株)日本興業銀行市場投資調査部

小 柳 志乃夫

班長の分け進み行く草むらのあと辿りつ、
班友らと行くも

次第にも草のたけ高く斥候と進みし班長の姿
失せたる

ややしばし待てば班長戻り来てこれより進む
はあやふしといふ

下り来し草むら再び友どちと登りてゆくも息
あへぎつ、

志賀先輩のご講義を聴きて

日本はひ弱になりしと先輩は語氣も鋭く訴へ
たまふ

久々に登壇しませし先輩の言の葉強く響きわ
たれり

「夜の集ひ」にて

大阿蘇の夜空は澄みて星くづのあまた輝くを
美しと見つ

燃えさかる火をば囲みて草原に友らと集へば
心なごむも

様々の工夫こらせし出し物のつきつき出でて
楽しこの夜

合宿の一コマ一コマを面白く演ずる見れば心
楽しも

いつしかに東の空に十八夜の月あかあかと輝
きてあり

山根清兄

「運営委員長、引き受けることに決めたよ」
といふわが友と共に力つくさむ

合宿に来ざりし友とも力あはせ君もりたてて
進むと思ふ

北九州市立八幡病院・放射線技師

森田仁士

体験発表の準備の折

とつくにの人もたたる美しき唱歌の調べい
かに伝へむ

昭和十六年・二十二年の大改悪

国守る雄々しき心伝へたる言の葉無残に削ら
れてあり

山方富美子さんの「体験発表」

いとし夫病ひに倒れ幼な児の我を育くみし母
にてありしと

母君にあてて感謝の文を書き予ての思ひを投
函せしと

受話器より涙ぐみつつただひと言「産んでよ
かった」と母上語ると

「お母さんの子に生まれてよかった」と君も
涙で答へしといふ

壇上ゆ涙こらへて語りゆく君の姿の涙にかす
む

かくばかりたふとき話を身の上の似たる吾妹
に語り伝へむ

日産自動車(株)企画室 奈良崎 修 二

空港よりバスに乗り継いで合宿地に向ふ
晴れわたる日ざしの中を進みゆけば外輪山の
はるかに望まる

去にし日に友とのぼりし大観望をはるかに見
つ、合宿地に向ふ

宿舎より夕映えの空を望みて

見はるかす大阿蘇の尾根の山ぎはに夕映えの
空あざやかに見ゆ

志賀先生のご講義のをりに

壇上に進みゆかる、御姿を見守りをれば胸の
高まる

なつかしき師の顔もひさびさの緊張ゆゑか
こはばりて見ゆ

だんだんに声たかまりて師の君は熱き胸内語
りゆかるる

尊き言葉を失ひて今くにたみはひよわになり
ぬとうつたへ給へり

豪放なる大音声で語らる、師の御姿は去にし
日のま、

慰霊祭にて

暁々と月照らすなかみともらといつきのには
にしづかに立てり

月影のさしたるにはに朗々と師の詠み給ふみ
歌ひげり

事務局の諸兄の働さぶりを見つづ

夜更けまで心合はせて合宿の営みささふる

資料ふみづくり続く

ひたぶるに汗流しつづつ刷り文を整ふ友らあり

がたきかな

福岡県立筑紫丘高校教諭 酒 村 聰一郎

み祭の青竹求めアルバイトの生徒らとともに

山路を行く

学校の思ひくさぐさ語らひつゝ、わが教へ子ら

と歩くは楽し

合宿のよき記念にと根子岳を背にして皆で写

真撮りたり

小林國男先生を偲びまつりて

去年の夏七沢合宿でまみえたる大人の姿のな

きが寂しき

なにくれと我を案じてみ声かけ励ましくれた

る大人の偲ばゆ

合宿の導入講義のリハーサルに二度も来られ

しことぞ忘れじ

年若き学生らにもにこやかに語りかけ給ふみ

姿浮かびく

二十年前初めてまみえし学生の我にも親しく

声かけ給ひき

大阿蘇の合宿教室もつつがなく終はりしこと

ぞ報らせまほしき

熊本市民病院外科医長 福田 誠

散策にて

山間の道をのぼればひぐらしの声近くして風

も涼しき

山道をのぼりてゆけば高岳の赤き山肌真近に

みゆる

九大生体防御医学研究所付属病院

安藤 洋志

九重を越え山なみを抜け走り来て眼下に広がる

阿蘇のまちの灯

熊本中央病院循環器科医長

大嶋 秀一

「天皇陛下とブラジル」のビデオ上映を

見て

外国で祖先みなおやの思ひしのびつつ国の重きを為す

人々あり

日の本の民の誇りを礎いしづへに頑張りきたりと

同朋は言はれけり

日の本の若者達よ頑張れとのたまふ姿に身は

ひきしまれり

宝辺正久先生の御講話「ますらを」の

歌を拝聴して

ますらをの歌ひびきけり会場にしづけき風の

ふき流れくる

航空自衛隊中央航空通信群 神谷 正一

愛らしき萩の小花の咲き初めて山辺の秋の気
配感じぬ

早朝短歌相互批評を行ふ

あさまだき目の覚めやらぬやに班友は閉ぢし

まなぶたときにこすりぬ

「天皇陛下とブラジル」を観て

はからずも涙落としつブラジルの若き乙女ら

うたふさま見て

日の本の誇りを今も持ちをるとその乙女らは

語りたりしも

連日早朝の「短歌相互批評」を行ひて朝

の集ひに臨む

すがすがし朝とはいへど寝不足のだるき体を

引きずるがごと

背伸びせば前に曲ぐれば深呼吸をせばだるき

体も次第に目覚めり

熊本製粉(株) 吉村 浩之

国立阿蘇青年の家にて

夕暮れのせまる五岳の山の背を渡る夏風ここ

ちよくふく

こちよき風にかかれてたたずめば尾根の木

立にひぐらしのなく

喜多村純(福岡県警)と合宿で会ひて

四月前警察学校に入りたる君現れし夏の合宿

に

静悍なる面輪になりて現れし君の姿をたのもしく見つ

南国殖産(株) 京 田 清 人

徳岡先生の御講義を聴きて

かけがへのなき弟を失ひし喜助の思ひのいかにばかりかは
はればれと微笑さへも浮かべつ、罪を受けしとふこの若人は

志賀建一郎先生の御講義を聴きて

問題に直面せよと師の御声は厳しく講堂に響きわたるも

小堀桂一郎先生の御講義を聴きて

気概もて学びゆきたしふるきより伝へられ来しきしまのみち

安信住宅販売(株) 松 吉 基 光

「今はどこ」「もしもし」などと話しをる吾子らの声に眠気遠のく
吾子たちにはげまされつつ走り行く高速道路の長き道のり

○

大阿蘇の草原わたる涼風のこちよさをば最終日に覚ゆる

友らとの別れを惜しむかのごとく強く吹くなら大阿蘇の風

福岡県立春日高校教諭 與 島 誠 央

合宿導入講義

ひととせの月日をかけて準備せる発表の時今ぞ来りぬ

年明けて逝きにし父のみ霊にも届けと念じ遣

書読みまつる(茶谷さんの遺書)

ふるさとのなまりのままに民謡をうたひあぐればなんぞなつかし

発表を終へにし吾にかけたまふ友らの言葉に

疲れ消失せつ

山方富美子さんの体験発表を聞いて

育ちゆく教へ子のさまざま語ります君の話ようつ

つ見ること

父母の仲良くなりてたくましさ芽ばゆる子あり

りと聞くに嬉しも

教へ子の親子のきづな見るにつけはぐくみた

まふ母思ふ君よ

ちちのみの父なきあとも残されし家族やしな

ふつよき母とぞ

この日までではぐくみたまふ母君にいかにか感謝を伝へむとする君

心こめ文を送れば母君の涙声なるいらへあり

しと

あなたを生んでよかつたと言ふ母君の言葉に

生れしよろこび感ずと

とぎれつつ声ふるはせ話しゆく君の姿に目

頭おさふ

小林広和(弟、第一班・福岡工大)、小

林国平(兄、第三班・福教大)の両君、

「全体感想自由発表」にて相次いで登壇

す

この冬に神去りませる國男先生に聞かせたきかも二人の言葉を

弟は滝に飛び込みメガネ失せ友らの顔見えぬ

くやしき述ぶる

祖国離れブラジルに住む人々の国思ふ歌に涙

する兄は

國男先生孫の言葉を聞かせたまへ喜ぶ姿をみ

そなはしませ

鹿児島市役所 有 村 浩 明

朝の集ひのあと散策の折に

くさはらにまじりてあかきはなびらのかはら

なでしこうつくしく咲く

はなびらにあさつゆおきてすずしげに風にゆるるるなでしこを見つ

吾がむすめともにありなばなでしこを手折り

て吾れに見せむとすらむ

なでしこを手折りて吾れにうれしげにほほゑ

む吾子の姿うかびぬ

班別懇談の折、萩田君の言葉を聞き

己がおもひ語りいだすはこはけれど語りださ

ねば何もわからぬとふ

己がおもひ語りいだせば友らみな耳かたむけてくるがうれしとふ

思ふこと思ふがままに言ひてみむとふみうた思ひ出しぬ君の言葉に

うちつけに語る言葉にいきいきと心かよはず力生まれむ

小柳陽太郎先生の御講義を聞きて

ブラジルの日系二世ゆ寄せられしふみ朗々と師はよみたまひけり

「日本を消してしまつてはいけない」とふことば真直ぐにわが胸をうつ

ひのもととまことの姿わが胸にいきづきてあり守らざらめや

福岡県立八幡中央高校教諭 日比生 哲也

夕日

講義前夕日に染まる窓眺め色の変はるをしはし楽しむ

朝の集ひにて

草原の丘を登りて振り向けば大阿蘇の山彼方につらなる

「夜の集ひ」

燃えさかるファイヤー囲み歌に劇に興ずる庭に月出でにけり

（勸千葉県国際交流協会 秋 山 信之

レクリエーションの不手際

スタッフの一員として気付くべきことに気付かず悲しくなりぬ

日比生先輩と十数年ぶりに御話出来て

学生の頃の思ひ出先輩と語れば心かみゆくかな

最近の読まれし文のことなどの御話聞くも樂しかりけり

日比生先輩が学生の頃班長をされし折、班付の今林先輩から「君達は、四泊五日

共に過ごしましたね、一緒に勉強できて良かったですね、と、そんなことで終つてしまつて、本当にそれでいいのか！」

と、各々が本当に疑問に思ふこと、心からの言葉をぶつけ合ふことをしなくていいのかと微を飛ばされたことを語られて

合宿で一番苦勞をしるるのは班長たちぞと語られ給ふ

小堀桂一郎先生の御講義後の質疑応答を

拝聴して

目に見えぬいと高さものへの慎みと恐れの気持ちを宗教心とふ

人として生きゆくために慎みと恐れの気持ち育みたきかな

その気持ち育むために形をば得るがよろしと師はのたまひぬ

○

日々に書読み学び深めゆき来年もまた合宿に来む

福岡県労働部 古 川 広 治

思はずも手を合はせけりすみし空に浮かびし月の姿拝して

朝のつどひ後にあそぶ運営本部の先輩たちを見て

年を忘れ樂しさうに遊ぶ先輩たちの姿を見れば元氣湧きくる

ワープロがうてぬパソコンがわからぬと嘆くよりできる仕事を上げみつとめむ

○

我はまだ根性足らんとあらためて思ひ知らされし今夏の合宿

熊本地方事務局 徳 田 恒 稔

講堂へ通ずる廊下にて
挨拶を交せし学生の笑む面に合宿生活の喜び伝はる

「全体感想自由発表」を聴きて

我が胸の思ひを全て伝へむと言葉選びつつ語る友はも

（株）アキタ・アダマンド 真 田 博 之

妥協せず己が思ひを歌にすと励む友らの尊かりけり

(社)国民文化研究会事務局 亀井正弘
大阿蘇の外輪山の西の端に日は沈みけり夕焼け残して

帰途につく友を見送りて
また会はん強く我が手を握りしめ友は別れの言の葉残せり

北九州市役所 西山博文
てりつける日ざしをさけて牛たちは木蔭に集ひ草をはみけり

二年ぶりに合宿教室に参加して
ふたとせのときをへだてて大阿蘇の地に集ひたる学び求めて

久しくも合はざる友や先輩と声かけあひてなつかしさこみあぐ
指揮班員として

人々の力集めて開かるる合宿教室の有難さかな
「夜の集ひ」のキャンブファイヤー

もろとも心通はせ歌ひたる歌は夜空に響き渡れり
宗像市役所 高倉庸輔

合宿初日の朝、妻の実家にて
おっぱいを飲んでぐつすり眠る吾子を目に焼

き付けて阿蘇に向かひぬ
慰霊祭

静かなるおぼろ月夜の草海(くさうみ)に柏手の音響き渡れり
「全体感想自由発表」を事務局のスピーカーを通して聴きて

素直なる気持ちのままに「来て良かった」と語るを聴けば涙のこみあぐ
日本青年協議会 松岡篤志

徳岡孝夫先生の御講義
救出のヘリコプターまでダッシュせよと残りし人らに米兵は告ぐ

「走れざる」と仏語で語る一人の老人(おきな)ありて困りはてしと
米兵は老人のためをちこちに担架を探せど見つからずといふ

「私が老人と共に歩きます」と英国の記者が申し出でたる
共産軍の包囲せる中老人をへりに届けし記者の覚悟よ

慰霊祭
月影のさやけき阿蘇の山原に御霊なごめのうたさえわたる

日本青年協議会 大葉勢 清英
のどかにも草を食みたる牛たちの群を指さし

はしゃぐ友はも
九州に初めて来たる東北の友らの思ひいかにあるらむ
大阿蘇の緑の大地に広がりて心すがすがしく山登りゆく

「天皇陛下とブラジル」のビデオを見し折に
天皇をつねしたひとつつブラジルに尽くし来たりし日系人はも
最後の班別研修にて
かけがへなき時すごせしと友どちは涙ながらに語りたるかも
拙なかるわれらが歌も心こめ手直し下さる師ぞありがたき

合宿地に寄せられた歌

元・福岡教育大学教授 山田輝彦
近づく合宿を思ひて
死せる友病みて倒るる友あれど今年も続く合宿教室

新しき道必ずや開けなむつどひし友の熱き思ひに
大阿蘇の底つ岩根に燃ゆる火のとこしへにあれ国のいのちも

元・尚綱学園理事 徳 永 正 巳
阿蘇合宿

いまはしき世の禍事を正すべく若き力を合はせてしがな
徒らに亡国の兆あげつらふ輩の戯言退け拂ひてむ

いばら道進み行かむと誓ひたる五十年前をゆめ忘るまじ

国柄をただ守らむと戦止めし大御心を偲びまつらむ

合宿不参加お詫びに替へて

かくのごと長引く病と露知らで退院の日を待ち侘びをりしに

退院の後こそ癌との闘ひとはじめて知りて諦らめにけり

此の度は医師の奨めに従ひて無理はすまじと思ひ定めつ

四泊五日合宿参加は無理なれどせめて友等と一目会ひたし

はるばると海山越えて青森の友も来ませり懐かしきかな

「よう」と呼び「おう」と答へて心通ふ友の情の有難きかな

遠方ゆ友等集ひて語らへば憂忘れて心楽しも

日産自動車(株) 内 海 勝 彦

をちこちゆ集ひし友ら阿蘇の地にあまた学べる様のしのばゆ
去年の夏ゆ心くだきて今日の日を迎へし思ひいかばかりかも
ただならぬ世の様なれば日本の本行くべき道を学ばなん友ら

あとがき

例年になく不順な気候が続いてをりました
が、やうやく秋の深まりを感じる頃となりま
した。皆様にはその後いかがお過ごしでせう
か。緑深き阿蘇山麓で共に学び、語り合った
「合宿教室」から早や三ヶ月が過ぎようとし
てをります。この度やうやくこの『感想文集』
を皆様のお手許にお届けできる運びとなりま
した。この『感想文集』は、「合宿教室」の
最後に「走り書き」していただいた感想文と
短歌、さらに合宿中に作っていただいた第一
回目、第二回目の創作短歌を編集したもので
す。

編集作業は、まづそれぞれの班の班長又は
班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想
文と第三回の創作短歌を添削・編集してい
ただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のこもった文章・
短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは、
神経を使い、時間のかかる作業ですが、皆さ
んがお書きになった生々しい言葉に心打た
れ、同時に皆さんの緊張したあの時のお姿も
思ひ出されました。それぞれの方々に編集し
ていただいた編集方針は以下の通りです。

(一)「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを
基本方針としました。ただし、ページ数の関
係で執筆者のお心のうちが最も強く表現され
てゐると思はれるところを摘録いたしました。
文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持ち
を辿りながら、原文のニュアンスが損なわれ
ないやう慎重に加筆しました。なほ、「かな
づかひ」については、原文を尊重し、漢文及
び文法上の誤りについては訂正してをります。

(二)「短歌」について

今回の合宿では三回にわたって短歌をつく
りましたが、第一回及び第二回のは、全
参加者それぞれ一首以上を洩れなく巻末の
「短歌詠草」のところに収めました。またこ
の感想文の執筆の折につくっていただいた第
三回目の短歌は、それぞれの感想文の末尾に
入れました。感想文と同じく、文法上の誤り
等は訂正いたしました。

この『感想文集』作成のためには、班長及
び班付の方々以外にも多くの方々のご協力を
いただきました。お忙しいお仕事の中で、休
日や勤務終了後の時間を割いてご協力いた

きました磯貝保博、原川猛、小柳志乃夫、山
根清、福島徹男、野中盛、亀井正弘、土井郁
磨、茅野輝明、浦義勝、伊藤俊介、川島正人
の各氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この『感想文集』の「あらし」
作成及び第一回目の短歌の編集にご尽力いた
だきました国民文化研究会会員の諸氏に厚く
御礼申し上げます。またカメラ・レポートの
写真は九州産業大学の赤星利江さんにお世話
になりました。

いろいろな方々のご努力によって出来上が
った『感想文集』を、ご精読下さいませよう
切願してやみません。

読み進むにつれて、「合宿教室」の四泊五
日間の様々な経験が鮮明に甦ってくる事と思
ひます。三ヶ月前に阿蘇青年の家で得た感動を
単なる「思ひ出」に終はらせることなく、起居
を共にした、真に語りうる友との交流に、また
新たな学問の求道への出発点とされるやう切
に折つてをります。なほ、ご精読後には、是非
とも班長や班付の方々、班友に一筆お便りを
差し上げていただきたくお願ひ申し上げます。

〔資料〕

第四十三回 “合宿教室（阿蘇）” 感想文集

非 売 品

平成十年十一月十日発行

編集兼発行者

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

編集委員 奈良崎修二・茅野輝章

土井郁磨

東京都渋谷区東一丁目三十一番四〇二号
〒一五〇一〇〇一一

電話 〇三十五四六八―六二三〇
FAX 〇三十五四六八―一四七〇

